
ポケモン不思議のダンジョン 探検隊スカイズの物語

コーラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 探検隊スカイズの物語

【Nコード】

N3338H

【作者名】

コーラル

【あらすじ】

突然、ロコンになってしまった人間、エリー。

そして、探検隊に憧れるポケモン、イーブイ。

ある日の夕暮れ時の海岸で出会ったこの2匹は、共に探検隊を結成する事になり……。

これは、エリーとイーブイ・探検隊“スカイズ”の友情、そして時空を越えた冒険の物語。

プロローグ(前書き)

> i24271 | 967 <

表紙絵です！

プロローグ

ある嵐の夜…。

「うおっ！だ、大丈夫か！？」

辺りに閃光が走り、ある男が、隣にいた女の子に呼び掛けた。女の子は気を失っているようだ。

「あともう少し…！手を放すな！何とか頑張るんだ…！」

しかし、2度目の閃光が走り、握る手の力が弱くなってきた。

「くっ…！このままだと…！うわああああ…！」

2人は離ればなれになってしまった…。

雨と風が吹き荒れる海岸に1匹のポケモンが倒れていた。

「うつつ…ここは…？」

意識が朦朧としてきた。

「もう……だめ……。」 そのポケモンは、そのまま意識を失った…。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？
い。参考にさせていただきます！

意見があったら、言ってください

1話 夕暮れの海岸で（前書き）

作品のタイトル変えました。ぼちぼち更新していきます。

1話 夕暮れの海岸で

次の日。

前日の嵐から一転して、雲一つない快晴だった。そんな日の夕方、ある1匹のポケモン イーブイ がある建物の前でうろろろしていた。

「どうしようかなあ……。よし！入る！……………やっぱり無理……。」
1歩前進したのだが、またすぐ後退した。

「はあ……。何やってんだろ……私。今日こそは、勇気を出すって決めたのに……………」
深いため息をついたが、すぐ首を振った。

「いや！こんなことじゃダメだ！今日は、御守りも持って来たんだから！」

そう言うといーブイは、前に進み、格子がついた穴の上に乗った。
……………すると、下から甲高い声があった。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「ひっ！？」

イーブイは驚いて、腰を抜かしそうになった。そんなイーブイをよそにまた別の声があった。

「誰の足形？誰の足形？」 再び甲高い声が答えた。

「足形はイーブイ！足形はイーブイ！」

「ひいひいひいっ！？」 自分の名前を呼ばれると、また怖くなつて、穴から離れた。その後で、イーブイは再びため息をついた。

「はあ……………。本当に私って何やってんだろ……。」
イーブイは石のような物を取り出し、目の前に置いた。

「この遺跡の欠片さえあれば、大丈夫だと思っただけだな……………」
イーブイは今までで1番深いため息をつき、遺跡の欠片をしまった。そして、階段をトボトボと降りて行った。

「本当、自分が情けないよ……………」

そんな様子のイーブイを見ていたポケモンが居たことに、彼女は気が付いていなかった……………。

建物から離れたイーブイは、海岸に来ていた。

「わあっ。キレイ!!」

イーブイは目を輝かせた。

この海岸では、天気の良い日の夕方にクラブが“あわ”を吐くのがあった。そして今もクラブの“あわ”が夕陽の光を受けて、幻想的に飛び交っていた。

「やっぱりいつ見てもいいなあ。この光景は。落ち込んだ気分を慰めてくれる……………。また明日、再チャレンジしてみようかな。」

大好きな景色から元気をもらい、海から目を離れた。そしてふと横を見ると、海岸に見慣れない何かがあることに気が付いた。

「……………?何だろ、あれ……………」

イーブイは慎重にその物体に近づいた。

距離が近くなって、その物体の正体が判った。……………1匹のポケモンが浜辺に倒れていたのだった。

「うわわっ!?!だ、誰か倒れてるよ!?!」

イーブイは慌ててそのポケモンに駆け寄り、必死に呼び掛けた。

「ねえ!君、大丈夫!?!しっかりして!!」

そのポケモンは意識を取り戻しつつあった……………。

1話 夕暮れの海岸で（後書き）

次回は、主人公エリーが、本格的に登場です。

2話 出会い（前書き）

主人公、エリーの登場です！
つてます！

評価、感想待

2話 出会い

(ねえ！起きてー!!)

何処からか声がした。

うつすらと目を開けて見る。目の前には、心配そうな顔をしているイーブイがいた。しかし、そんな顔はこちらが目を覚ました事に気が付いて、ぱっと笑顔になった。そしてこう言った。

「良かった！気が付いたんだね！もう凄く心配したよ。」

「!?!」

朦朧とした頭が一気に醒めた。

イーブイが喋ってる!?!

驚いて、がばつと体を起こした。

「あつ、もう大丈夫みたいだね?」

「や…やっぱり喋ってる!?!どーしてあたし、イーブイの言葉が分かるの!?!??」

完全にパニックを起こした。一方のイーブイも突然発狂した目の前の“彼女”を再び心配そうに見ている。

「な…何訳の分からない事言ってるの?私の言葉が理解できるも何も…君だってポケモンなんだから、当然じゃない。ロコン。」

イーブイの言った、最後の言葉に目をパチクリさせた。

「え…??ロコン?」

「な…何?何か私、変な事言った?」

目の前のロコン(?)の反応に戸惑っている様子のイーブイ。

「変な事って…!当たり前じゃない!あたしは人間よ!」

怒る“彼女”に、イーブイは口をポカンと開けた。明らかに混乱している様子。

「人間って…。何を言ってるの、君。何処からどう見てもロコンだよ?」

「またそんな事…!だからあたしは…!」

目の前にシャボン玉がフワフワと漂って来て、自分の姿を映した。そこに映っていたのは、人間の顔ではなく、尖った耳にキツネ顔、さらには茶色の毛で覆われた自分の姿だった。

「う……嘘でしょ？あたし……あたし……ロコンになっちゃった！？」

ロコンが完全に動揺している傍ら、イーブイはその様子を怪しむように見ていた。

「君……怪しいね？もしかして私を騙そうとしてる？」

「そんな事する訳ないじゃない！」

それでもまだ、イーブイは疑惑の目でこちらを見ている。

「じゃあ、何処から来たのかとか、名前くらい名乗ってよ。」

「何処から？名前……？」　ロコンはしばらく考えた。そういえば、自分の名前は覚えているが………何処から来たのかは、全く覚えていない。

「思い出せない……。」

「え？」

「何処から来たのか全く思い出せないの！」

「ええっ!？」

今度ばかりは、心配そうな顔をしている。

「それって……記憶喪失って言うやつ……？」　ロコンは苦笑いした。

「そうかもね……。この海岸で気を失う前、自分が何処で何をやってたか全く思い出せないもの……。」

「……。じゃあ、自分の名前も覚えてないとか？」

ロコンは首を振った。

「いいえ。覚えてるわ。あたしの名前は、エリーよ。」

「エリーか……。いい名前だね！エリー、私の名前はイーブイ！……ってそのままだけど……。とにかくよろしくね！」

イーブイは目の前のロコン　エリー　に笑いかけた。

「え……？信じてくれるの？記憶喪失なんてそうある話じゃないし、

ましてや人間がポケモンになっちゃったなんて話、無いでしょ？
なのに……信じてくれるの？あたしの事……。」「戸惑うエリー
にイーブイは力強く頷いた。

「うん！君は嘘付いてない。君と話していたら、何となくそう感じ
たよ。」

「イーブイ……。ありがとう！」

エリーはニッコリと笑った。

「さっきは疑ってごめんね。最近何かと物騒なんだ……。」

「物騒？どうして？」「最近悪いポケモンが増えてるんだ。いきな
り襲って来るポケモンもいるしね……。」

「そうなの……。」

ポケモンの世界でもそういう迷惑な奴が居るんだな、とエリーは
思った。

……この時、自分達の背後で“たいあたり”を仕掛けようとして
いるポケモンが居ることに2匹は気が付いていなかった。

2話 出会い（後書き）

イーブイがエリーの事を信じたの、かなりこじつけですね……。スミマセン。

3話 海岸の洞窟（前書き）

最後の方、文章変だし、変な所で区切ったし……連載書くのって大変（@—@）

3話 海岸の洞窟

ドコッ！

「痛っ!？」

何者かがいきなり“たいあたり”をしてきて、イーブイはその場に倒れてしまった。

「イーブイ、大丈夫!？」 慌ててイーブイに駆け寄るエリー。

「おっと、ごめんよ。ちよつとぶつかつちまつたぜ。」

声が出た方を見てみれば、ドガスとズバットが気味の悪い笑みを浮かべて、空中に浮いていた。“たいあたり”をやったのは、ドガスだろう。

「貴方達ね?イーブイに“たいあたり”したのは。一体何の用なの?」

「オマエ達に用はないさ。用があるのは、こつちさ。」

そう言つと、ズバットは、翼で器用に落ちていた石を拾い上げた。

「うつつ……そ、それは……。」

イーブイは、少しよろめきながらも立ち上がった。

「そ、それは私のだよ!？か、返してよ!」

「返して欲しいのなら、力づくで取り返してみな。」 しかし、イ

ーブイは動こうとしない。それどころか、ガタガタ震えている。

「なんだ、コイツ。震えてるぜ。」

ドガスが意地悪く言う。

「へへっ。弱虫なんだな、オマエ。」

イーブイは悔し涙を浮かべていた。そんなイーブイを気にも止めず、

『じゃあな、弱虫君。』

と言いつ残して、ドガスとズバットは近くにあった洞窟へと去って行った。その後、イーブイは足の力が抜けてしまったかのように、ペタンとその場に座り込んだ。

「イーブイ……………?」

エリーが心配してイーブイの顔を覗き込む。イーブイは涙を流していた。

「うつつ…エリー。ズバットに奪われたあれは、私の宝物なんだ…
……………」

「そうなの……………。だったら、取り返しに行きましょうよ!大切な物
なんでしょ?」

イーブイは首を振った。

「む、無理だよ……………。あの洞窟は“海岸の洞窟”と言って、中は迷路
になっていて、ポケモン達も襲い掛かってくるんだ。それに、ア
イツらと出会えたとして、取り返せるか分からないよ……………」

「何言ってるの!貴方は、1匹じゃないわ。あたしも着いていつて
あげる!」

「え……………?」

イーブイは涙に濡れた顔を上げた。

「だってあたし達、友達でしょ?」

「エリー……………」

イーブイは、前足で顔をゴシゴシ拭った。

「ありがとう!私は、1匹じゃなかったんだよね。エリーと一緒に
ら大丈夫。行こう!“海岸の洞窟”へ!」

笑顔が戻ったイーブイを引き連れて、エリーは“海岸の洞窟”へ
と入って行った。

「行っけー!! “たいあたり”!!」

さっきの弱気な発言はどこへやら、次々と襲い掛かってきたポケモン達を倒して行くイーブイ。

なんだ。イーブイ、結構強いんじゃない。勇気を出せば、何だって出来る子なんだわ。

イーブイを見ながら、エリーはそんな事を思っていた。

「!...エリー! 後ろ!」

「え!」

イーブイに言われて後ろを見れば、カラナクシがこちらに向かってくる。

「え? え? え? ...? ...? ...? 技を使うのって、どうすれば...? とにかく、こつち来るなあー!」

そう叫び、口を開けると口から高温の炎が飛び出した。

のこ”だ。

“ひ

“ひのこ”が当たったカラナクシは黒焦げになって倒れた。

「凄い。水タイプ相手に“ひのこ”で黒焦げにしちゃったよ。」

「案外あたし、ポケモンとしての才能あたりして……。」

嬉しいような悲しいような微妙な気持ちでエリーは言った。

その時、前方から光が差し込んで見えるのが見えた。出口のようだ。

「あそこ……出口かなあ？」

「多分ね。行ってみましょ。」

エリー達は光の方へと進み、洞窟の外に出た。そこには、見覚えのあるポケモンが2匹いた。

「ドガース！ズバット！」 エリーが呼び掛けた。その声に反応して彼らは振り向いた。

「何だ。弱虫君、また来たのか。」

ドガースがせせら笑う。

「ぬ、盗んだ物を返してよ！あれは、私の大事な宝物なんだよ！」

「宝あ？へへっ。案外価値があるのかもしれないな。」

「ケツ。見た目じゃ分からねえモンだな。早速売り払いに行くとするか。」

「そんな……！それは、私のなんだよ！！返してよ！」

またしても泣きそうになりながらイーブイは必死に訴える。そんな彼女を見ながら、ドガースは意地悪く言い放つ。

「ケツ。返して欲しけりゃさつきも言った通り、力づくでな。」

「弱虫君に出来るかな？」

「うつつ……。」

イーブイは尻込みした。そんな彼女にエリーが優しく言った。

「大丈夫よ。あたしも戦うわ。それに、貴方は勇気を出せばとって強いだよ！アイツらをぎゃふんと言わせてやりましょ！」

「う……うん！わ、私戦うよ！あれだけは、絶対に渡せない！！」

イーブイはまだ弱冠震えながらも戦う気持ちは見せた。

「その意気よ。……よし！やるわよ！！」

エリーとイーブイはドガースとズバットに向かって駆け出した……

⋮
○

3話 海岸の洞窟（後書き）

アルセウス見てきましたよ！

エリー

「で？どうだったの？内容は？」

いや…それが……。

エリー

「？」

ほとんどずっとポップコーン食べてて内容が頭に入っていない……

（汗）

エリー

「何それ。」 呆れてる

また見に行こうかな？なんて（笑）

エリー

「勝手にしなさい。」

4話 名コンビ誕生！（前書き）

バトルシーンが大変だった……。

エリー

「でも、バトルシーンでいちいちてこずってたら、この小説書いていけないわよ？」

そうだよね……。でも、エリーが“ふういん”を覚えてくれたら、バトルシーンそのものを回避出来るかも、なんだけど。

イーブイ

「作者さん、それって……」（汗）

エリー

「ただの手抜きよね？炭にされたいの？」（怒）

それは嫌です（泣）

エリー

「なら頑張りなさいよね！」

あい、頑張ります（汗）

4話 名コンビ誕生!

「ひのこ”よー!!”」

奪われたイーブイの宝物を取り返すべく、ドガース、ズバットと戦い始めたエリー&イーブイ。まずは、エリーが“ひのこ”を放った。

しかし、彼らはエリー達と違い、空中戦が出来る。“ひのこ”は難なく回避されてしまった。

「今度はこっちの番だ! “どくガス”!!”」

ドガースは体にある穴から猛毒のガスを噴出した。

「わわわっ。あんなガス浴びたら、私達、毒に侵されちゃうよ!?”」

「うーん……そ、そうだ! 尻尾! 尻尾で扇ぐのよ!!”」

2匹は尻尾を団扇うちわのように使った。完全に吹き飛ばすとまでは行かなくても、“どくガス”を避けるのには十分だった。しかし

……

「きゅうけつ”!!”」

「!?”」

“どくガス”を振り払うのに必死になっていたせいで、ズバットが接近して来ていたのに気が付かなかった。

そして、吸血鬼のように、イーブイに噛み付き体力を吸い取った。イーブイは弱冠フラフラしていた。

「イーブイ!?”」

エリーがイーブイの身を案じるが………

「たいあたり”!!”」

その隙を突き、ドガースの“たいあたり”が迫って来た。

「エリー! 危ないよ!?”」

「えっ!?”」

イーブイが警告を送るものの、間に合わず“たいあたり”をまともにも食らってしまった。

「うつつ……。」

「ケツ。この先は行き止まりだし、さっさと戻ろうぜ。」

「へへっ。そうだな。」

行く手を阻む者が傷を負って動けない様子を見て、彼女達の真上を通り、元の道へと戻ろうとするドガスとズバット。だが……

「ま……待てっ!!」

呼び止める者が居た。振り向いて見ると、それはイーブイだった。なんだ、弱虫君。まだ何か用か?

「うん!! だってまだ……私の宝物、返してもらってないじゃない!!」

そう言うと、ドガスとズバットの所へと一直線に走りだした。

ドガスは慌ててその場を離れたが、ズバットは避けきれずイーブイ渾身の“たいあたり”を食らって気絶した。

「ズ、ズバット!!」

「“ひのこ”!!」

完全に油断したドガスにエリーの“ひのこ”が襲った。

「アチチチチチ!!?」 ドガスもまた黒焦げになって気絶した。

「やったあ」

イーブイは喜んでその場でピヨコンと飛び跳ねた。

「さあ! 奪った物を返してちょうだい!」

エリーが倒れているドガス、ズバットに詰め寄った。

彼らはよろよろと浮かび上がって奪った物を投げ返した。

「ケツ! こんな物、要らねえよ!」

ほとんど負け惜しみのような言葉を吐き、逃げて行った。

「戻って来た……。私の宝物……。」

感激で涙しながら、宝物を拾い上げた。一見するとその宝物はただの石ころみたいだが……。

「良かったね、イーブイ! ……でもそれただの石ころみたいだけど……?」

「石ころなんかじゃないよ！」

「あつ、ごめん……………」

イーブイが怒った表情を見せたので、エリーは慌てて謝った。

「でも、初めて見た人にはそう見えるよね。これはね……………あつ、こんな所じゃなんだから、外に出ようか。」

2匹は元の道を戻り、洞窟の外に出た。

「ありがとう、エリー。私がこれを取り返せたのは、エリーが傍に居てくれたからだよ。」

イーブイがお礼を言う。

「えっ？あ、あたしは何もしてないわ。一番頑張ったのは、貴方自身じゃない。」

「そ、そうかな…？何か照れちゃうよ……………」

エリーの言葉にイーブイは頬を赤らめる。

「ところで、この石の事なんだけど……………」

イーブイがさっきの石ころを取り出して、エリーに見せる。

「これは、遺跡の欠片って言うの。」

「遺跡の欠片？」

「そう……………と言っても私が勝手にそう呼んでいるだけなんだけど。」

てへへと少しはにかんだ。

「一見すればただの石ころだけど、よく見て？不思議な模様が描かれているでしょ？」

イーブイが遺跡の欠片をエリーに差し出した。エリーも顔を近づけてよく見てみる。

「ホントだ……………。不思議な模様ね……………。こんな模様、見たことないわ。」

そう言った後で苦笑いする。

「……って、記憶のないあたしが言っても信憑性がないけど……。」
イーブイが少し笑って、話を続ける。

「私ね、伝説とかそういう類の物に興味あるの。それでね、探検隊を結成するのが私の夢なんだ。」

「探検隊？」

「そう。未知なる場所、誰も行った事がない島……。そんな所を探検するの！そして、いつかこの遺跡の欠片の謎を解明するんだ！！」
イーブイが瞳を輝かせる。

「でも……。」

急に沈んだ声を出した。

「探検隊になる為には、まずギルドに弟子入りしなくちゃいけないんだ。エリーと出会う前にも、プクリン親方のギルドに弟子入りしようとしたんだけど……。私ってホント意気地なしで中に入る事すら出来なかったの。」

イーブイが真剣な眼差しでエリーを見つめる。

「ねえ、エリー？行く所無いんでしょう？だったらお願い！！私と探検隊やってくれないかな？」

「ええっ!？」

いきなりの展開にかなり驚いた。

急に頼まれちゃったけどどうしよ？いきなり

「探検隊やってくれ」って……。でも……。このイーブイと一緒になら……。この子と一緒に探検隊やってたら、あたしの謎もいつか解ける日が来るかもしれないわ。行くトコ無いのも事実だしね。

「OKよ。一緒に探検隊やりましょ！」

「ありがとう！！早速行こう！プクリン親方のギルドに！！」

2匹は満面の笑みを浮かべて、プクリンのギルドへと走りだした。

4話 名コンビ誕生！（後書き）

ゲームで言うChapter 1が終わり、区切りがいいというコトで、次回はキャラ紹介をやると思います！

5話 弟子入り〜ヘスカイズ〜結成〜（前書き）

やっと出来たよ……。

エリー

「前回の投稿から随分間があいたわね……。」

うん……。今後ものろろ更新になる……かも……。

エリー

「じゃあ、その分いい出来に仕上がる事を期待してるわよ」

……………（汗）プレッシャー（汗）

5話 弟子入り〜ヘスカイズ〜 結成〜

プクリンのギルド

夜も近付き、建物の両脇にある松明に火が灯されていて、パチパチと音をたてている。

そんな建物の前に立っているポケモンが2匹いた エリーとイーブイだ。

「うつつ…こうして見ると、何か不気味だよね……。」
イーブイは身震いした。

この建物、プクリンの顔がモチーフになっているのだが、その顔が松明の灯りで不気味に照らされていた。……だからと言って、こんなに酷く怯えているのも、イーブイ位なものかもしれないが。

「でっ、でも！ここで勇気を出さなきゃ、いつまでたっても探検隊になれないんだ！今回はエリーと一緒になんだし！」

イーブイは、無理矢理気合いを注入した。

「でも……何でそこまでビクついてるの？」

イーブイのビビリように内心呆れながら、エリーが尋ねる。

「まず、今は建物のプクリンの顔が不気味にライトアップされてて怖いのと、後は、あの入り口の前にある穴！」

「穴……？ちゃんと格子状に塞いであって、落ちないようにしてるじゃない？」

イーブイの言った穴をチラリと見ながら、エリーが言った。

「そーゆー問題じゃなくてっ！あのね、あの穴の上に乗ると、ヘリウムガス吸ったような声がするんだよ……。しかも、私の種族名をピタリと言い当てるんだよ？不気味で不気味で……。」

イーブイがまたしても身震いした。

「不気味なのは分かったから。ほら早くしないと日が暮れちゃうわよ？」

「う、うん……。」

そう言って、イーブイは震える足をなんとか動かし、穴の上に乗った。

すると、地下から例の甲高い声が聞こえてきた。どうやらあの穴の真下に誰か居るようだ。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「ひっ……。」

イーブイが微かに声を上げた。

続いて、甲高い声とは別の太い声が聞こえてきた。

「誰の足形？誰の足形？」

再び甲高い声が答える。

「足形はイーブイ！足形はイーブイ！」

足形でポケモンが分かるの！？

エリーは心の中で驚いた。

一方のイーブイは、これまでに無い位震えているが、なんとか逃げ出さないうで持ち堪えていた。

すると、甲高い声と太い声の中間くらいの、別の声が聞こえてきた。

「……よし。後ろに居るもう1匹も見張り穴の上に乗れ。」

この声を聞いて、イーブイはフーツと安堵のため息をついた。

「じゃあ、次はエリーの番だね。」

どこかスッキリした表情でエリーと入れ替わった。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

さっきと同じやり取りが聞こえてきた。……一種の決まり文句になっているのだろうか。

しかし、さっきと違う事が起こった。

「足形は……。足形はあ……。……。」

足形の判定に苦戦しているようだ。

「おい！どーした！見張り番のデイグダー！！応答しろ！」

太い声の方が怒鳴った。デイグダと呼ばれた甲高い声の方は、投

げやりの感じで答えた。

「足形は……多分ロコン！足形は多分ロコン！」

「何だ、その多分って！！デイグダ、訪問者の足形でどんなポケモンかを言い当てる、それが見張り番の仕事だろ！？」

デイグダの曖昧な答えに太い声が怒鳴り飛ばした。デイグダは少し、拗ねたように言い返した。

「だってえ……。解らないモノは、解らないんだもん……。」

このやり取りを、地上のエリーとイーブイは、戸惑った様子で聞いていた。

「……何か……揉めてるみたいだね。」

太い声がギャーギャー言い続けている中、エリーに穴の上に乗るよう指示した声が聞こえてきた。

「……まあ、いい。怪しいポケモンではないようだ。ドゴーム、扉を開けなさい。」

すると、辺りが少しの間静かになり、続いてゴゴゴ……という音が聞こえてきた。

「な、何？」

エリーとイーブイは同時に言った。イーブイは再び滅茶苦茶に震えている。

そして、さらに音が大きくなり、目の前の建物の門が開き始めた。「ひゃあっ……。」

イーブイは門の開いた建物を見て、口をパクパクさせている。

「こんな事で一々驚いてどうするのよ……。ほら、早く入りましょ！」

「う、うううう……うん！」

イーブイは酷く緊張していて、舌が回っていない。おまけに足取りもギツクンガツクンしていて、どこか可笑しい。

「……。ホントに大丈夫？」

「だ、だだだだだ……だってえ、中に入るのは、初めてなんだもん……。」

相変わらずガタガタ震えている。それでも、なんとかギルドの中までたどり着いた。中は狭く、地下へ通じる梯子と、ギルドのルー10カ条が書いてある看板だけがあった。

「ここから下に降りるのよね。どうする？先に行く？」

予想はついてるが、取り敢えず尋ねてみる。

「エ、エリー先行つてよ。私、後から行くから……。」

「分かったわ。ちゃんと付いて来てよ？」

予想通りのイーブイの答えにため息をつきながら、念を押したこのビビリようだ、今すぐにでも逃げそうな気がしたからだ。

「私、エリーを置いて逃げたりしないよぉ〜。」 梯子を降りていくエリーを今にも泣かんばかりの表情のイーブイが追いかけた。

「わぁ……。。」

地下1階に到着したエリーは感嘆の声を上げた。そこは、結構広いスペースでポケモン達がたくさんいた。

「うわぁ……。ポケモン達がたくさんいるね。このポケモン達、皆探検隊なのかなあ？」

イーブイが目を輝かせて言った。さっきまでの緊張がどこかへ行ってしまったようだ。

「おい！オマエ達！」

自分たちを呼んだ声の方を見ると、頭が音符の形をしたカラフルな鳥 ペラップ が歩いて来ていた。

「さっき中に入ったのはオマエ達だな？言っておくが勧誘やセールスはお断りだ。帰った帰った。」

入っていきなり追い返されそうになるエリーとイーブイ。慌ててエリーが誤解を解く。

「違うわ。あたし達、探検隊になりたいの。弟子入りに来たのよ。」

エリーの後ろでイーブイが滅茶苦茶に首を縦に振った。

「ええっ！？弟子入り！？」

そう言うと、ペラップは後ろを向き、独り言を言い始めた

だし、エリーとイーブイにもバツチリ聞こえる独り言だったが。
(今時珍しい子達だよ。このギルドに弟子入りしたいなんて……。)
厳しい修行に堪えられず逃げ出したポケモンも多いというのに……。

この言葉を聞いたイーブイは不安になって尋ねた。

「ね、ねえ……。ギルドの修行ってそんなに厳しいの？」

イーブイの声で我に返ったペラップは振り向いて、翼をばたつかせて慌てて言った。

「いやいやいやいやっ そんな事ないよ。ギルドの修行はとくくくても楽チン」

『急に態度が変わった……。』

エリーとイーブイの喧きは1匹で勝手に盛り上がっているペラップには聞こえなかったようだ。

「弟子入りしたいなら最初からそう言ってくれば良かったのにな。私はペラップ ここ1番の情報通であり、親方様の一番弟子だ

……。弟子入りしたいのなら、まず親方様の所へ挨拶に行かなきゃね。付いておいで」

そう言うと、ペラップは梯子の所へと向かった。が、エリーとイーブイは戸惑ったように顔を見合わせた。

「何やってんの？早く早く」

2匹が付いて来ていない事に気が付いたペラップが急かした。エリーとイーブイは慌ててその後を追いかけて地下2階へと降りて行った。

下に降りるとペラップはある部屋の前で立ち止まった。

「ここが親方様の……」

「うわあ！見てよ、エリー！ここ、地下なのに外が見えるよ！」

いつの間にもやら窓辺に駆け寄っていたイーブイがペラップの言葉を遮った。

「ここは崖の上に建てられているから外も見えるんだよ！……とゆー

か私の言葉を遮るんじゃない!!それから一々はしゃがない!!」
ペラップは自分の言葉を遮られた事がかなり頭にきたのか、怒鳴り始めた。

「はい……。」
イーブイは耳を垂らして、しゅんとなった。

「とにかく……。」
ペラップはコホン、と咳払いをしてから中断された話の続きに入った。

「この部屋は親方様の部屋になっている。これから入るが……くれぐれも粗相の無いようにな。」

そう釘を刺すと彼は部屋の扉をコンコン、とノックした。

「親方様。ペラップです。入りますよ。」

そう言っただけでペラップは扉を開け、中に入って行った。エリーとイーブイもその後を追った(イーブイはまた緊張で足がガクガクしている)。

中には1匹のピンク色の兔のような耳をしたポケモン　プクリンが入り口に背を向ける形で立っていた。

「親方様。新しく弟子入りを希望する者達です。」

ペラップが言ったがプクリン親方は振り向かない。

しばらく待っても一向に振り向かない。エリーが「このポケモン、寝てるんじゃないか」と思い始めた頃、プクリン親方は突然振り向いた。

「やあっ！ボク、プクリン　ここのギルドの親方だよ？キミ達、弟子入り希望なんだって？」

「はい！」

とエリーが答え、イーブイはエリーの後ろに隠れ、何やらゴニョゴニョ言った　多分「はい」と言ったのだらう。

「そっか　なら、一緒に頑張ろうね」

プクリンはあっさりエリー達の弟子入りを認めた。エリーは少し

驚いたが、何も言わない事に決めた。

「それじゃあ早速だけど、チームの名前を教えてください。」

「チーム名？」

エリーは後ろに隠れているイーブイの方を振り向いた。

「何か考えてある？」

「う、うん……。」

イーブイがエリーの後ろから少し前に出て言った。

「ス…………… * ……です。」

イーブイはチーム名の部分を酷く噛んでしまった。誰もチーム名を聞き取れず全員が沈黙した。

「イーブイ……今、何て言ったの？」

「ごめん。聞き取れなかった。もう1回言っただけ？」

イーブイは顔を真っ赤にしながらも、深呼吸してもう1度言った。

「《スカイズ》です！」

「《スカイズ》？」

エリーが聞き返した。

「うん！私ね、ずっとわくわくしてたの。探検するってどんな事なんだろう？とか色々考えて……。ちょうど‘大空’へ飛び立つ前の雛鳥のようにね。……これから私達は飛び立つの！‘探検隊’と言う鳥になって、‘大空’に！」

イーブイは自分の考えを熱弁した後、真っ赤になってまたエリーの後ろに隠れた。

「《スカイズ》か……うん！あたしも気に入ったわ！《スカイズ》で登録して。」

最後の言葉はブクリンに向かって言った。

「オーケー 登録登録……みんな登録……………」

ブクリンが深く息を吸い込んだ。ペラッパが慌ててエリー達の所へ飛んできて、盾になるように翼を広げた。

「オマエ達！伏せろ！」

「たぁ……………っ！……！」

直後、プクリンが物凄いパワーの“ハイパーボイス”を放った。エリー達は、吹き飛ばされそうになりながらも必死に持ち堪えた。

「おめでとう これでもキミ達も探検隊の仲間入りだよ」

「やったあ！」

イーブイが満面の笑顔を浮かべて喜んだ。

「これをあげるね、ポケモン探検隊キット、だよ」

ペラップがプクリンから、探検隊キット、を受け取り、《スカイズ》に手渡した。

「早速開けてみてよ」

プクリンが笑顔で促した。エリーとイーブイは言われた通り蓋を開けて、中を見た。中に入っていたのは、バッグ、バッジ、そして地図の3つだった。

「これは……？」

「説明するよ？まずはトレジャーバッグ。探検で手に入れた道具を入れておく事が出来るよ。続いて探検隊バッジ。探検隊の証で、ポケモン達を救助する事が出来るよ。最後に不思議な地図。本当に不思議な地図で、今は雲に覆われた部分も有るけど、探検して開拓していくうちに雲が晴れていくんだ。………大体こんな感じかな？解った？」

「はい！！！」

《スカイズ》は元気に返事した。

「立派な探検隊になれるよう、頑張つてね」

プクリンは期待に胸膨らます2匹に声援を送った。

プクリンの部屋を出た後、エリーとイーブイはペラップに連れられて自分達の寝室へと案内された。

「ここがオマエ達の寝室だ。」

「あつ、ベッドがある」

早速イーブイは、藁ひわでできたベッドにダイブした。

「オマエ達には住み込みで修行してもらおう。朝は早く起きなきゃい

けないから、夜更かししないで早く寝るんだぞ。」

そう言つとペラッパは部屋から出ていった。

「無事弟子入りできて、良かったわね。」

「うん 夢みたいだよ。」

イーブイはふわ〜、と欠伸した。

「ずっと緊張してたから、疲れちゃった。私もう寝るよ。お休み、

エリー。」

「うん、お休み。」

そう言つた後すぐにイーブイの寝息が聞こえてきた。

あら、もう寝ちゃった……。よつぽど疲れたのね……

エリーは優しい瞳でイーブイの寝顔を見た。

……にしても、どうしてあたしはポケモンになっちゃったのか

しら……？

ぼんやりと考える。

まあ、探検隊を続ければそのうち解る日が来るよね？いつか、

きつと……

エリーもイーブイと同じように、深い眠りの世界へと誘われて行

つた……。これが、時間を飛び越えた壮大な冒険の始まりであること

も知らずに……。

6話 初めての依頼（前書き）

エリー

「キャラ紹介が消えたわね？」

もう1回書き直して、設定集でも作ろうと思って（笑）なんか、キ
ヤラ紹介した時よりも君の性格、変わったような気がする……んだ
よね……。

エリー

「作者の計画性の無さのお陰だね。」

……本当にその通りです。ごめんなさい（泣）
それはそうと、今回の話、グデグデかもです。

エリー

「いつもの事でしょう。」

……ヒドイネ、チミ……（泣）

6話 初めての依頼

次の日。

エリーは自分の体の上に何やら重い物が乗っているのを感じ、目を覚ました。身をよじって見てみると、それはイーブイだった。

「なっ……………？イーブイ!？」

結構大きい声だったにも関わらず、イーブイはまだ夢の中だ。

とその時、耳がスピーカーカーのようになってるポケモン、ドゴームが部屋に入ってきて来た。そして、息を大きく吸い込んだ。昨日のプクリンの“ハイパーボイス”を思い出したエリーは、咄嗟に耳を塞ぐ。直後、馬鹿でかい声でエリーとイーブイを起こしにかかった。

「起きろおおおお!!朝だぞおおおお!!」

部屋が微かに振動しているのが解る位の大声。耳を塞いでいても、鼓膜が破けそうになる。

しばらくドゴームは喚き散らし、ようやく、目覚まし、は止まった。

「……………。や、やっと終わった……………」

エリーはほっとして耳から前足を離れた。その時、ようやくドゴームの視線がエリーとイーブイの方を見た。イーブイの顔を見た瞬間、ドゴームの口があんぐりと開き、見事な間抜け面が変わった。

……………イーブイはまだ寝ていた。ドゴームの大声で気絶したのではなく、眠っているのだ。

「オ、オレの声で起きない奴、初めて見た……………」

ドゴームが度肝を抜かれている間にエリーはイーブイの下からなんとか這い出た。

「と、とにかく!早く起きないと朝礼に遅刻するぞ!オレまでとはつちり食らうのは嫌だぞ!」

そう言つとドゴームは、再び息を吸い込み始めた。

「ス、ストップ!!もう大声を出すのはやめて!!」

身震いしながら、エリーは慌てて彼を止めた。

「じゃあどうやって起こすんだよ!？」

ドゴームが怒鳴り返した。

「そうねえ……。こついうのはどうかしら……?」

エリーはコチヨコチヨ…とイーブイの足の裏をくすぐり始めた。するとすぐに反応が現れた。

「ふはっ……。あはははははははっ……。く、くすぐりたい……。ひゅ……。!」

「……。やっと、起きた……。」

エリーははあつとため息をついた。

「あつ、エリー。おはよう。」

「おはよう、じゃねえよ!!早くしないと朝礼に遅れるぞ!!」

一時的に自分の仕事を忘れていたドゴームが怒鳴った。

「ちょ、朝礼?……。あー……。私達、ギルドに弟子入りしたんだっけ!?!」

「ほら、早く親方様の部屋の前に来いよ!!」

そう言い残すとドゴームは不機嫌そうな足取りで部屋を出て行った。

「エリー!私達も早く行こつ!!」

イーブイもドゴームの後を追って部屋を出て行った。その後を追うエリーの口からは、再び幸せが逃げていった。

「オマエ達、遅く……。いつつ!!」

朝礼の場所に到着すると、開口一番ペラップに怒鳴られた。

『ご、ごめんなさい……。』

「まあ、今日は初日だからお説教はしないけど、明日からは気を付けるんだよ!!」

『はい……。』

初日の朝っぱらから元気を無くす2匹だった。

「……では、親方様。朝の挨拶を……。」

ペラップはプクリンの方を向いて言った。しばらくプクリンの反応は無かった。皆が親方の言葉を待つ静けさの中、聞こえてきたのは……

「ぐう……………」

……それは紛れもなくプクリンの寝息だった。

エリーはイーブイと顔を見合わせてから、再び耳を澄ます。

「ぐう……………ぐうぐうぐう……………」

やはり何度聞いてもプクリンの寝息だ。しかも、驚くべき事は……
目、開いたまま寝てる……

そう心の中で呟いたエリーは周りの皆を見回す。ギルドの先輩達の表情を見る限り、いつもの事のようにだ。皆、「またか……………」というような表情かおをしている。ただ1匹、風鈴の形をしたポケモン、チリーンだけは違って、顔を赤らめて、プクリンを見ていた。……
どうやら彼女は、弟子が師匠を慕うのとはまた別の意味で、プクリンの事を慕っているようだ。

ペラップはコホン、と気を取り直すかのように咳払いした。

「え……………ありがたいお言葉、感謝致します。では、みんなっ！朝の誓いの言葉、行くよっ！！」

ペラップの言葉でその場の雰囲気が変わった。

「ひとつっ！」

『仕事は絶対サボらない！！』

ペラップを除いた弟子達が見事に声を合わせて言った。

「ふたっ！」

『脱走したらお仕置きだ！！』

昨日ペラップが、「脱走するポケモンが多い」とか言っていたよ
うな……………。

「みつっ！」

『みんな笑顔で明るいギルド！！』

「それじゃ、みんな！仕事にかかるよ！！」『おおーっ！……………！！』

ペラップの号令で皆はその場を離れた（プクリンはようやく目を覚ました）。ただ1匹、弟子のキマワリだけは、エリーとイーブイの所へとやって来た。

「初めましてですわ！ワタクシ、キマワリ！！これからよろしくですわー！！」

異常な程のハイテンションでキマワリは挨拶した。そのテンションに少し引きながらも、スカイズも挨拶を返す。

「あっ……………、初めまして。イーブイです。」

「エリーって名前よ。よろしく……………」

「きゃーっ 新人さんはやっぱり可愛いですわー！！お互い頑張りましょうー！！」

これだけ言うと、キマワリは嵐のように去っていった。

「……………。あのテンション、付いて行けないわ……………」

「……………うん。でも、頑張りましょう、って言われても、私達、何すればいいのかな。」

「ああ、オマエ達は私に付いて来なさい。」

ペラップが翼をこっちに来い、と言う感じに振っていた。エリー、イーブイは彼の後を追って、地下1階へと向かった。

「オマエ達には、この掲示板の依頼をこなしてもらおう。」

梯子の方から見て右側の掲示板へと案内された。

「依頼？どんな感じの依頼があるんですか、ペラップさん。」

イーブイが尋ねた。すると、ペラップはやたら上機嫌になって答えた。

「落とし物探したとか、護衛だとか、迷子になったポケモンの救助だとか……………色々だ 最近こういう依頼が増えていてな……………」

「知ってるよ。なんでも時が狂い始めたからだって聞いたけど……………」

「

時が狂い始めた？？どういふ事なのかしら……………」

エリーが疑問を口に出す間もなくイーブイは話を続けた。

「で、その影響からか、不思議のダンジョン」と呼ばれる空間が急

激に増えたんだよね？」

「不思議のダンジョン??」

エリーが怪訝そうな顔をして尋ねた。

「エリーは知らないよね……。昨日入った海岸の洞窟、あそこも不思議のダンジョンなんだよ。」

不思議のダンジョンはね、その名の通り本当に不思議な場所なんだよ。中は迷路のようになっていて、入る度に地形が^{マップ}変わる。そして、その中で力尽きると強制的に安全な所へ戻され、所持金も道具も減らされてしまうんだよ。

……。でもね、ダンジョンの中にはお宝や謎が秘められていたりするから、探検するにはホントに魅力的な所なんだよ！」

イーブイは目を輝かせて言った。

「うんうん。よく知っているじゃないか。なら話は早い。依頼の場所^は全て不思議のダンジョンの中だからな。」

ペラップはニコニコしながら頷いた。

「ねえ、ペラップ……」

「ペラップ、さん、!!」

ペラップが急に不機嫌になって怒鳴った。どうやら「さん」付けされるかされないかでコロコロと機嫌が変わるらしい。面倒臭い鳥だな……。と思いつつ、エリーが言い直した。

「ペラップ、さん」。探検とかはまだしないの？」

「さん」付けされていくらか機嫌を良くしたペラップが答える。

「当たり前だ。初心者いきなり探検なんてさせやしない。下積み^が大事なんだよ！」

そう言う^と彼は、パタパタと舞い上がり、掲示板から1枚の紙を嘴にくわえて持ってきた。

「そういう訳だから、オマエ達にはこの依頼をやってもらおう。」
ペラップから紙を受け取り、内容を読み始めた。

初めまして。

私、バネブーと申します。

探検隊の皆さまにお願いがあります。

泥棒に盗まれた私の真珠が、ある岩場で見つかったとの情報が入ったんです。その岩場は‘湿った岩場’と言うのですが、そこはとても危険な場所らしく……私、怖くてそんな所、行けません！！

真珠は私にとって命なんです！ですから探検隊の皆さん。どうか私の代わりに真珠を取って来てくれないでしょうか？

お願いします！！

バネブーより

「……………じゃあ、行きましようか。‘湿った岩場’へ。」

バネブーの依頼を読み終え、エリーが言った。

「うん！立派な探検隊になるためだもん……初めての依頼、成功させようね！」

ペラップに‘湿った岩場’の場所を聞き、早速2匹はギルドを出発した。

「ここが‘湿った岩場’ね……………」

スカイズは、岩場の入り口へと到着した。

「バネブーの依頼によると、危険な所らしいね。……………それに見た感

じ、水タイプのポケモンが好みそんな場所だよね。」

常に水で濡らされているような感じの岩を見て、イーブイが言った。そして、チラリとエリーを見た。その視線に気が付いたのか、エリーが言う。

「まあ……あたしだけじゃ危険かもしれないけど……イーブイ、貴方も居るんだから。力を合わせれば大丈夫よ。」

「……うん！そうだよね！早速行こう！！」

早速2匹は、初依頼を成功させるべく、岩場の内部へと入って行った。

「だましうち」！

「たいあたり」！

力を合わせて、‘湿った岩場’を進むスカイズ。イーブイも昨日の一件もあつてか、だいぶダンジョンに対する恐怖心が抜けてきたようだ。……ただ、敵ポケモンが目の前に現れる度、軽くドッキリしているようだったが。

「だいぶ奥まで進んだね。」

「ええ。バネブーの真珠はどこ……」

エリーの言葉が途中で途切れた。驚いてイーブイがエリーの顔を見ると、微妙に青ざめている。

「エ、エリー！！？ど、どうしたの！！？」

イーブイが半端ない驚き方をして、エリーを心配した。

「あ、あ、あれ……」

エリーは妙に細い声で答えた。イーブイが慌ててエリーの視線を辿る。そこに居たのは……

「ア、アノプス??」

イーブイが拍子抜けしたような声を出した。

「なんだ……脅かさないでよ、エリー……」

「なんだじゃない……」

「え？」

「あたしは虫ポケモンが大っ嫌いなのーっ！！」

そう叫ぶとエリーはアノプス目がけて“ひのこ”を発射した。いきなり食らって、黒焦げになったアノプスは慌てて逃げ出した。

「……………。エリーって、虫ポケモン嫌いだったんだ……………」

「だって……………カサカサワサワサ動くあの感じ……………この世のものじゃないでしょ。」

「そ、それは言い過ぎじゃない？今のもちよっとやりすぎかと……………」

一部炭になりかかったようなアノプスの姿を思い出し、イーブイが言った。

「と、とにかく！またアノプスの姿を見る前に、さっさと真珠を探して帰りましょー！！」

「……………うん。」

エリーの思わぬ一面を発見したイーブイは、少し引きながらエリーの後を追い掛けた。

2匹はさらに奥へと進み、岩場の一番奥にやって来た。

「行き止まりになってる。どうやらここが『湿った岩場』の一番奥みたいね。」

「ねえ！見てよ、あそこ！」

イーブイが嬉しそうな声を上げた。片足で目の前の一点を指している。

大きな岩の向こうにピンク色の綺麗な真珠が見えた。

「真珠だわ！」

「きつとあれだよ。早くバネブーに届けてあげよう！」

2匹は真珠を拾ってトレジャーバッグに入れ、ギルドへと戻って行った。

ギルドに戻ったスカイズは、早速バネブーに真珠を渡した。

「あ、ありがとうございますー!!」

バネブーは感激で瞳を潤ませている。

「そんな……探検隊として当然の事をしただけだよ。」

イーブイが照れたように言った。

「もう私、頭に真珠が無いと落ち着かなくて……。あちこちぶつけまくって身体中痣だらけ!!」

そう言う彼の体には、至るところに絆創膏ばんそうこうが貼ってあった。

「スカイズさん！本当にありがとうございます！お礼の品です。受け取って下さい！」

タウリン、リゾチウム、ブロムヘキシンと言った、使うと能力が上がる道具を受け取った。

『いいの？こんなに……。』

慌ててエリーとイーブイが同時に尋ねた。

「勿論です。それからこれも受け取って下さい。」

バネブーはジャラジャラという音がする袋を差し出した。

「謝礼金、2000ポケです。」

「!!!?」

大金に目を丸くした。

「嘘！いいの？」

エリーの質問にバネブーは笑顔で頷いた。

「やったあ！私達、いきなりお金持ちだよ!？」

イーブイが喜ぶ。が……

「ダメだ、ダメだ〜!!」

ペラップが急に現れて、2000ポケが入った袋を持ち去ってしまった。

「あつ、何するの!？」

「オマエ達、ギルドの入り口の『探検隊心得10カ条』を読まなかったのか?『稼いだ賞金はギルドで分けるよ!』と書いてある。だから、オマエ達には……うん これ位かな」

ペラップから渡されたのは……

「に、200ポケ??」

「一気に10分の1に減らされたわ……。」

「オマエ達。これからも頑張つて、ギルドを儲けさせてくれよ」
上機嫌になったペラップは、残りの1800ポケと共にその場を去つて行つた。

「うつつ……頑張つたの、私達なのに……。」

200ポケをイーブイは耳を垂らして見ていた。

「何はともあれ、初依頼は大成功よ!やったね、イーブイ!」

「……うん!そうだね!やったね!」

その時、チリリンという鈴の音が聞こえて来た。

「皆さん。お食事の用意が出来ましたよ。」

そう言つたのは食事係をやっているチリーン。彼女の言葉にギルドの弟子達は歓声を上げ、食堂へと向かつた。エリー、イーブイもその後を追つた。

食事を済ませ、スカイズは自分達の部屋へと戻つて来た。早速イーブイが口を開く。

「初めての依頼、上手く行って、良かったね そりゃ、報酬取られちゃつたのは悔しかったけど……バネブー、凄く喜んでたし……いいよね!」

「ええ。今日は疲れたし、もう寝ましようか。……明日はちゃんと起きてよ?」

「……うん。頑張る。それじゃ、おやすみ。」

そう言つと、イーブイは昨日と同じようにすぐに眠りについた。

「……これで寝起きも良いと嬉しいんだけどね……。おやすみ、
ーブイ。」
そう呟いて、エリーもまた眠りについた。

6話 初めての依頼（後書き）

イーブイ

「エリーって、虫ポケモン見ると、あんな風に変わるんだね……。」

これで虫ポケモンがたくさんいるダンジョンに行ったら、どうなるんだろ……。作者でも想像つかん（汗）

イーブイ

「とにかく虫ポケモンは、エリーの前に姿を現さない方が、身の為だね……。」

……うん。

7話 時空の叫び（前書き）

エリー

「あれ？今回は更新早くない？」

ハートゴールド、ソウルシルバー発売記念って事で頑張ってるんですけど

イーブイ

「何か変わった事でもするの？」

小説の方はどうにも出来ないの、後書きが結構長いです。後書きつぽくないかも……（笑）

エ・イ『何で？』

雑談に花を咲かせます（笑）

エリー

「メインは小説なんだから、後書き、あんまり長くしないでよね……。」

はっい。

7話 時空の叫び

次の日。

昨日と同じく今日もまたイーブイはエリーの上に乗って寝ていた。「また今日もか……。」

と呟きつつ、エリーはイーブイの下から這い出た。そこへやって来たのは、うるさ過ぎる目覚まし、ドゴームだ。

「起きろおおおお！！朝だぞおおおお！！」

エリーは反射的に耳を塞いでいた。が、やはり鼓膜が破けそうになる。その一方で、やはりイーブイはまだ夢の中だった。

「またイーブイ（コイツ）は起きないのか……。」

大声を出すのを止めたドゴームが言った。昨日の事でもう慣れたらしい。

「イーブイ……耳、大丈夫かしらね？」

さすがに心配になってエリーが呟いた。

「とにかく、エリー……だっけ。さっさとコイツを起こしてくれ。」

「解ってるわよ。」

そう言つと、エリーは昨日と同じように、イーブイの足の裏を絶妙の力加減で擦った。……するとやはり、これにはすぐに反応した。

「くはっ。……あはははは……くすぐりたいよお……起きる……起きるからストップ……。」

エリーが擦っている前足を放すと、イーブイは起き上がって伸びをした。

「よし。起きたな。早く朝礼に来いよ。」

ドゴームはそう言い残して、部屋を出ていった。

「……ねえ、イーブイ。貴方、耳は大丈夫？」

さすがに2日連続の出来事となると、不安になってエリーが尋ねた。

「ん？耳？聴力は結構良い方だよ。……じゃあ、朝礼行こうか。」

聴力良いなら何故起きない。

そう心の中で突っ込みを入れながら、エリーはイーブイの後を追った。

『みつっー！みんな笑顔で明るいギルド！』

「それじゃ、みんな！仕事にかかるよ！！」

『おおー！ー！ーっ！！』

昨日と同じように、朝の誓いの言葉を言って、ペラップの号令で各自の仕事場へと向かった。

「ああ。オマエ達。オマエ達は私に付いて来なさい。」

今日もペラップに呼ばれ、スカイズは彼に付いて地下1階に向かった。

「今日はこっちの掲示板の依頼をやってもらう。」

そう言って案内されたのは、昨日のとは反対側の掲示板だった。

「あっちのと何か違うの？」

エリーがペラップに尋ねた。

「色んなポケモンの似顔絵が貼られているだろう。」

「……うん。このポケモン達は何なの？」

イーブイが掲示板をよく見ながら言った。

「このポケモン達は皆………お尋ね者なのだ。」

『！！？』

スカイズは固まって動かなくなった。イーブイに至っては顔が真っ青で冷や汗までかいている。その反応を見たペラップは笑いながら言った。

「大丈夫 一口にお尋ね者と言っても、ちょっとしたこそ泥から極悪ポケモンまで…… ホント、ピンきりだよ オマエ達にはそんな難しい事はさせないよ」

「でっ、でも！結局は怖いポケモンには変わりないんだよね？私…

…そんなのと戦うなんて……怖いようっ!!」

イーブイが必死に声を出して反論した。

「お黙りっ!!!!」

ペラツプに一喝された。今の声はドゴームにも匹敵するだろう。

「お尋ね者の討伐も探検隊の仕事だよっ! 誰かにトレジャータウンを案内させるから、準備しておいで!」

そう言うのとペラツプは再び大声を出した。

「ビツパ!! おーいビツパー!!」

「はい。何でゲしよう?」

下から返事をする声がして、1匹のポケモンが梯子を登って来た。

「はあはあ……お呼びでゲスか?」

「ああ。ビツパ。コイツらはこの間入った新入り、スカイズだ。トレジャータウンを案内してやってほしい。」

ペラツプは翼でエリーとイーブイを差しながら言った。

「了解でゲス。」

「よし。任せたぞ。」

そう言って、ペラツプはビツパが登って来た梯子を、反対に降りて行った。

「ううっ……。」

ビツパの啜り泣く声が聞こえた。

「ど、どうしたの!!?」

驚いてイーブイが尋ねた。

「ううっ……。あつし、後輩が出来たのは初めてなんでゲス……。だから、嬉しくて嬉しくて……。」

「そうなんだ。私、イーブイだよ! よろしくね、ビツパ先輩。」

イーブイがニコニコと元気良く挨拶した。

「あたしはエリーよ。よろしく。」

「うっ……。うっ……。よろしくでゲス……。」

ビツパは顔をゴシゴシ擦って涙を拭いた。

「じゃあ、案内するでゲスね。ギルドの中は案内した方が良いでゲ

スか？」

ビツパはエリー達に尋ねた。

「ギルドの中は大体把握出来るから平気だよ。」

イーブイが彼の質問に答える。

「ねえ、ビツパ。」

エリーが口を挟んだ。

「何でゲスカ？」

そう返事したものの、ビツパの内心では呼び捨てされた事に戸惑いを感じていた。

な、何なんでゲスカ〜！？この子。初めての後輩に呼び捨てされるなんて、何かシヨックでゲス……

「？どうかしたの？」

「……エリー。先輩に呼び捨てはないよ……。」

珍しくイーブイがエリーに突っ込みを入れた。

「べ、別に構わないでゲスよ！？あつし、呼び捨てにされても気にしないでゲスから……。」

かなり気にしてるだろ……

エリーとイーブイは同時に心の中で思った。

「ところで、エリー。何を言おうとしたんでゲスカ？」

気を取り直してビツパが尋ねた。

「気になってた事があるんだけど……グレッグルって一体何やってるの？」

グレッグルというのは、ギルドの弟子の1匹である。このギルドに弟子入りしてからの2日間しか見ていないが、彼は朝礼が終わった後、探検に行かず、真つ先に謎のツボの所に向かうのだ。

あのグレッグルは一体何をやっているのだろうか？

エリーはずっと疑問に感じていた。

「うーん……。それはあつしにも解らないでゲス……。前にあつしも聞いた事があるんでゲスが……。まともな返事が返ってこなかったでゲス……。」

ビツパが自分も疑問だ、という感じの声で答えた。

「……もう質問は無いでゲスか？それじゃ、トレジャータウンを案内するでゲスね。」

ビツパが先頭でスカイズがそれに続く形でギルドの外へ出た。

「ここがトレジャータウンでゲスよ。」

スカイズとビツパはトレジャータウンへとやって来た。

通りには店が立ち並び、それぞれの店の経営者の顔がモチーフになっっていた。

「へえ……。こんな所があるのね。結構賑やかな所じゃない。エリーが呟いた。

「ここには、探検活動に役立つ様々な施設があるんでゲスよ。

まずは“ヨマワル銀行”。集めたポケを預かってくれるんでゲス。ここに預けておいたポケはダンジョンで倒れても無くならないんでゲス。

ヨマワル銀行の向こうに見えるのが、“エレキブル連結店”。離れた技を思い出させたりしてくれるんでゲス。今は、店主のエレキブルさんが居ないようでゲスが……。

橋を渡った先にあるのが、“カクレオン商店&専門店”。カクレオン兄弟が探検に役立つ色々な道具を売ってるんでゲスよ。

そして最後に“ガルーラの倉庫”。探検に行く前にはここで荷物の整理をすると良いでゲスよ。倉庫に預けた道具はどんな事があっても無くならないし、ガルーラおばちゃんがりっかり守っていてくれるでゲスからね。

……主要な施設はこれ位でゲスかね？他にも“ガラガラ道場”、“お世話屋ラッキー”、“ネイティオ鑑定所”があるのでゲスが……。
今はやっていないようでゲス。」

ビツパが説明を終え、一息ついた。

「ありがとう、ビツパ先輩。……エリー。トレジャータウンって大体こんな感じの所だよ。解った？」

イーブイがエリーに尋ねた。

「……まあ、大体ね。イーブイはこのトレジャータウンの事知ってるの？」

今度はエリーが尋ねた。

「うん。まあね。私、この近くに住んでたから、トレジャータウンの施設はよく利用してたよ。」

「なんだ。イーブイはトレジャータウンの事、知ってたんでゲスね。それなら安心してゲス。あつしは先にギルドに戻ってるでゲスから、イーブイ達は準備をして来るでゲス。戻って来たら、一緒にお尋ね者を選んであげるでゲス。」

ビツパがニツコリ笑って言った。

「わあ、ありがとう！ビツパ先輩！優しいんだね！」

イーブイにそう言われて、ビツパは頬を赤らめる。

「そ、そんな……照れるでゲスよ……。じゃ、じゃあギルドで待ってるでゲスね……。」

まだ照れたような仕草をしながら、彼は戻って行った。

「イーブイ、どこに行く？」

ビツパが去った後、早速エリーが尋ねた。

「うーん……カクレオン商店はどう？どんなのが売ってるか見てみたいし！」

イーブイが提案した。

「じゃあ、決まりね。どこにあるの？」

「こっちだよ！付いて来て。」

今度はイーブイが先頭にたって歩き始めた。

「ここだよ！」

橋を渡ってすぐの、カクレオンの形をしたカラフルな色合いの店の前にやって来た。店を経営しているのは、カクレオン兄弟（弟は

紫色の色違い)だった。

「こんにちは カクレオンさん！」

イーブイが店に近寄ってカクレオン達に挨拶した。

『イーブイちゃん。いらっしやい！』

カクレオン達が同時に挨拶した。

「知り合いなの？」

思わずエリーがイーブイに尋ねた。

「うん。だってこの近くに住んでたんだもん。食料とか買いによく来てたよ。」 イーブイが答えた。

「イーブイちゃんには贖罪にしてもらってるんですよ。ところで、そちらの方はこの辺りでは見かけませんか？」

兄のカクレオンがエリーを見ながら言った。

「あたしは、エリーよ。」

「私達、2匹で探検隊を結成したんだ！今、ギルドで修行中なんだよ。」

満面の笑顔でイーブイが言った。余程、探検隊を結成した、と言える事が嬉しいのだろう。

「良かったですね！イーブイちゃん、ずっと探検隊になりたいって言っていましたもんね！」

兄のカクレオンが頷きながら言った。

「ところで、今日は何を買いに来られたのです？」

弟のカクレオンが聞いてきた。

「あたし達、ギルドの修行でお尋ね者の逮捕に行くの。何か役立つ道具はない？」

エリーが彼らに尋ねた。

「そうですねえ……。」

兄のカクレオンが店の奥に引っ込んで、棚の上をゴソゴソ探した。「あつ。これなんかいかがでしょう？」

そう言って彼が引っ張り出して来たのは種のような物だった。

『これは？』

エリーとイーブイが同時に尋ねる。

「これは“縛られのタネ”と言いましたですね。食べたポケモンは硬直してしまうんですよ。」

カクレオンが解りやすく説明する。

「硬直する？つまり動けないんだから、攻撃とかも出来なくなるって事？」

「そうそう。そう言う事ですね。」

エリーの質問にカクレオンは笑って、コクコク頷いた。

「便利そうだね。買って行こうよ、エリー。」

「そうね。……いくらするの？」

スカイズは“縛られのタネ”を買う事に決め、カクレオンに値段を尋ねた。

「1個で50ポケになります。」

50ポケ丁度をカクレオンに渡し、タネを受け取った。

『ありがとうございます！す！これからもカクレオン商店&専門店をよろしく願います！』

見事なハモリっぷりでカクレオン兄弟が言った。

「じゃあ、そろそろギルドに帰る？」

「そうね……」

カクレオンの店の前で相談していると……

「すみませ〜ん!!」

まだまだ幼い感じの声でした。見ると青い体をした小さなポケモン達。マリルとルリリがこちらに向かって駆けてくる。そして店の前に立ち、カクレオン達に話し掛けた。

「リンゴ下さい!!」

「下さ〜い」

マリルが言った事をルリリが復唱した。その光景が可愛らしくて、スカイズはギルドに帰らず、その場に止まる。

「マリルちゃん、ルリリちゃん。いつもエライね。はい、リンゴだ

よ。」

カクレオンは店の奥からリンゴを紙袋に入れて持って来た。

「はい。お金です！」

「お金です」

マリルが少し背伸びして、カクレオンにお金を渡し、紙袋を受け取った。

「あれ……？」

紙袋の中身を見たマリルが呟いた。

「どうしたんだい、マリルちゃん。」

カクレオンがマリルに尋ねた。

「これ……1個多いです。」

マリルが紙袋を差し出しながら言った。

素直だな……、とその様子を見ながらエリーが思う。

「ああ。それはサービスだよ。2人で仲良くお食べ。」

カクレオンがマリルとルリリに優しく言った。

「ホント！？やったあ」ルリリがリンゴを頭に乘せて喜んだ。

「ルリリ。カクレオンさんにお礼を言わなきゃダメだよ。」

そんな弟を見てマリルが注意した。

「は〜い。カクレオンさん。ありがとう」

「いいんだよ。気を付けてお帰り。」

マリル達は仲良く帰ろうとした。が、ルリリが石に躓いて転んでしまった。その拍子にルリリが持っていたリンゴが落ち、コロコロ…とエリーの足元に転がってきた。

「ルリリ、大丈夫？」

慌ててマリルが弟を抱き起こした。

「うん。大丈夫。……あれ？リンゴは？」

ルリリがキョロキョロと辺りを見回す。

「リンゴならここよ。」

エリーがルリリに近付いて、リンゴを手渡した。

「ありがとう。お姉ちゃん」

ルリリがそう言うのを聞いたその時……

ぐわわーん……

「!?!」

激しい眩暈がエリーを襲った。必死に眩暈と戦っているところ声が聞こえてきた。

た、助けて!!

唐突に眩暈が治まり、エリーは現実に引き戻された。ルリリが心配そうな顔をしてこちらを見ている。

「どうかしたの?」

ルリリが尋ねた。

「どっ、どうもしてないわよ?」

エリーが誤魔化すが、ルリリはまだこちらをじっと見ている。

「ルリリ、帰ろー!」

マリルがこう言って、エリーは居心地の悪い視線から解放された。

「待ってー、おにーちゃん。」

ルリリは兄を追いかけ、2匹で仲良く帰って行った。

「あの子達、可愛いね。この辺りに住んでるの?」

「はい。トレジャータウンの近くに、お母さんと3匹で住んでるんですよ。ただ……お母さんが病気でね。お手伝いでああやって2匹だけで買い物に来るんですよ。」

「へえ……偉いね。」

イーブイとカクレオンが話している横で、エリーは先程聞こえた声について考えていた。

何で急に「助けて」なんて声が聞こえたのかしら……。しかもあの声……ルリリの声?

「……ルリリ?……エリー?エリーってば!」

イーブイの声で自分の頭の中の世界から現実に引き戻された。

「えっ？」

少し間の抜けた声をエリーが出す。

「どうしたの？ぼーっとして。」

イーブイだけでなく、カクレオン兄弟もこちらを見ている。

「えっと……ねえ、さっき、助けて！、って声が聞こえなかった？」

エリーはイーブイ達に確認してみる事にした。

「え？、助けて、？そんな声聞かなかったけど……カクレオンさん達はどお？」

イーブイがカクレオン達の方を向いて、尋ねた。

「いいえ……聞こえませんでしたよ……。」

「私も……。」

イーブイもカクレオン兄弟も聞かなかったらしい。エリーはさっきの声は幻聴だという事に決めた。

「ならいいの。イーブイ、ビツパが待ってるわ。ギルドに帰りましょう？」

「うっ、うん……。」

先に行くエリーの後をイーブイが慌てて追いかけて、その後ろでカクレオン達が顔を見合わせて首を傾げていた。

ギルドに向かって歩いてみると、ヨマワル銀行の隣で先程のマリルとルリリが自分たちの身長の上は2倍以上はあるポケモン スリープと話しているのを見つけた。

「あつ。マリルちゃん、ルリリちゃん！」

イーブイが声をかけた。マリルとルリリ、そしてスリープもこちらを見た。

「あつ。さっきのお姉ちゃん達だー」

ルリリが尻尾で飛び跳ねながら言った。

「何か嬉しそうね。何かあったの？」

「はい。前に大事な宝物を落としてしまって……。それで、このスリープさんがボク達の宝物を見つけたそうなんです。今からその場

所に案内してもらおう所なんです。」

エリーの質問にマリルが嬉しそうに答えた。

「それは良かったね。」

イーブイがマリルとルリリを交互に見ながらニッコリ笑って言った。

「はい。それじゃ今から行ってきますね。」

そう言っただけでマリルとルリリは歩きだし、スリープもその後から彼らを追った。

どん！

「痛っ……………」

スリープがエリーとぶつかった。

「おっと……………これは失礼。」

彼はそう謝るとマリルとルリリと一緒に立ち去った。

「スリープって優しいポケモンなんだね。小さい子の落とし物探しを手伝ってあげるんだもん。最近じゃ悪いポケモンも増えてるのに……………」

イーブイが話しているのを聞いていると……………

ぐわわーん……………

再び強烈な眩暈がエリーを襲った。

ま、またあの眩暈だわ……………。

必死に堪えようとしていると、今度は音声だけでなく彼女の頭の中にある映像が浮かんできた。

ある山の中に2匹のポケモン……………ルリリとスリープが立っている。

「言う事聞かないと痛い目にあわせるぞ！」

スリープがそう言っただけで、ルリリが怯えたような声で叫んだ。

「た、助けて!!！」

エリーは急に現実に引き戻された。イーブイが心配そうな目でこちらを見ている。

「エリー……ホントにどうかした？」

ゆっくりとイーブイの方を向き、エリーが口を開いた。

「あのスリープ……本当は悪いポケモンなんじゃないかしら。」

「え……ええっ!?! どうして? どうしてそう思うの?」

エリーの発言に驚いてイーブイが尋ねた。エリーは先程聞こえた声と見えた映像を正直にイーブイに話した。

「……………うーん……………」

しばらく沈黙した後、イーブイが口を開いた。

「確かにそれがホントだったら今すぐルリリを助けなきゃだけど……でも……あのスリープ、とても優しそうなポケモンだったよ? そんな事するようには見えなかったけど……………」

やっぱり信じてもらえないか。

エリーは思わずため息を吐き、肩を落とした。その様子を見たイーブイが慌てて言う。

「エリーの事、信じてない訳じゃないんだよ? それに私達、修行中の身だから勝手な事する訳には行かないよ……………」

イーブイの言葉にエリーは力なく頷いた。

「解ってるわ。」

浮かない足取りでギルドへと戻って行った。

「お待たせ! ビツパ先輩!」

掲示板の前で待っているビツパにイーブイが声をかけた。

「遅かったでゲスね? 何かあったでゲスか?」

ビツパが近付いて来る2匹に尋ねた。

「まあ……色々ね。」

エリーが曖昧に答えた。そして掲示板を見上げる。

「どのお尋ね者を捕まえる?」

板一面に貼られたお尋ね者のポスターを見ながらエリーが尋ねた。
「うん……………」

「じゃあ、ここは先輩としてあつしが選んであげるでゲスよ。」
ビツパが前に進み出て言った。

「あんまり恐そうなの選ばないでよ…………？」

イーブイが不安そうな声でビツパに念を押しした。

「解ってるでゲスよ。」

ビツパが選ぼうとすると、突然サイレンの音が鳴り響き、アナウンスが聞こえてきた。

《掲示板を更新します。危ないので下がって下さい。》

そして掲示板がくるっ！ボタン！と裏返った。

「ビツパ先輩。これは？」

イーブイがビツパに尋ねた。

「これは掲示板の更新でゲス。いつまでも古い情報を貼っておく訳にはいかないでやんすから、掲示板更新係のダグトリオがこうして情報を貼り替えるんでゲス。」

再びサイレンが鳴り、アナウンスが言った。

《掲示板の更新が終了しました。掲示板を元に戻します。危ないので下がって下さい。》

アナウンスが終わると再び掲示板が回転して元に戻った。

「さて、早速選び直……………イーブイ、どうしたんでゲスか？」

見るとイーブイが掲示板を見つめてガタガタ震えている。

「エリー……………掲示板の右上のあそこ見て……………」

イーブイに言われ、エリー、そしてビツパもそこを見る。

「……………！！スリープ！！」

そこに貼られていたのは先程見たスリープの似顔絵だった。

「エリー！あのスリープ、お尋ね者だったんだ！！」

「急ぎましょう！ルリリが危ないわ！！」

そう言っつて、スカイズはビツパを残してギルドを飛び出して行った。

「おーい!?どこへ行くんでゲスカ〜!?」
残されたビツパはビツクリして叫んだ。

ギルドの外へ出た2匹は交差点の所で右往左往しているマリルを見つけた。

「マリル!」

そう呼び掛けるとマリルはこちらを向いた。

「あ、あなた達は……。」

「マリル……。ルリリは？」

エリーがマリルにルリリの所在を尋ねると、彼は目に涙を浮かべて答えた。

「ス……。スリープさんが……。スリープさんがどこかへ連れて行ってしまったんです!」

エリーとイーブイは顔を見合せ、コクリと頷きあった。それからエリーが優しくマリルに言った。

「ねえ、ルリリ達がどこへ行ったか解る?案内して欲しいの。」

マリルは目をゴシゴシ拭いてから小さく頷いた。

スカイズはマリルの案内で“トゲトゲ山”へと向かった……。

7話 時空の叫び（後書き）

いよいよ、今日！！発売しましたね〜！ハートゴールド、ソウルシルバーバー！！

イーブイ

「作者さんはどっち買ったの？」

ハートゴールド！！……そう言えば、8月の中頃に予約しに行ったのに、予約特典付きのが大量に残ってたんだよね……。ソウルシルバーは予約特典残ってなかったのに。

エリー

「え？まさか予約特典がまだ残ってたからハートゴールド予約購入したんじゃないわよね？」

何を言うか！（怒）私は10年前も金をやったから、ハートゴールドにしたんです！ちなみに金は初めて殿堂入りしたソフトでもありません。

イーブイ

「えっ？初めて買ったのは青だって聞いたけど……。」

エリー

「あのね、イーブイ。作者は重度のゲーム音痴で、青 今だにクリアしてない。クリスタル 結構最近再プレイしてやっとクリア。ルビー 友人に手伝ってもらってやっとクリア……。な状態なのよ。余談だけど作者はポケモン以外のゲームって『伝説のス フィー』位しか持っていないそうよ。」

そうそう。カーイとかマオとかやってみたいとは思ってるんだけど中々……ってコラ！余計な事は暴露せんでよろしい！（怒）

エリー

「はいはい。で、実際にプレイしてみた感想は？」

DSのグラフィックでキレイになったワカバタウンに感動！！
歩くとコツコツって足音がする！！芸が細かい！！
あと、後ろを歩くワニノコ最高！！

イーブイ

「……て事は最初のポケモン、ワニノコ選んだの？」

そのとーり！

金でも共に旅をしましたからね。またよろしくお願いします（笑）
あ、そうそうワニノコのニックネームは“アクア”です。まんま
だけど……。

とにかくワニノコ可愛いイイイイイ！！

エリー

「ついに作者が壊れた……。」

イーブイ

「よっぼどワニノコLOVEなんだね。」

ワニノコ大好きイイイイイ！！

エリー

「……………。強制終了しましょうか。こんなくだらない後書きを最

後まで読んで下さった方、ありがとうございます。」

イーブイ

「えっと、次回の更新は今まで通り（？）2週間後になるかも……とか作者さん言っていました。」

エリー

「次回は作者の苦手なバトルシーンもあるらしいしね……。」

イーブイ

「では、また次回」「」

8話 ルリリを救え！（前書き）

はあ……（汗）

エリー

「いきなりどうしたの？」

相変わらずバトル書くの苦手で……。
ボス戦が短い上に悲惨な出来。

エリー

「ポケモン書いてる人がそんな事言ってるで大丈夫なの？（汗）」

ダメ、ですね。

何とか克服出来るよう頑張ります。

8話 ルリリを救え！

マリルの案内でエリー達スカイズはトゲトゲ山の入り口へとたどり着いた。

「マリルちゃん。ルリリちゃんとスリープはこの山にやって来たの？」

イーブイが確認する。

「はい。僕、見ましたから……。」

エリーとイーブイは互いに頷きあう。

「マリル。貴方はギルドに行つて、この事を話しておいてくれる？」

「私達はルリリを助けに行くから。」

マリルは小さく頷き、トレジャータウンに向かって走り出した。

「あたし達も行きましょう、イーブイ！」

そう言つてスカイズはトゲトゲ山の内部へと入つて行つた。

トゲトゲ山に生息しているポケモン達は、海岸の洞窟や湿つた岩場に住むポケモン達よりも強かつた。中でも厄介なのは、ドードーやムツクルの“でんこうせっか”、そして炎やノーマル技の威力が弱まるイシツブテだつた。

「疲れたよ……。少し休もう？」

まだいくらも登つていないのに、イーブイはもうへばっている。

「オレンの実でも食べる？」

そう言つてエリーはバッグの中からオレンの実を取り出そうとした。が、後ろから妙な視線を感じる。

「……………どうしたの？」

イーブイがキョトンとして尋ねた。

「何か……………後ろから妙な視線が……………」

エリーが後ろを見るとそこに居たのは……………

「イ、イトマル……。」

……大量のイトマルだった。

トゲトゲ山にモンスターハウスなど出現しないのだが、何故かイトマルだけのモンスターハウスな状態になっている。

「な、何でイトマルがこんなにくさん……。？」

エリーが顔を引きつらせ、声帯から無理矢理絞りだしたような声を出した。

「わかんない。こっちが聞きたいよ……。」

大量のイトマルを目の前にして、虫嫌いではないイーブイも冷や汗をかいている。

そんなやり取りをしていると、イトマルが襲い掛かって来た。

「~~~~~!?!?」

「わわわわわわ!?!?」

エリーは声にならない悲鳴を上げ、イーブイも思わず声を上げる。さすがにこんな大量のイトマルを相手に出来るはずもないので、2匹はクルリと後ろを向き、逃げ出した。

なんとか階段まで逃げ切って、大量のイトマルから逃れる事が出来た。トゲトゲ山に生息する他のポケモン達は、この地獄のような追いかけてこをただ呆然と見てたとか。

その頃、トゲトゲ山の山頂では……

「……あれ？行き止まりだよ？」

ルリリとスリープは山頂に辿り着いていた。

行き止まりになった事にルリリは首を傾げ、辺りをキョロキョロと見回す。

「ねえ、スリープさん。落とし物はどこにあるの？」

スリープはゆっくりとルリリに近付いた。

「ここには……落とし物は無いんだ。」

スリープの口調に、ルリリはチラリと恐怖の色を浮かべた。

「え……？お、お兄ちゃんは？後から来るんでしょ？」
ルリリが震える声で尋ねた。

「お兄ちゃんも来ないんだ。ここへ連れて来たかったのは、お前だけだったからな！」

スリープの表情が豹変した。ルリリは思わず後退りして、尻餅をついた。

「別に怖がる事は無いさ。言う事聞いたら助けてやる。」

スリープはルリリの後ろにある岩壁を見た。小さな穴が空いている。

「お前の後ろにある岩壁のあの穴。その奥に昔、盗賊団が財宝を隠したという噂があるんだ。だが、俺じゃ穴が小さ過ぎて入れねえ。

そこで体の小さなお前に取って来てもらおう、と言う訳さ。」

スリープがさらに1歩詰め寄った。

「こ………怖いよおっ！！お兄ちゃん！！」

ルリリはそう叫び、泣きながらスリープから逃げ出した。が、あつという間に回り込まれ、行く手を塞がれてしまった。

「言う事聞けば助けてやる、って言ったろ？」

スリープが面倒臭そうに言った。

「言う事聞かないと痛い目にあわせるぞ！」

スリープが怒鳴るとルリリが怯えた声で叫んだ……

「た、助けて！！」

……まさしくエリーが見た光景と同じ場面である。

スリープがルリリに襲い掛かるうとした。その時……

「待ちなさいっ！！お尋ね者のスリープ！！」

スリープは動きを止め、声がした方を見た。

そこに立っていたのは、平静を取り戻したスカイズだった。

「何だ？お前達は。」

スリープは動きを止め、スカイズの方を見た。

「あたし達は探検隊スカイズ！！貴方を逮捕しに来たのよ！！」

エリーが言った。

「た、探検隊だと!? ……………ん?」

スリープが何かに気付いたようだ。エリーはその視線を辿る。彼の視線の先に居たのは、ガタガタ震えているイーブイだった。スリープがニヤリと笑った。

「ははあ、お前達。さては探検隊と言っても新米だな?」

エリーはただ黙ってスリープを睨み付けた。

「悪いが俺は新米の探検隊なんかには捕まりやしねえよ。さあ、お嬢ちゃん達はお家に帰んな。」

スリープはしっしっ、と追い払うような仕草をした。

「あら。甘く見てると痛い目にあうわよ。」

エリーが挑戦的に言い放つ。そしてイーブイの方を見た。

「イーブイ! やるわよ!」

「う……うん!」

エリーの言葉にイーブイは震えながらも頷いた。

「ひのこ”!!!」

まずはエリーが灼熱の火の粉をスリープに向かって放つ。

「ねんりき”!!」

スリープは念の力でいとも簡単に“ひのこ”を止めてしまった。

しかしその隙にイーブイが後ろに回り込む。

「た、たいあたり”っ!!!」

得意の“たいあたり”で攻撃しようとした。が……

「え!?!」

突然イーブイの動きが止まる。いや、止められたのだ。スリープの“ねんりき”によつて……。イーブイはそのまま投げつけられる。「どうして? あたしの“ひのこ”を“ねんりき”で止めたばかりなのに……。どうしてそんなに早く対応出来る訳……?」

エリーが驚いて声を上げた。それを聞いたスリープはフン、と小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「お前達、知らないのか? 俺の特性は“予知夢”。相手がどんな技を使って来るかが予知出来るんだ。」

スリープが自分の特性について言った。その間にイーブイも立ち上がる。

「！イーブイ、大丈夫？」

エリーが声を掛けた。イーブイは体をブルブルツと振り、再び構えた……微妙に尻込みしているようにも見えるが。

「なんとかかね……。でも、どうするの？ “予知夢” で私達の動きが読まれてるんじゃない？」

イーブイが気弱に言った。

「あら。 “予知夢” も外れる事だってあるはずよ。それに……この位で怯んでちゃダメよ。」

エリーが気丈に、キツパリと言った。

「とにかく……あたしの “だましうち” はスリープに良く効くはず。でも、普通に攻撃したんじゃないや、 “予知夢” で躲かれてしまうから……隙を作ってやらなきゃね。」

そう言ってエリーは下に目配せした。イーブイは地面を見た。地面には僅かだが小石の混ざった砂がある。

「何いつまで喋ってんだ！！」

スリープが痺れを切らして襲い掛かって来た。

「えっと……す、 “すなかけ” ！」

イーブイはスリープに向かって砂を掛けた。スリープはそれを避けようとしたが……

「うっ！？目に砂が！！？」

スリープは慌てて目を擦った。その隙にエリーが攻撃する。

「 “だましうち” ！！」

目に砂が入った事にはばかり気を取られていたスリープはもろにそれを食らう。

「ぐっ……！！ “ねんりき” ！」

負けじと反撃してくるが、効果抜群の技を食らった事により、スピードもパワーも少し落ちてきている。エリーは “ねんりき” を振り払って “ひのこ” を放った。やはり素早く反応出来ず、 “ひのこ” も

直撃した。

「今よ！イーブイ！！」

エリーの言葉でイーブイがダツシュした。

「たいあたり”！！”」

それまでにだいぶダメージを負っていたスリーブは、イーブイ得意の“たいあたり”を耐えきれず、その場に倒れた。

「や……やった！」

2匹同時に安堵の息を吐いた。

「結局これは使わなかったわね……。ま、いいか……。」

エリーは“縛られのタネ”を見て言い、トレジャーバッグにしま
い込んだ。

それからイーブイと共に震えているルリリにそっと近寄った。

「ルリリ……ちゃん？」

イーブイが優しく声を掛けた。ルリリが涙目でスカイズを見上げた。
た。

「もう大丈夫よ。お兄ちゃんが心配して待ってるわ。一緒に行こう
？」

エリーが優しく微笑みながら言った。

ルリリはコクリと頷き、スカイズに駆け寄った。

「ところで……スリーブはどうする？」

イーブイが気絶して伸びているスリーブを見て言った。試しに持
ち上げようとしてみるが重くて持ち上がらない。

「これは……自分の力で下山してもらえないわね。」

エリーが平然と言った。一方でイーブイとルリリは再び震え始め
た。

「え……。そ、それって……スリーブを起こすって事だよね……
？だ、大丈夫なの？」

イーブイは震える声で力なく尋ねた。

「大丈夫よ。安心して。」

そう言っただけでエリーはスリーブを起こしに掛かる。しかし、揺り動

かしてみても起きない。試しに蹴飛ばしてみるがやはり起きない。

「起きない……ね。」

「だったら……さっさと起きなさい！アホ面！」

耳元で叫んだ。その途端ガバツと起きだした。

「誰がアホ面だと！！？」

この反応を見るからに、耳元で叫ばれた事より、“アホ面”と言う言葉に反応して起きたようだ。

「……自分でよく解ってるじゃない。とにかく……この山を下りるから、自分の力で歩いてちょうだい。……ああ、後それから……逃げようなんて馬鹿な真似しない方が身の為よ。」

エリーの脅しに近い言葉に当事者のスリープだけでなく、ルリリ、イーブイでさえも後退りした。

それからしばらくして、スカイズとルリリはスリープを連れてトゲトゲ山を下って行った。

トゲトゲ山の入り口に戻って来ると、そこにはマリルと一緒に見知らぬポケモンが3匹いた。

「ビビビ。私ハジバコイル。ソシテコツチノ2匹八部下ノコイル。

コノ地域ノ安全ヲ守ル保安官デス。

マリルカラ通報ヲ受ケテ、オ尋ネ者ヲ逮捕シニ来マシタ。」

そう言うところ“でんじは”でスリープを取り押さえた。

「オ尋ネ者の賞金八、後デギルドニ送ツテオキマス。……サア、来ルンダ。」

スリープは「トホホ……」と言いながら、ジバコイル達に連行されて行った。

「ルリリ！」

マリルが駆け寄って来て、ルリリを抱きしめた。

「どこにも怪我はない？」

「うん。大丈夫。お兄ちゃん……怖かったよお！」

ルリリはワンワン泣き始めた。

「ルリリを助けて下さってありがとうございます。何とお礼を言ったらいいか……。」

マリルも涙目になりながらお礼を言ってきた。

「いいよ。お礼なんて……。探検隊として当然の事をしただけだよ。」

イーブイが照れくさそうに言った。

「さあ。そろそろ帰りましょう。きつとお母さんが心配して待つてるわよ?」

エリーが笑いかけながら言った。

「はい。本当にありがとうございます。」

ペコツとお辞儀して兄弟仲良く帰って行った。

「あたし達もギルドに戻りましょうか。」

「うん!」

スカイズもトゲトゲ山を離れ、ギルドへと帰って行った。

「スカイズ!よくやったな。」

ギルドに帰ると満面の笑みを浮かべた、ペラップに褒められた。

「ジバコイル保安官から、お尋ね者の賞金、3000ポケが届いているぞ。」

チャリンと言う袋を取り出して、彼は言った。

「3000ポケ!??」

イーブイが思わず目を輝かす。その横でエリーが呟いた。

「イーブイ……あんまり期待しない方が良いわよ。」そんなエリーの言葉は耳に入らなかったペラップは、袋から3000ポケを取り出し、それをスカイズに手渡した。

「はい。オマエ達のだ。この調子でギルドをうんと儲けさせてくれよ。」

ペラップの言葉に愕然とする2匹をその場に残し、ペラップは階

段を下りて行った。

「ギ……ギルドを儲けさせてくれ……って……。」

「どつりでペラップの機嫌がやたら良かった訳ね……。まあ、とにかくルリリを助けられたんだし、良しとしなくちゃね。」

うなだれていたイーブイは、この言葉で顔を上げた。

「そういえば……不思議だね？エリーがルリリちゃんが襲われる夢を見なかったら、助けに行けなかったもんね？」

「確かに……そうね。」

何であたしはあんな夢を見たのかしら……。

そんな事を悶々と考えていると、不意にグウーツと言つ音が聞こえてきた。

「え………？」

「あはは……。私のお腹が鳴っちゃった……。」

イーブイが頬を赤くして言った。

「もうイーブイったら……。」

エリーのお腹からも音が聞こえた。

「あ………。」

思わずエリーも顔を赤くした。

「あははっ！エリーのお腹も鳴った！」

イーブイが無邪気な笑顔を浮かべて笑った。

「あたし達、ルリリを助けるのに必死だったからね……。」

再び、今度はエリーとイーブイのお腹が同時に鳴った。

「気付いたら余計にお腹空いちゃった！エリー、ご飯食べに行こう！」

「ええ。」

2匹は夕ご飯を食べ、寝室でぐっすりと眠りに付くのだ……。

8話 ルリリを救え！（後書き）

エリー

「ひのこ」……！」

ギャー……ス！！？いきなり何イイイイ！！？

エリー

「今回の話の前半……あれは、あたしへの嫌がらせなの？」 大量
のイトマルに襲われた事を言ってます。

嫌がらせて……（汗）

決してそんなんじゃない！

（こんなんでも“リンゴの森”とか行ったら、ホントどうなっちゃうんだろ……汗）

えー……話は変わって、ハートゴールドの進行状況です。「そんなモノ興味ない」って方は回れ右しても良いですよ。あくまでメインは小説の方ですから。

バッジ、7個

手持ちは

ワニノコ、ピジョン、デンリュウ、クサイハナ、ガーディ、エーフィです。

ちなみにワニノコとガーディ以外皆 だったり（笑）

エリー

「そういえばハートゴールドにロコンって出ないんだっけ……。」

イーブイ

「作者さん。イーブイ育てたんだね！……あれ？何かややこしい？」

今ではエーフィですが。イーブイ進化系の中ではエーフィが1番好きです。

エリー

「ワニノコは進化させないの？」

連れ歩く時に可愛くて進化させられません！！

エ・イ

「……………（汗）」

さて、こんな感じかな？

エリー

「これのどこが進行状況なの？」

最初に「バッジ7個」って書いたじゃん。

ではまた次回

エリー

「強引に終わらせた……。」

9話 止まる時間、動きだす歯車（前書き）

今回の話、いつもよりかなり短いです。

おまけに主人公コンビの出番少ないです。

エリー

「ちよっ……主人公の出番が少ないってどういう事よ？」

今回の話は、君の知らない所での出来事を書いてるからね。

エリー

「は………？」

では、本編どうぞ！

しばらく頭を抱え込んだ後、こう言った。

「この雷雨が収まるまでギルドに居てよろしい……。」「

その後、ペラップは頭を抱えたまま、どこかへ行った。

「あゝ、良かった。こんな雷の時に依頼に行かなきゃなんないのかと思つたよ。」「

「あたしもこんな土砂降りの中、外に行くのはゴメンね。」「

2匹は窓の外を見ながら、ほつとして言った。

「そういえば、イーブイ……。」「

「ん？なあに？」「

しばらくしてエリーが口を開いた。

「前から聞こうと思つてただけ……最近時が狂い始めてるって言つたわよね？それって一体どういう事なの？」「

エリーの質問にイーブイはしばらく首を傾げて考えた。

「うゝん……。私もよく解らないんだけど……。でもみんなは、

“時の歯車”に異変があつたんじゃないかって噂してるよ。」「

「時の……。……。歯車？」「

エリーの言葉にイーブイは頷いた。

「そう。時の歯車っていうのはね、火山の中とか……。誰も行けないような秘境にあつて、その地域の時間ときを守ってるんだよ。そして……。置いてあるその場所から盗ると、その地域の時間は止まってしまつと言われているんだよ。」「

「止まる？時間が？」「

エリーがイーブイの言葉に驚いて声を上げた。

「そう。だから、どんなに悪いポケモンでも時の歯車だけは盗ろうとしないんだよ。」「

エリーは「ふゝん……」と相槌を打つて、窓の外を見た。

「時間の異変に、その地域の時間を守る時の歯車か……。」「

キザキの森

トレジャータウンから遙か東にある広大な森。

その入り口にある1匹のポケモンが立っていた。

「ここが……キザキの森か。“あれ”が安置されている場所……」

そのポケモンはそう呟くと、左手にピンクのリボンを握りしめ、森の中へと入って行った。

激しい雨と風、そして向かって来る敵ポケモンをモノともせず、“彼”は進んで行く。森という場所が彼に力を与えていた。

しばらくして……森の一番奥へとやって来た。そこには、エメラルドグリーンの不思議な光を放つ歯車が空中に浮いていた。

彼はその様子を見て目を見開く。

「初めて見るが……これが……そうなのか!」

歯車にさらに近付いた。上空ではゴロゴロ……という雷の音が響く。

「ついに……ついに見つけたぞ!時の歯車!まずは……1つ目!」
そう言うと彼は歯車を取った。

すると、歯車の在った場所から光が消え、元々雨雲と森の奥深くという事で暗かった辺りがさらに暗くなった。

それを見た彼は、風よりも早く元来た道を駆け抜け、森の外に出た。そして、森を振り返った。

「これも……これから生きる、新たな生命いのちの為……。」「
そう呟くと、時の齒車を紐でぶら下げた袋に入れ、その場から立ち去った。その左手には、今もピンクのリボンが握りしめられていた。

彼が去った後のキザキの森は恐ろしく静かだった。ポケモン達の喋る声も聞こえず、辺りは真つ暗だった。おまけに森の外では雨がまだザーザーと降っているのに、中では降っていない。全ての動き時間が止まっていた。

そんなキザキの森にまた別のポケモンがやって来た。

「……………遅かったか。」「
周囲より一段と暗い森、葉から落ちる途中で止まっている水滴を見ながら、そのポケモンは呟いた。

そう簡単には行かさない。

そう決意を固めると、彼もまた森を離れ、キザキの森以外の場所では、未だ降りしきる雨の中へと消えて行った。

しばらくして雨も止み、元氣良く依頼をこなしに出かけるスカイ

ズは知る由も無かった。

ある森の時間が止まり、そして、時間を巡る物語の歯車がにわか
に動き始めた事を……………。

9話 止まる時間、動きだす歯車（後書き）

私、ダンジョン系のBGMでは、キザキの森が1番好きです。

エリー

「誰も聞いてないわよ、そんな事。」

やっぱり酷いよ、君（泣）

はい。では、ハートゴールドの進行状況ですね。えっと、別に知りたくも何ともないって方は戻って良いですよ。大して進んでませんし（笑）

バッジ、まだ7個（笑）

ピジョンがピジョットに進化。そしてワニノコモオーダーにしてもしまいました。

そしてなんと……ライコウをゲットしてしまいました（笑）

こちらの素早さが足りないのは解ってますから、HP満タンの状態でダメ元でクイックボール投げてみたら……え、入っ

ちゃった？

「嘘オ！？」って叫んだのと同時にクイックボール凄………と思いました。

では、今回はこの辺で

10話 見張り番(前書き)

今回、イーブイの意外な特技(?) 発揮です!
意外って程でもないかと思いますが。

10話 見張り番

それから数日。

スカイズは順調に依頼をこなして行った。

そんなある日の朝礼の後……

「今日はどんな依頼をやるうか？」

2匹で話しながら掲示板に向かおうとすると、突然大声に呼び止められた。

「おーい！！オマエ達ーっ！！スカイズ！！」

声の正体は爆音目覚まし、ドゴーム。スカイズはすぐさま彼の元に向かった。

「何？ドゴーム。」

「ああ。今日はオマエ達に見張り番の仕事をして欲しいんだ。」

『見張り番？』

エリーとイーブイの頭上に“？”が浮かんだ。

「オマエ達もギルドに初めて来た時、足形判定されただろう。」

「あ……………」

2匹は初めてギルドに来た時の事を思い出す。

そういえばそんな事されたっけ。

「でも何であたし達がやるの？それってデイグダの仕事でしょ？」

「スミマセン。エリーさん、イーブイさん。」

突然地中から声が聞こえ、ポコツという音と共にもぐらポケモン、デイグダが現れた。ちなみに掲示板の更新係をしているダグトリオは、彼の父親だ。

「お父さん、また仕事サボったみたいで……………。ボクが掲示板の更新をしなきゃならないんです。」

さ、サボった……………？しかもまたって……………。

イーブイの顔を見ると、彼女も苦笑いを隠せない様子。

「デイグダ……大変ね。」

エリーが同情的になって呟くと、デイグダも苦笑いして「慣れましたから」と言った。

「イーブイ。やりましょうか、見張り番。」

「うん！」

イーブイも大きく頷いた。

「ありがとうございます！スカイズさん。では！」

そう言っただィグダは再びポコツという音と共に地中に潜り、その場を離れた。

「よし。それじゃ、エリーにイーブイ！早速この穴から見張り穴の下まで行ってくれ！！」

ドゴームが自分の前にある穴を指差して言った。

「解ったわ。」

そう言っで、スカイズはその穴の中へと入って行った……………のはいいのだが。

「……………イーブイ。もう少し離れてくれない？」

何故だかイーブイがびつたりと張り付いて歩くので、エリーは非常に歩きにくい。

「だつてえ……………こんなに暗いとは思わなかったんだもん……………」

実際先に行くエリーは「手探りしながら進んでいる。」

歩きながらエリーは「はあ……」とため息を吐いた。ふと前を見ると、上から光が射し込んでいる場所が見えた。取り敢えずエリーはその下を目指す事にした。

「……………うん。ここが見張り穴の下みたいね。」

光の真下まで行って上を確認すると、ぱつと見、こそばゆそうな網が見えた。

「良かった……………明るい……………」

一方のイーブイは実際見張り番の仕事をする場所の明るさにホツとしていた。

「おーい！！エリー！イーブイ！聞こえるかあああ！？」

不意にドゴームの声が聞こえてきた。その声は声の主が近くに居るんじゃないかと思える位よく聞こえた。

エリーとイーブイも「聞こえてる!」と返事をするが……

「ん!?今何て言った!？」

と返つて来た。2匹は顔を見合せ、再び必死に声を張り上げた。

『聞こえてる!?!?!』

「おっ、そうか!良かった!」

何だか見張り番をやる前から喉が潰れそうである。

「見張り穴の下に着いたか!？」

そう尋ねてきたドゴームにエリーとイーブイは再び声を張り上げ、

「着いた!！」と答えた。

「よし!それじゃ足形をよく見て、どんなポケモンが教えてくれ!

!……ポケモンが来たぞ!！」

その声に反応して、2匹は上を見上げた。誰かポケモンが乗っている。

「えっと……あれは……?」

「足形はトゲピー!！」

エリーが考えていると、イーブイが先に答えた。

「おっ、よし!正解だ!！」

エリーは驚いてイーブイを見る。

「何で解るの?」

すると、イーブイは照れたように言った。

「足形文字とか読んでたからかな?こーゆーの結構得意なんだ」

「足形文字……?」

「ポケモンが来たぞーっ!！」

エリーは足形文字が何なのか聞こうとしたが、見張り番の仕事中心だという事を思い出し、聞くのを止め、再び仕事に集中した。

その後ずつと見張り番の仕事を続け、ペラップが「来客終了」

と言った頃にはもう夕方になっていた。

「ゲホゲホ……の、喉が……………」

「あ……あたしも……ゲホッ……………」

2匹で交代しつつ見張り番の仕事をしていたので、2匹とも喉は痛いし、上を見上げていた為、首は痛いしという状態だった。

ちなみに今2匹は見張り穴とギルド地下2階を繋ぐ、暗いトンネルを通っているのだが、行きと同じようにイーブイはエリーにぴったりとくっついて歩いていった。

「イーブイ……歩きにくい……ゲホ……………」

「だって……暗いの怖いんだもん……ゲホ……………」 そんなこんなでようやくギルドの地下2階へとたどり着いた。

「おっ、帰ってきたか。」

ドゴームが出迎えたが、彼の声はまったくもって普通である。彼も見張り番の仕事の間中、ずっと大声を出していたのだ。そこはやはり慣れなのか、分類が大声ポケモンだからなのか……………」

「うつつ……………ただいま……………ドゴーム……………ゲホゲホッ。」

「オマエら……大丈夫か？ 凄い声だぞ？」

あんな大声ずっと出してたら、声、変になるのも当たり前じゃない……………」

もうほとんど喋る気力もなく、心の中で文句を言った。

「ああ、オマエ達……！」

ペラップが飛んできた。

「見張り番の仕事だが、中々良い出来だったぞ ご褒美だ」

ペラップから渡されたのは、200ポケ、キトサン、そしておいしいミツだった。

「いいの？……………やった……………ゲホゴホゴホッ……！」

喉が限界に達したらしく、イーブイは思いっきりむせ返った。

「あ……オマエ達。夕飯まで時間があるし、しばらく部屋で休んで下さい。」

「そうするわ……………ゴホッ。」

そう言ってエリーとイーブイは自分達の部屋へと向かった。
見張り番の仕事は成功したが………しばらく喉の痛みと格闘する
事になったスカイズだった。

10話 見張り番（後書き）

エリー（微妙な締め方ね……。）

イーブイ（うん……。）

悪かったな、微妙で。

てかボード使って会話してるって重症だね、君達……。（汗）

エリー（ドゴームに初めて尊敬の念を持ったわ……。）

イーブイ（だってどんなに大声出しても声、枯れないんだもん……ドゴーム先輩……。）

さすがは大声ポケモン（汗）

活動報告というモノが出来ましたが……どうしよう？そこにハート
ゴールド進行状況書こうかな？

エリー（それ……活動報告？）

違うかなあ？

11話 ルカリオ（前書き）

何の捻りもありませんね、このタイトル。

一応『探検の記録』の方で言った、オリキャラです。

…………… ルカリオのキャラぶち壊し+今後の出番はあるかどうか分かりません。

Rさん「何だて　！」

フライングして出てくるな！

11話 ルカリオ

見張り番で痛めた喉はすっかり治り、いつもの朝礼を終えたスカイズは、依頼掲示板を見るため、地下1階へと向かった。

「うーん……あたし達に出来る依頼はこれかしらね……。」

そう言っつて、エリーは掲示板から依頼が書かれた紙を1枚剥がす。
「うん。そうだね。」

イーブイが紙を覗き込んで相槌を打った。

「ハイハイ！お二人さん！！」

やたら機嫌のいい声がして、エリーもイーブイをそちらの方を振り向く。

「あ。ハイガニ。」

エリー達に声を掛けたのは、ギルドの弟子の1匹である、ごろつきポケモンのハイガニだった。

「今日はどこのダンジョンに行くんだい？」

「トゲトゲ山に、依頼主のリーシャンが落としたって言う“あなぬけの玉”を探しに行くんだよ。」

ハイガニの質問にイーブイがニツコリと笑いながら答えた。

「ハイ！そうか！頑張れよ！」

そう言っつとハイガニはスカイズと別れ、自分の依頼をこなしに行った。

「じゃ、あたし達も行きましょ。」

「うん！」

そう言っつて、スカイズも自分達の依頼の場所、トゲトゲ山へと向かった。

敵ポケモンを倒しつつ、順調に登って行くスカイズ。前にも登っ

た事のあるダンジョンなので、今回は至って余裕だ。

「そういえば…………… 依頼書に書いてあった、あなぬけの玉って何？」
歩きながらエリーがイーブイに尋ねる。

「使うと色々な効果を発動する、不思議玉の一種だよ。」
「不思議玉？」

イーブイの答えにエリーは首をかしげて聞き返した。

「そう。例えば、あなぬけの玉はダンジョンから安全な場所へと脱出させてくれるんだ。他にもたくさん種類があって、どれもとっても便利なんだよ。」

「へえ……………」

エリーは相槌を打って、さらに歩を進めた。

「ん？あれは……………」

イーブイが呟いた。エリーはイーブイの視線を辿った。そこには

……………

「大変！誰か倒れてるわ！！」

2匹は慌ててその倒れてるポケモンに駆け寄った。

近づくと、それは青い身体に尖った顔、耳。波動ポケモンのルカリオだった。

「だ、大丈夫ですか！？」

「しっかりしてー！！」

エリーとイーブイは必死にルカリオに声を掛ける。とその時間こえてきたのは……………

ぐうぐきゅるるる…

という奇怪な音。

『へっ？』

同時に間の抜けた声を出すエリーとイーブイ。

「このルカリオ…………… もしかして、お腹空いてるのかな……………」
「多分ね……………」

そう言っただけでエリーはバッグの中をこそこそ探し始めた。

「確か、さっき拾ったリングゴがあるはず…………… あ。あったわ！」

バッグの中からリンゴを取り出し、それをルカリオの前に置いた。それから起こしに掛かるうとしたが、その前に……………

「……………!!」
ルカリオの鼻がピクピク動いた。

「……………リンゴっ!!」
そしていきなりガバツと起き上がり、リンゴに食らい付いた。リンゴは数秒で無くなった。

「プハーツ！生き返った！！君達っ！！ありがとう！！私を空腹地獄から救ってくれて！！」

啞然としていたスカイズはルカリオの言葉で我に返る。

『あ、はあ……………。ど、どういたしまして。』
そして気の抜けるような返事をした。

「え、えつと……………貴方は、どうしてあんな所で倒れてたの？」

エリーが平静を取り戻しつつ、ルカリオに尋ねた。

「プクリンのギルドを指して、旅をしていたのだが……………。その途中、転んでバッグに入っていた物が全て谷底に落ちてしまって……………。おまけに“ベトベタスイッチ”で残った食料も全てベトベタフードに変わるしでね……………。空腹地獄に耐えかねてあそこで倒れてしまった、という訳なんだ。」

転んでバッグの中身全て谷底に落とした、って……………。

再び声を失うスカイズの頭に「ドジ」という2文字が浮かんだ。

「……………えつと。良かったら、探検隊バツジでプクリン親方のギルドまで送りますけど……………」

イーブイがルカリオに提案した。

「え？」

「あたし達、プクリン親方の所のギルドで修行しているの。今は依頼の最中で……………」

エリーが説明する。すると、その途端ルカリオの顔がぱつと笑顔になった。

「いや〜そうだったのか！空腹もある程度解消されたし……………私

も君達に同行しようかな？」

『はい？』

2匹そろって間抜けな声を出すスカイズ。

「いいじゃないか。若き探検隊の活躍をこの目で見たいんだよ。さあ、行こう」

スカイズに「はい」とも「いいえ」とも言わず、ルカリオは勝手に行動を共にする事に決め、さっさと歩き始めた。唾然としていたエリーとイーブイも慌てて彼の後を追うのだった。

途中、山に住むポケモン達と戦いつつ、あなぬけの玉を探すスカイズ。しかし……

「うおおっ！！？」

ルカリオが派手に転んだ。

「ルカリオさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫……じゃなさそうだな。」

イーブイが聞くと、ルカリオが苦笑いしながら足元を見て言った。そこにいたのは、怒った表情をしているイシツブテ……。ルカリオは周りの地形に溶け込むようにして寝ていたイシツブテに気が付かなかったのだ。

「あ………また……。」

エリーが思わず呟く。

何しろ、ルカリオがイシツブテで転んだのは、これで10回目なのだ。

「オマエら……よくもこの俺を踏みやがったな……？」

イシツブテが怒りに満ちた目でこちらを睨み付けながら、低い声で言う。

「オマエら………って事はあたし達も含まれるの？」

「当たり前だ！！食らえ！“たいあたり”！！」

イシツブテが問答無用で突進してきた。ちなみにこんな展開もか

れこれ10回目……………。

ため息を吐きつつ、エリーが“だましうち”で迎え討った。

「イーバイ!!」

「うん!任せて!“たいあたり”!!」

イシツブテが体勢を崩した所をイーバイが“たいあたり”で追撃した。

「うひゃ~~~~!!」

すると、さっきまでの強気な姿勢はどこへやら。イシツブテは奇声を上げて逃げ出した。

「おおっ!ブラボー!」

ルカリオはニコニコしながら、拍手している。ちなみに彼は1度も戦ってなかったり……………。

「ちよつと…………… 静観してないでたまには手伝ってよ……………。イシツブテを怒らせたのは、ルカリオさんでしょ?」

エリーがイライラを含んだ口調で言った。

「ははは。まあ、気にするな。」

そう“再び”誤魔化してルカリオはさっさと先に進んで行く。

「あたしがああ言う度に誤魔化されてるような気がするわ……………。」
エリーがイーバイに呟くと、イーバイは思わず苦笑いをこぼした。
とその時……………。

「おおおおっ!!!?!?」

ルカリオの声がして、前方を見ると、再び彼が派手に転んでいるのが見えた。

『まさか、また……………?』

そう言いながら、スカイズはルカリオの元へ行く。

「ルカリオさん、何があったの?」

「まさか、またイシツブテに転んだとかじゃ……………?」

「いや、そうでもないぞ?」

そう言っただけルカリオは自分の足元にあった物をエリー達に見せた。それは不思議な光を放つ玉だった。

「それだよ！あなぬけの玉！！」
イーブイがルカリオからあなぬけの玉を受け取った。
「これで依頼成功ね。ギルドに戻りましょうか。」
そう言うとエリーは探検隊バッジを取り出し、皆にかざした。
次の瞬間スカイズとルカリオは光に包まれ、ワープした。プクリ
ンのギルドに向かって。

「ありがとうございます！スカイズさん」
ギルドに戻り、今回の依頼の依頼主である、リーシャンにあなぬ
けの玉を渡した。

「お礼に2000ポケと睡眠の種をあげますね！」 スカイズにお
金と種を渡すと、リーシャンはお辞儀をしてから帰って行った。

「よし。オマエ達 よくやったな それじゃ……………」
ペラップはイーブイの持っていた袋をいつものように奪い取ると、
袋の中から2000ポケを取り出して、それをスカイズに投げ渡した。
「うっ…………。やっぱり減らされちゃうんだね。」

イーブイが一気に10分の1に減ったお金を見て言った。

「いや〜。それにしても、ルカリオさん久しぶりですね〜」

「ああ。こちらこそ。久しぶりですね。」

ペラップがルカリオにかなり親しげに挨拶している。

「…………？ペラップ。知り合いなの？」

思わずエリーが尋ねる。

「だから、ペラップ“さん”って言ってるだろ！！……………あ、失
礼しました。ルカリオさん。スカイズ、こちらのルカリオさんはポ
ケモン探検隊連盟の隊員なのだ。」

イーブイはその言葉に反応して驚いたが、エリーの頭上には「？
が浮かんだ。

「ポケモン探検隊連盟って……………何？」

ペラップがエリーの発言にずっとこけた。
がくうっ!!

エリーの発言にペラップがずっとこけた。

「オマエ……………！ポケモン探検隊連盟を知らないのか？」

「知ってたらわざわざ聞かないわよ。」

ペラップの反応に多少不機嫌になりながらエリーが言い返した。

「じゃあ、私が説明するよ。ポケモン探検隊連盟っていうのはね、一流の探検家で構成された、全国の探検隊をまとめる凄い組織なんだよ。そうそう。このトレジャーバッグを作ったのも探検隊連盟なんだよ。」

イーブイが説明した。

「ふうん……………」

……………あんなドジな人ポケモンがそんな凄い組織に入れるんだ……………。

エリーは相槌を打ちつつ、頭の中では結構酷い事を思っていたり……………。

「ほう。ちゃんと勉強しているんだね。偉いな。」

ルカリオが誉めるとイーブイはてへへ、と笑った。

「……………さて。プクリンさんと話でもしてくるとしよう。それじゃ、また。」

そう言つとルカリオはギルドの地下2階へと下りようとした。……………

……………が、梯子の手前で転び、下へと落下した。

……………
「……………」
スカイズは再び口を開けて固まった。ペラップも固まっていたようだったが、頭を振って、ルカリオの後を追った。

「どこまでもドジね……………あのルカリオ……………」

「な、何だつて!!!?」

プクリンの部屋でルカリオの話にペラップは思わず大声を上げた。ルカリオは慌てて彼の嘴を押さえる。ペラップは黙り込んだ。

「……………ですからプクリンさん。協力お願いします。」

「もちろんだよ。協力する。だつて……………」

時の歯車が盗まれた事でキザキの森の時間が止まってしまったのだから……………。

11話 ルカリオ（後書き）

今回の話……………ギャグなのかシリアスなのか解らん。

エリー「でもシリアスなの、最後の数行だけじゃない。」

……………確かに。

ところで、作者は明日、明後日と1泊2日の旅行に行きます。

まあ、元々約2週に一回のハイパーノロノロ更新なので、あまり関係ない話かもですが、感想への返信は遅れる……………かもしれない。

それでは、旅行楽しんで来ます（笑）

12話 初めての探検(前書き)

エリー「前回の更新から3週間経ってるけど、一体何してたの？」

文化祭があつて、色々忙しかったんです！

てか、この超スローモーなこのペースが私のペースですっ！

エリー「開き直ってるし……」（呆）「

12話 初めての探検

「え、今日は皆に大事な話がある。」
いつもの朝礼の場。

そこでペラップがいつになく神妙な面持ちで話し始めた。

「実は昨日、探検隊連盟のルカリオさんから聞いたのだが……

……ここから東に行った所にあるキザキの森の時間が……

……止まってしまったらしい。」

『ええー！ー！ー！？キザキの森の時間が止まったー！？』

弟子達から一斉に驚きの声が上がった。

「ああ。時間が止まったキザキの森は暗く……風も吹かず……

……そこに住むポケモンもどこかおかしいと言う。まるで……

正気を失ったかのように……。」

その場にいる全員が言葉を失った。

「それにしてもどうしてだ？どうして、キザキの森の時間は停止し

てしまったのだ？」

ギルドの掲示板の更新係をしているダグトリオが最初に口を開い

た。その一方でキマワリは、はっとした表情に変わる。

「ま、まさか………時の歯車に何かあったんですの？」

彼女の言葉にペラップが頷いた。

「………キマワリの言う通りだ。時の歯車が何者かによって盗まれ

てしまったらしい……。」

『ええー！ー！ー！？』

再び、弟子達が一斉に驚きの声を上げる。

「ハイハイ！！信じられないぜ！時の歯車を盗む奴が現れるなんて

よー！！」

ヘイガニが両手のハサミを振り回しながら言った。

「だから、皆！誰か不審なポケモンを見つけたら、直ちにジバコイ
ル保安官に通報して欲しいとの事だ。」

「……………それじゃ、皆！今日も仕事に掛かるよ！」

『おおーっ……………！』

ペラップの号令に返事をする皆の声がいつもより元気がなく、その場に止まり、今聞いた話について意見交換し始めた。

スカイズの2匹も到底、依頼掲示板には行く気になれなかった。

「時の歯車を盗ると、本当に時間が止まってしまっうなんて……………」

「

「一体誰がこんな事したんだろうね……………？」

周りの皆も同じような話をしている。と、その時……………」

ビシッ！

バシッ！

ペシンッ！

「痛ッ！」

「痛いでゲス！」

「きゃーですわっ！」

皆の頭を何かがひっぱいた。

見るとその「何か」は不機嫌な顔をしたペラップだった。

「キザキの森の事が気になるのは分かるが、オマエ達には仕事があるだろっつ！！ほら！さつさと行った、行った！」

ペラップは翼で皆を追いたて始めた。

スカイズも行こうとしたが……………」

「ああ。スカイズ！ちよつとこっちに来なさい。それとキマワリ。

親方様が呼んでいらっしやるぞ。」

急にペラップに呼び止められた。

「何だろっ」と言うような顔をして、スカイズはペラップの所へ、キマワリはプクリンの部屋へと入って行った。

「……………それで？話は何なの？」

エリーが最初に口を開いてペラップに尋ねる。

「今日はオマエ達にある場所へ“探検”に行ってもらおうと思っ。」

「ええっ！！？探検！！？」

イーブイが驚いて大きな声を出した。

「ああ。探検だ。だってオマエ達、最近頑張っているじゃないか？お尋ね者も逮捕したし……………ルカリオさんもオマエ達の事を誉めていたぞ」

ペラップがニコニコしながら言った。

珍しくペラップに誉められて、顔を見合わせて照れるエリーとイーブイ。

「……………で、今回調査に行つて来て欲しい所なんだが……………。」
ペラップが地図を取り出して、床に広げて説明し始めた。

「まずトレジャータウンはここ。」

ペラップは地図上の西の海岸沿いにある、「トレジャータウン」と書かれた地点を（翼で）指差した。

「で今回調査してきて欲しいのはここ。」

トレジャータウンから北東方向に少し行った地点に翼を動かした。「ここには大きな滝があつてね。何か秘密があるんじゃないかと噂されているんだよ。そこでオマエ達にその謎を調査してきて欲しいと言つわけだ」

ペラップはにっこりと笑顔のまま説明した。エリーも段々と実感が湧いてきたのか、瞳が輝き始めた。

「それにしても初めての探検か……………ワクワクしてきたわね。ね、イーブイ!……………イーブイ?」

イーブイから返事が無いので、彼女の方を見てみると、ガタガタ震えているのが解った。

「おや?緊張しているのかい?」

ペラップが尋ねる。

しかしよくよく見てみると、イーブイの目元には涙が光っているのが見えた。

「わわっ!?ど、どうしたんだい!?」

ペラップが翼をばたつかせて慌てたように言った。

「……………大丈夫。探検に行くんだって事を実感し始めたら……………」

…何かワクワクしてきちゃって……………」

イーブイは前足で目をゴシゴシ擦った。

「エリー！初めての探検……………絶対成功させようね！」

「もちろんよ！」

そう言うと、早速部屋からトレジャーバッグを取って来て、探検の準備をしにトレジャータウンへと向かった。

「ガルーラおばちゃん！オレンの実と石のつぶてと復活のタネを出してくれる？」

「はいよ！ちよつと待っててね」

カクレオン商店で買い物を済ませ、今はガルーラの倉庫で道具の整理をしている所だ。

「はい、お待たせ！」

ガルーラがイーブイから頼まれた物を持って戻って来た。

「ありがとう！ガルーラおばちゃん！」

イーブイは道具を受け取ると、トレジャーバッグの中にそれらを入れた。

「それじゃ、行ってくるね！」

「探検、頑張るんだよ！」

歩きだした2匹にガルーラは声援を送った。

「これで準備は整ったわよね？」

ギルド前の交差点に向かいながらエリーがトレジャーバッグを覗き込み、言った。

「うん、大丈夫」

話ながら交差点に差し掛かると、ギルドの方からキマワリが降りてきた。

「あら！アナタ達！これから初めての探検に行くんですの？」

「ええ、そうよ。キマワリは？親方様からの用事は何だったの？」
エリーが聞き返した。

「ワタクシはSランクのお尋ね者を退治しに行くんですの！」

「Sランク？うわぁ……………凄いな。」

イーブイが感嘆の声を上げる。

「どんな相手なの？」

エリーが尋ねた。

「“不死身のゴースト”と呼ばれているゴーストですわ。」

「“不死身のゴースト”??」

エリーとイーブイは同時に尋ねた。

「ええ。倒しても何度も立ち上がる事からそう呼ばれているらしい
ですわ……………。」

「中々大変そうね……………。」

「そうですね。でも、必ず成功させてみせますわ！それじゃ、お
互い頑張りましょ！」

そう言うとキマワリはトレジャータウンへと去って行った。

「それじゃ、あたし達も行きましょうか。」

「うん」

エリーとイーブイ　スカイズは秘密の滝へと向かった。

『う、うわぁ……………。』

目的地に到着した2匹は、目の前の滝を見て、言葉を失っていた。

何しろその滝は巨大で水が凄い勢いで流れ落ちているからだ。

「す、凄い滝だね。」

イーブイは滝に圧倒されて口を微かに開けている。

「そうね。……ペラップの話だと、ここに何か秘密があるそうだけ
ど……………」

エリーは辺りを見回した。

「どこに秘密が隠されているのかしら……………」

ふとイーブイの方を見ると、さっきまでいた場所にイーブイがい
ない。

いつの間にやら彼女は、滝のすぐ側に近づいていた。そして、滝
にちよこりと触れた。すると……………」

「うわわわ!!?!?」

水の勢いで跳ねとばされて、エリーの近くに転がってきた。

「イーブイ!大丈夫?」

慌ててエリーが助け起こした。

「うん。大丈夫。……………」でも、凄い勢いだよ。この滝。」

エリーもゆっくりと滝に前足を伸ばし、触れた。水の勢いは凄ま
じく、すぐに前足を引っ込めた。

「本当。凄い勢いね……………」

「どこに秘密が隠されているんだろ……………?うーん……………」

イーブイは滝の前で行ったり来たりを始めた。

エリーもその場で考え込んでいると、その時……………」

ぐわわ〜ん……………」

「!?!?」

突然、強烈な目眩に襲われた。

「う、この目眩は……………」

ぐわわわ〜ん……………」

「この目眩は、確か前にも……………！」

そう思った瞬間、エリーの頭の中にある映像が飛び込んできた……………。

エリー達が今いるのと丁度同じ場所に、1匹のポケモンのシルエツトが立っていた。

そして、後ろに思いつきり下がると勢いよく助走をつけて、滝に飛び込んだ。

……………場面は変わり、ある洞窟のような場所……………。そこに、先ほど滝に飛び込んだポケモンが転がってきた。そして、辺りを見回すと、洞窟の奥へと進んで行った……………。

「……！」

映像が終わった。

エリーが驚いて辺りを見回すと、イーブイが心配そうにこちらを覗き込んでいるのが見えた。

「エリー。大丈夫……………？」

「えっ、ええ。大丈夫よ。」

心配そうな顔をしているイーブイにエリーはにこっと微笑んで見せた。

「それよりもね……………さっき、また見えたの。」

「見えた……………？一体何が？」

エリーの言葉にイーブイが首を傾げる。

「スリープの一件の時に見た、あの夢のようなもの。」

その説明でイーブイは完全に納得したようだ。

「それで？今度はどんな映像が見えたの？」

途端、エリーの表情が緊張した面持ちに変わる。

「……………この滝に関する事なんだけど……………。そして、その映像を見る限り……………。」

「み、見る限り……？」 エリーの緊張した表情、そしてその口調に、イーブイはゴクリ、と唾を呑む。

「あたし達はあの滝に飛び込んで行かなきゃいけないんじゃないかしら……。」

「え、ええっ！！？」

イーブイは思わず声を上げた。

そんなイーブイの声を聞きながら、エリーはまだ迷っていた。

確かに、1匹のポケモンがあたしの滝に飛び込み、あたしの裏側にある洞窟に入るのを見た。……だけど……、もしあの映像が嘘だったら？あたしの裏側に何もなかったら……

「……信じるよ。」

「え？」

不意にイーブイの声かして、エリーは顔を上げた。

「私……エリーの事、信じる！だから、行こう！あの滝の裏側へ！」

エリーは一瞬、呆然とイーブイの顔を見つめたが、すぐに笑顔になった。

「ありがとう……イーブイ。あたしも……あの映像を信じるわ。」

そして、2匹は思いっきり後ろに下がった。

「中途半端な気持ちであたしの滝にぶつかったら、大怪我じゃ済まないわ。思いっきり行くわよ！」

「うん！分かってる！」

2匹は滝を見つめた。

「それじゃ……3つ数えて行くわよ……1……2の……3つ！！」

スカイズは勢いよく助走をつけ……そして、目の前の巨大な滝に飛び込んだ。

「うわわわわわ!?!」

スカイズはしばらくゴロゴロ転がって、ようやく止まった。

「こ、ここは……?」

エリーは起き上がり、身震いして体についた水を振り払うと辺りを見回した。

「ここは、さっきの映像で見た洞窟!ということは……」

「やっぱりエリーが見たものは正しかったんだよ!やったあ」

イーブイはその場でジャンプした。

「イーブイ、あっちに奥へ続く道があるわ。行きましょう。」

「うん!」

……無事に巨大な滝を突破し、“滝壺の洞窟”の奥へと進み始めたスカイズ……。

スカイズの初探検は、まだ始まったばかり……!

12話 初めての探検（後書き）

この探検は………炎タイプにとって、かなりキツそうですよね（汗）
ヒトカゲとか心配になるんですが（汗）

13話 滝壺の洞窟

無事に滝を突破したエリー達、スカイズはその裏側にあつた“滝壺の洞窟”を進んでいた。

やはり滝の裏側にできている洞窟というだけあつて、住んでいるポケモンは水タイプが多かつた。

「エリー、大丈夫？」

洞窟に入つてだいぶ経つた所で、イーブイが気遣つてエリーに声を掛ける。

「これ位どうつて事ないわ。……それよりもイーブイ、前。」

エリーが前足で進行方向を指差す。そこには、黄色い体をしたあひるポケモンのコダツクがいた。

そして、敵がいると認識するなり、“みずでっぽう”を放つてきた。

しかし、スカイズはそれをジャンプして躲した。

「でんこうせっか！」

ここまでの道中で覚えた“でんこうせっか”でイーブイは攻撃する。

彼女の素早い攻撃にコダツクは対応しきれず倒れた。

どんどん強くなつて行くな……イーブイ。最初は敵ポケモンが現れる度に驚いてたのに……

イーブイの戦いぶりを見ながら、エリーは彼女が成長してきている事に喜びを感じていた。

「何ぼーっとしてるの？早く先に進もうよ。」

イーブイがエリーを急かした。

探検が楽しくて仕方がないのだろう。さつきから先頭を切つて歩いているのはイーブイだった。

「今行くわ。」

そう言つて、イーブイの後を追おうとした、その時……

ボチャン！

と大きな音がした。

「何だろう……？」

2匹は音のした方を見る。視線の先には水路が広がっていた。

「何かいるかもしれないわ。気をつけて……」

イーブイに注意を促していると、ザバァッ！という音と共にポケモンが現れた。

ひげうおポケモンのナマズン　このダンジョンにいるポケモンでは唯一の進化形ポケモンだ。

「！？」

不意を突かれたイーブイにナマズンは“どろばくだん”で攻撃しようとする。

「イーブイ、危ない！」

エリーがそう叫んだ次の瞬間、ナマズンはピタリと動かなくなっ

た。

「え………？」
呆気にとられる2匹だったが、イーブイがはっとした様子で言った。

「これ……“ふういん”だよ！“ふういん”が使えるようになったんだね、エリー！」

“ふういん”は相手の行動を一定の間封じてしまう技

「だから、ナマズンは動けなくなったのね。」

エリーが納得すると、“ふういん”が解けたのか、ナマズンが動き始めた。

「“だましうち”！」

それを見たエリーは先手を打って攻撃を仕掛けた。

“だましうち”の直撃を受けたナマズンだが、まだ体力があるらしく、“しねんのずつき”で攻撃してきた。

「“でんこうせっか”……！」

2匹はなんとか回避すると、イーブイが攻撃し、ナマズンは目を

回して倒れた。

「……ふう。ビックリしたよ。」

イーブイがホツと安堵のため息を吐きながら言った。

「そうね。……それじゃ、先に進みましょう?」

2匹は前進を始めた。

しばらく進むと、開けた場所に出た。周りには沢山の宝石がキラキラと輝いていた。

「うわぁ……綺麗だね。」

イーブイが瞳を輝かせて言った。それはエリーも「わぁ……」と感嘆の声を上げた後、こう言った。

「滝の裏側にこんな場所があったなんて……。」

やはり女の子だけあって、いくら見ても飽きないようである。

「あつ、エリー!あれ見てよ!」

不意にイーブイが声を上げる。

彼女が前足で示す方を見ると、一際大きな宝石があった。

「凄い大きな宝石ね……。」

エリーが呟く。

「あんな大きな宝石持って帰ったら、ペラップさん、ビックリするだろうね。」

イーブイが尻尾をピコピコ振りながら、嬉しそうに言った。

「でも、こんな大きな宝石……あたし達で持って帰れるかしら……。」

エリーが疑問を口にする、イーブイの顔が僅かに曇った。

「そうか……そうだよね……。」

……でも、やってみなきゃ解らないよ!」

そう言っってイーブイは宝石に近づき、抜こうとした。

「んー……!んー!」

顔を真っ赤にして、必死に抜こうとしているが、宝石はびくともしない。

「うーん……！」

ダメだ。抜けない……。」「

イーブイはぺたんとして座り込んだ。

「じゃあ、今度はあたしがやってみるわ。」「

今度はエリーが前に進み出て、宝石を抜こうとする。……が、やはり宝石は一向に抜けそうにない。

「……はあ。ダメだわ。」「エリーもまたその場に座り込んだ。

「エリーもダメだったか……。」「

そう言つと、イーブイは宝石を調べるかのようにその周りを回り始めた。

エリーがそんな彼女の様子を見てみると、突然……

ぐわわ〜ん……

「……………!?!」

滝に突入する前にも襲つた、例のあの目眩が再びエリーを襲ってきた。

また……あの目眩だわ……

そう思うと、目の前が真っ暗になり、頭の中に映像が飛び込んできた……

先程も見た、ポケモンの影が、シルエット自分達の目の前にある巨大な宝石の前にいる……。

そのポケモンは宝石を押ししてみた。

……すると、脇から水流が物凄い勢いで流れてきて、あっという間にそのポケモンを呑み込んでしまった……。

そこまで見ると、映像は終わり、エリーは現実に戻された。

今のは……

イーブイと宝石を見つつ、エリーは今見たモノについて整理する。あのポケモンが宝石を押し出した瞬間、大量の水流が流れ込んできた……。

てことは、あの宝石は罠……！？

その結論に至ったその時、イーブイの声が聞こえてきた。

「……そうだ。宝石を押ししてみたらどうかかな？」

その言葉を聞き、エリーは驚いて飛び上がる。

「だっ、ダメえっ！！その宝石を押しちゃ……」

慌てて止めようとするも間に合わず、イーブイは宝石を押ししてしまった。

カチッ！

何かのスイッチが入るような音がした。

「……………カチッ？」

イーブイは首を傾げる。

「イーブイ！早く逃げるのよー！」

そんな彼女にエリーは逃げるよう急かす。

「な、何で??」

イーブイは何がなんだかさっぱり理解できず、混乱したようにさらに首を傾げた。

「あの宝石は罠なの！押すと水流が流れ込んでくる仕掛けになっているのー！！」

今度ばかりはイーブイも理解し、わたわたし始めた。

「そ、そうだったのー！？早く逃げなきゃー！！」

2匹はその場から逃げ出そうとした。

しかし、水流が向かってくるゴゴゴゴ……という音が響いてきた。

間に合わない……！！

そう思ったエリーは、イーブイに言った。

「イーブイ！あたしの尻尾に掴まって！」

イーブイはコクリ、と頷いてエリーの尻尾を掴んだ。

「絶対に放しちゃダメよ……?」
そうイーブイに言った瞬間、2匹を大量の水が襲った。

ドシューウウウウー!という音が聞こえ、エリーは体が浮いているような感覚を味わった。……かと思いきやすぐに急降下する感覚を味わい、ボシヤアアアン!という音と共に何か温かい液体の中に落ちた。

「あ、アナタ達、大丈夫?」

ビックリしたような、でも心配するような声を聞いて、エリーは「うーん……」という声を上げて目を開けた。

心配そうな顔をしてこちらを見ているのはヒメグマにその進化形のリングマ、さらにマンキーとその進化形のオコリザルもいる。

「ここ、ここは……?」

なんとか底に足を付けて立ち上がると、エリーは首を傾げて尋ねた。

「ここは温泉じゃよ。」

ゆったりと優しい声を聞き、そちらの方向を見ると、岩盤浴をしているコータスが居た。

「お、温泉?」

度肝を抜かれた様子でエリーは呟いた。

「アナタ達、いきなり空から降ってきたのよ?」

「ホント驚いたぜ?」

ヒメグマとリンググマが言った。

「そ、空から……って……。」

……！？イーブイは？イーブイはどこ？」

エリーはしばらく混乱していたが、はっと気が付いたように辺りを見回す。

そして、尻尾の方を見ると、イーブイが気絶しているのが目に入った。

「イーブイ！イーブイ、起きて！！」

エリーが必死に声を掛けると、小さく声を上げた後、イーブイはうつすらと目を開けた。

「エリー……？」

そう呟いた後、完全に目を覚ましたようで、温泉の底に足をつけて、しっかりと立ち上がった。

「良かった、無事で……。」

ホッと安心したような笑顔を見せてエリーが言った。

「ところで、エリー。ここはどこ？」

イーブイがキョロキョロ不思議そうな顔をして、さっきエリーが口にしたのと同じ疑問を言う。

「ここは温泉らしいの。さっきあたしも聞いたばかりなんだけど……。」

「お、温泉……！！？」

エリーがイーブイの質問に答えると、イーブイはビックリして叫んだ。

「そうじゃ。温泉じゃよ。」

コータスがのほほんと言った。

「お前さん達、地図は持つてるかの？」

「地図？不思議な地図なら持つてるよ。」

イーブイがコータスの質問にそう答えると、エリーが不思議な地図を取り出した。

「ちょっと貸してみなさい。」

2匹は泳ぐようにして、コータスに近づくと、地図を手渡した。

「ほれ。ここじゃよ。」

彼は足で温泉の場所を示した。

「あたし達が調査していた滝壺の洞窟はここよね……。」

エリーが前足を地図上での滝壺の洞窟の場所に置く。

「うわぁ……。私達、だいぶ離れた所から流されて来ちゃったんだね。」

イーブイがビックリして思わず声を漏らす。

「何。そんな遠くから。」

それは疲れたであろう。少しここで休んで行ったらどうじゃ？」

2匹が遠い洞窟から流されて来た事を知ったコータスは、彼女達を気に掛け、こう提案した。

「……そうね。少し休んで行きましようか。」

「うん！」

スカイズはその提案に乗り、今日の探検の疲れを温泉で癒すのだった……。

13話 滝壺の洞窟（後書き）

普通にエリーが温泉に入ってますが、炎タイプでも温泉なら入っても大丈夫という事にしました。

……ポケスぺではワカシャモが温泉に入りましたし。

コータスが岩盤浴をしているのは、甲羅が重くて沈むから……だと
思います（笑）

14話 探検を終えて（前書き）

エリー「ほ、ホントに年内……しかも1週間で完成させた……。」

急ピッチで仕上げたから、所々変な箇所があるかも（笑）

エリー「笑い事じゃないわよ、それ……（汗）」

本編の方は微妙な位置で区切りましたが、後書きに続きが書いてあります！

エリー「……え？」

では、どござい

14話 探検を終えて

「……………それで、滝の裏側には洞窟があったんだな？」

温泉で疲れを癒したスカイズは、ギルドへと戻った。今は、ペラッパに今回の探検について報告している所だ。

「うん その洞窟の1番奥には綺麗な宝石がたっくさんあったんだよー」

「1つも取って来れなかったけど……………」

嬉しそうに尻尾を振っていたイーブイの表情が、微かに曇った。

「いやいや。あの滝の裏側に洞窟があるなんて、誰も知らなかった訳だし……………それが判っただけでも凄い成果だぞ？」

ペラッパが（彼にしては珍しく）フオローする。

それを聞いたイーブイは再び嬉しそうな表情かおをした。

「うん。そうだよね」

そんな2匹の会話を微かに聞きながら、エリーはぼんやりと考え事をしていた。あの夢のようなモノに出てきたポケモンについて……………。

あたしが見た、あのポケモンの影……………シルヘット。あれは……………もしかして、プクリン親方……………？

思い返してみても、あの影はプクリンにそっくりだったと気付くエリー。ただ、見えたのは輪郭だけだったのでハッキリとは言えないが。

だが、そうなると疑問が1つ湧いてくる。

もし……………あの滝には既に親方が行った後だったら……………何で、あたし達を行かせたのかしら……………

「エリー、どうしたの？」

すっかり自分の世界に入っていたエリーは、イーブイの声で我に返る。

「考え事でもしてたのか？」

ペラップが言い当てた。

「え、ええ。まあ、その……ねえ！ペラップ。」

こうなったら、確認してみるしかない。

そう思ったエリーは、ペラップが不機嫌そうな表情になったのは気にせず尋ねた。

「プクリン親方は……もしかしてあの滝壺の洞窟に行った事あるんじゃないの？」

そう質問すると、先程の不機嫌な表情は吹き飛び、驚いたような表情に変わった。

「親方様が滝壺の洞窟に行った事があるんじゃないか、だってえ〜〜！！？」

ペラップがビックリして叫ぶ傍ら、イーブイは何かピンときたような顔をした。

「……だって、プクリン親方って凄い探検家なんですよ？」

新米のあたし達に行かせたような場所なんだから、もしかしたら……って思ってた。

ペラップは翼を顎にあてて「う〜ん」と言った後、言葉を続けた。「確かにそうかもしれないが……」。

でも、自分が行った場所にわざわざもう1度探検に行かせたりはしないんじゃないか？」

それでも尚、エリーは食い下がる。

「一応、親方に聞いてみてくれない？」

ペラップはブツブツ言ったが、結局は折れてプクリンに聞いてみる事になった。

コンコン、とプクリンの部屋のドアをノックすると、

「親方様。ペラップです。入りますよ？」

と言ってから部屋に入って行った。

「……エリー。エリーの見た光景に出てきたポケモンって……プクリン親方だったの？」

ペラップがプクリンの部屋に消えた後、イーブイがエリーに尋ね

た。

「見たのは輪郭だけだったけど……多分ね……。」

「そっかあ……。」

エリーの答えに複雑な表情でイーバイが返事をした。

その時、部屋の中から「たぁーっ！」とか言う声が聞こえてきた。部屋の中で一体何が起こっているのかさっぱり解らず、2匹は顔を見合せて首を傾げた。

「何やってるんだろ……。」

イーバイが呟くと、ペラップがフラフラした足取りで部屋から出てきた。

「ペラップさん、大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫だ。……はあ。」

あまり大丈夫そうには見えないが、エリーはプクリン親方の答えは何だったのか尋ねた。

「ああ、それなら『思い出思い出……たぁーっ！』と言った後に、

『あー、そういえば行った事あるかもー』と言ってたぞ。」

「ええーっ！?!？」

プクリン親方はもうあの場所に行った事があるのーっ!?!？」

そう叫んだ後、イーバイはうなだれた。

「それなら、何であたし達をあの場所に行かせたの？」

エリーはさらに質問した。

「さあ。親方は妖精のようなお方だから、時々何を考えているのか私にもさっぱり解らん。」

ペラップは首を振りながら言った。

「まあ、とにかく。もうそろそろ晩ご飯ができる頃だ。食堂に行きたらどうだ？」

「そっだね。……そうするよ。」

ペラップの提案に従って、スカイズは食堂へ行くため、地下2階へと降りて行った。

その夜。

自室に戻ったスカイズはベッドに横になりながら、今日の探検について話していた。

「プクリン親方がもう行った後だったのはちょっとガツカリだったな……。」

イーブイは少し沈んだように言った。が、すぐに笑顔になっとう言った。

「でも、それ以上に凄く楽しかったよ

この先に何があるんだろう……ってワクワクしてた。

こんな思いができて、私、幸せだよ。探検隊になって本当に良かった……。」

そんな彼女の満面の笑顔を見て、「そうね。」と、エリーも笑顔で相槌を打った。

「……エリー。ありがとう。」

急にイーブイにお礼を言われて、エリーはキョトンとする。

「どうしたの？急に……。」

「あそこで……あの滝の前で勇気が出せたのは、エリーが居てくれたからだよ……。本当にありがとう。」

そう言われて、エリーは少し照れたような表情を浮かべた。

「……その勇気を出せたのはイーブイ、貴方自身でしょ？」

イーブイが成長した証よ。」

今度はイーブイがその言葉に照れる番だった。

「そ、そうかな？何か照れちゃうけど……。」

とにかく、私はもっと成長したい。そして、いつかは……。」

イーブイはゴソゴソ探して、自身の宝物である“いせきのかげら

”を取り出した。

「この“いせきのかけら”の謎を解くんだ。

……もし、その謎が解けたら、私、嬉しすぎて死んじゃうかもね
！」

「イーブイ、それは大袈裟すぎるわよ。」

弟子部屋に2匹の笑い声が弾けた。

「………そういえばさ、エリー。私、気付いた事があるんだけど。」
イーブイがふと口を開く。

「………何？」

「あのね、エリーが時々感じるあの目眩の事なんだけど……。」

あれって、必ずエリーが何かに触れた後に起こらない？」

イーブイに言われて、あの目眩が起こった時の状況をエリーは思
い出してみる。

最初にあの目眩が起こったのは、ルリリが落としたリンゴを
拾ってあげた時……。

そのすぐ後、スリープにぶつかった時に2度目が起こって……。

今日の探検では滝や宝石に触れた後、目眩が起こった

「確かにそうね。」

エリーは頷きながら言った。

「それにもう一つあるよ？この間は話未来が見えたけど……。」

「今日のは……ブクリン親方がある場所に探検に行った時の映像……
つまり過去が見えた、という事ね。」

イーブイの言葉をエリーが引き取って完結させた。

「凄い、凄いよエリー！これは探検に役立つ能力だよ！」

イーブイははしゃぎ始めた。その様子を見て、エリーは顔を曇ら
せた。

「確かに……役立つ能力だとは思っけど……見たい時に見たい映像
が見れる訳じゃないから……。」

エリーの様子を見て、イーブイははしゃぐのを止め、耳を垂らし
た。

「ゴメンね。無理な事言つて……。」「
エリーは「気にしてない」という事を伝えるようにイーブイの頭を撫でた。

「そういう能力に頼らずに、あたし達2匹で頑張つて立派な探検隊を目指しましょ？」

「……うん」

イーブイはコクリと耳を立てて頷いた。

「……オマエ達、ちよつといいか？」

見ると入り口にペラップが立っていた。

いつからそこに居たのか考える間もなくペラップが口を開いた。

「親方様がオマエ達を呼んでいるぞ。」

『親方様が？』

2匹同時に首を傾げた（イーブイは怒られると思っているのか少し震えていた）。

ペラップに言われるがままに2匹はプクリンの部屋へと向かった。

プクリンの部屋

「親方様。チーム・スカイズを連れて来ました。」

ペラップがプクリンに声を掛けるが、プクリンは後ろを向いたまま振り向かない。

「……親方様？」

ペラップはもう1度声を掛ける。

すると、突然プクリンは振り向いた。初めてギルド（ここ）

にやってきた時と同じように。

「やあっ！君達の活躍はちゃんと見てるから安心してね？」

また何とも唐突な始まり方である。突然そう言われてスカイズは驚くも、「ありがとうございます」と礼を述べた。

「……ところで、近々ギルドで遠征をやるんだよ。」

「遠征？」

イーブイが首を傾げてプクリンに尋ねた。

「そう、遠征

ギルドの中からメンバーを選抜して、遠くまで探検しに行くんだ。もちろん、近場を探検するのは訳が違うから、しっかり準備をして、数日かけて出掛けるんだよ。」

プクリンがにこやかに説明する。

「それでね、普通なら新弟子は選抜隊には入れないんだけど……ほら。君達、凄く頑張ってるじゃない？」

だから特別に選抜隊の候補に入れたの。」

「本当に！？やったあ。」

イーブイは尻尾を振って喜びを表わにする。それを見たペラツプは一喝した。

「こらこら！まだメンバーに入れると決まった訳じゃないからな！これからのオマエ達の頑張り次第だぞ！」

「ええ。解ってるわよ、ペラツプ。」

ペラツプに向かって頷いた後、エリーはイーブイの方を向いた。

「遠征メンバーに選ばれるよう、頑張ってくださいよ。」

「うん！もちろんだよ。頑張ろうね。」

イーブイは「おー！」と言うように前足を上げて返事をした。

プクリンの部屋から出ると、ちょうど上から降りて来た、ドゴームと出くわした。

「あ、ドゴーム先輩、お帰りなさい。」

イーブイが声を掛けた。

「あ、ああ……オマエ達か。」

ペラツプからお仕置きを言い渡されて、リンゴの森という場所に行っていたドゴームは、上の空な返事をした。

「オレは親方様とペラツプに報告しなくちゃなんから行くぞ。それじゃあな。」

そう言って、今度ドゴームがプクリンの部屋に向かった。

「ドゴーム先輩、こんな暗くなるまで大変だったろうね。」
「そうね。」

話をしながら歩いていると、キマワリが自分の弟子部屋（正確に
いえば彼女とチリーンの弟子部屋）から出てきた。

「キマワリ？どうしたの？」

エリーが尋ねた。

「ドゴームが帰って来たみたいだから、その……お、お礼を言い
行くのですわ！」

珍しくしどろもどろしているキマワリにエリーとイーブイは「頑
張って。」と伝えた。

「ありがとうございますわ！それじゃ、2匹とも、おやすみなさいですわ
！」

『おやすみなさい。』

そう言っただけで別れた。

そして、自分たちの弟子部屋に向かおうと再び歩き出そうとした。
その時、今度は反対側の部屋　ビツパ、ドゴーム、ヘイガニが使
っている　からチリーンが現れた。

「エリーさん！イーブイさん！今、ビツパさん達の部屋で怪談話を
してるんですよ！良かったら一緒にどうですか？」

チリーンが何やら興奮したように2匹を誘った。

「わ、私はいいよ……。か、怪談話なんて……。」

イーブイが震えながら断ろうとする。が、

「皆一緒なんだから大丈夫ですよ！」

と言って、普段のチリーンからは想像もつかない強引さで、イー
ブイを強制的に連行して行った。エリーもチリーンの変わりように
驚きつつもその後が続いて、部屋に入って行った……。

2匹の初探検の夜はまだまだ続きそうである。

14話 探検を終えて（後書き）

（本編の続き）

番外編的な感じでお読みください。

「グヘヘ。それじゃ、始めるぜえ。」

エリーが部屋に入ると、グレッグルが話し始めた（イーブイはエリーにくっついてガタガタ震えている）。

「あ」

「うっ……怖いよお……。」

グレッグルが話し出そうとしたその時、イーブイが泣き出してしまい、いきなり中断を余儀なくされた。

「イーブイ、まだ“あ”としか言っていないじゃない……。」

エリーがそう言うと、イーブイが泣きじゃくりながら言った。

「ぐ、グレッグル先輩の顔が怖い……。」

皆がグレッグルの顔を一齐に見た。

怖さを演出しようとしている彼の顔は、蝋燭の灯りに照らされ、

確かに不気味だった。

「あ、あたし達、やっぱり部屋に戻るわね……。」

イーブイは完全に怯えきってしまい、このまま続行するのは無理

だと思い、エリーは部屋に戻る事にした。

……イーブイの気持ちが落ち着くまで、数時間かかったとかかかっていないとか。

本当は本編に をそのまま入れようとしたのですが……

怪談話の部分が妙に長くなるので、適当な所で切りました
初探検編全体としての終わり方も微妙な感じになりますし。

………今もですが

………さあ、これで次回の更新はいつになるかなあ？（笑）

エリー「だから笑い事じゃないってば（汗）」

15話 ドクローズ(前書き)

ドクローズの言葉遣いが微妙な出来だわ…… (汗)

エリー「……ドクローズ？」

……では、本編どーぞです！

15話 ドクローズ

「……この遙か東にある湖には未だ謎が多い。

そういう訳で近々、ギルドで遠征に行こうと思っっている。」

スカイズが初探検に行った次の日。

その朝礼の場でペラップは遠征を実施する事を皆に発表した。その途端、弟子達は騒めき始める。

「きゃーっ 遠征だなんて久しぶりですわね。」

「……て事は、またこの中から遠征メンバーを選ぶって訳か……。」

「あ、あつしは……まだメンバーに選ばれた事がないでゲスから、ぜひ選ばれてみたいでゲス……。」

皆、思い思いの事を口に出している。

ペラップは少し声を張り上げて、続きを言った。

「遠征メンバーの発表は数日のうちにするから、それまでに良い働きをするように！」

……それじゃ、仕事にかかるよ！解散！」

皆が「絶対に遠征メンバーに選ばれてみせる！」と意気込んで、その場を離れた。

「あら？キマワリ……。」

スカイズも掲示板に向かう途中で、エリーはふと何かに気付いたように先輩であるキマワリに声を掛けた。

「どうしましたの？エリー。」

キマワリはスカイズの2匹に近づいて来て言った。

「そのスカーフ、どうしたの？」

エリーが前足でキマワリの首の辺りを指して言った。見慣れないスカーフを首に巻いている。

「きゃーっ！よく気付きましたわねっ。」

自分の変化に気付いてもらえたのが嬉しかったのか、キマワリはエリーに思いつきりハグした。

「これは“おひさまスカーフ”と言って、キマワリの専用道具なのですわ！」

『専用道具？』

エリーとイーブイは聞いた事のない言葉に揃って首を傾げる。

「専用道具というのは、特定のポケモンとその進化前、進化後のポケモンにのみ効果が発揮される道具なんですの！」

この“おひさまスカーフ”は中々手に入らない貴重な専用道具で、炎タイプの技を受けても、逆に体力を回復してしまうという効果があるのですわ！」

エリーとイーブイは「へえ〜」と相槌を打って、その“おひさまスカーフ”を眺めた。

「論より証拠 実際に自分の目で確かめた方が早いですわ」

エリー、試しにワタクシを“ひのこ”で攻撃してみるといいですわ！」

「えっ？い、いいの？」

驚いてエリーは聞き返す。

「ど〜んと来い！ですわ」

キマワリはポン！と自分の胸を叩いて言った。

「じゃ、じゃあ行くわよ！“ひのこ”！」

エリーはキマワリに向かって勢いよく“ひのこ”を飛ばした。

“ひのこ”はスカーフに吸収されて行き、キマワリの体力に変換された。

「うわあ〜 凄いね〜」

イーブイは瞳を輝かせて言った。

「でも、そんな珍しい道具、どこで手に入れたの？」

エリーはふと疑問に思って聞いてみる。

「昨日、お尋ね者を逮捕したお礼にジバコイル保安官からもらったのですわ」

こんなにも珍しい道具をお礼に貰えたのだから、Sランクのお尋ね者は相当強いんだな、と思うスカイズの2匹。

「……それじゃ、お互い遠征メンバーに選ばれるよう、頑張りましょ！」
キマワリはスカイズに手を振ってからその場を離れた。
「……そうだよな！私達も頑張らないと 早速、掲示板を見に行こう！」
スカイズもまた、元気よく地下1階へと向かった。

ギルドの地下1階

各地から集められた依頼やお尋ね者の情報が、掲示板に貼り出されている。

それを見るのは、ギルドの弟子達や独立した探検隊達だ。

「あ、あれは……？」

イーブイがポツリと呟く。エリーがその視線を辿ると、依頼掲示板の前に紫色の宙に浮かぶ丸いポケモンとコウモリのような姿をしたポケモンがいた。

……どこかで見た事あるような……

そんな事を思っても、どこで見たのかが思い出せないエリー。立ち止まって見ていると、相手も自分達に気が付いた。

『あーっ！！オマエ達は……！』

そう叫ぶと、エリー達に近付いて来た。

「何でオマエ達がここに居るんだよ！」

紫色の丸いポケモン ドガースがそう言うと、「そうだ。」と言つように、コウモリのようなポケモン スバットが頷いた。

ドガースとスバット……

ここでようやくエリーの記憶がフラッシュバックする。

エリーとイーブイが出会った日に、イーブイの遺跡の欠片を奪った連中だ。

「……ああ、あの時のコソドロね。」

その言葉を聞いて、ドガースとスバットは前のめりに宙返ししそ

うになった。

「オマエ！忘れてたのかよー！」

ドガスがエリーに向かって怒鳴った。

「ええ。忘れてたわ。」

何の躊躇ためらいもないその言葉を聞いて、彼らはまたしても宙返りしかかった。

そんな反応は気にもせず、エリーは尋ねた。

「……それで、何で貴方達みたいな泥棒がここに居るのよ？」

ズバットがなんとか立ち上がり、さも余裕だ、と言う風に彼女の質問に答えた。

「へ……へへっ！俺達は探検隊だ。探検隊がここに居ちゃいけないのかよ？」

「えっ？探検隊！？」

エリーとイーブイは驚いて同時に声を上げた。

「そうだ。やり方は少しあくどいがな。」

ドガースのその言葉に、エリーの驚きはすぐに消え去った。

自分で“あくどい”とか言うかしら、普通……

「それで、何で、オマエ達はこんな所に居るんだ？」

「オマエ達の方こそ場違いじゃないのか？へへっ。」

ドガスとズバットが馬鹿にしたような笑いを浮かべて言った。

「あたし達はここのギルドで立派な探検隊になるべく、修行してるのよ。」

『探検隊だあ！？』

エリーの言葉が終わるか終わらないうちに、ドガス達の声がそれを遮った。

そして、腹を抱えて（ドガースの場合どこなのか分からないが）笑いだした。

「あつははは！止めとけ。特にそのイーブイは探検隊には向いてない！」

「な、何で！？」

ドガースの言葉に、今までエリーの後ろに隠れるようにして立っていたイーブイがショックを受けたように聞き返した。

「だってオマエ、弱虫じゃないか。」

「うっ……。」

ズバットにそう指摘されると、イーブイは言葉に詰まった。

エリーが反論しようと口を開きかけた、その時。

「……確かに……」

小さな、でもハッキリと聞こえるイーブイの声がそれを遮った。

エリーは黙って見守る事にした。

「私は弱虫だよ。」

今だってエリーに頼ってばかりで……。

でも！私はそんな自分を変えたい！

変えたくて……日々努力してるんだよ！」

イーブイが勇気を持って言い返した事に、エリーは微かに笑顔を零したが、表情を元に戻して、再びドガースとズバットの方に向き直った。

イーブイがさらに続ける。

「……そ、それに……私の事、馬鹿にするけど……君達、私達に負ける程弱かったじゃない！」

これは効いたようだ。イーブイのこの指摘にうっ、とドガース達は言葉を詰まらせた。

「……ま、まあ。あの時は“アニキ”が居なかったからなっ！」

「あ……アニキ??」

ズバットが言った「アニキ」という単語に、エリーとイーブイは訝しげに眉をひそめる。

「そう。オレ達は　オレとズバット、そしてアニキの3匹でチーム、“ドクローズ”。」

「言っておくがなあ、アニキはメチャクチャ強いんだぞ！それこそオマエ達なんか一捻りにできるくらいになあ！」

「結局貴方達も、その“アニキ”を頼ってるだけじゃない」

……そう言おうとした瞬間、何かが微かに臭ってきた。

「おっ、この匂い……。」

「噂をすれば……アニキだ。」

だんだんと悪臭は酷くなっていく。そのあまりに酷い臭いにエリーとイーブイは鼻をふさぐ。

梯子を誰かが降りて来る音が聞こえ、顔を上げて見ると、ずんぐりとした、いかにもガラの悪そうなポケモンが降りて来た所だった。そう。彼こそがドガース達の言う「アニキ」ことスカタンクである。

「おい。オマエ、邪魔だ。退け！」

「きゃっ!?!」

いきなりエリーは突き飛ばされ、鼻をふさぐ事が出来なくなり、倒れてしまう。

「エリー……っ。」

「オマエもさっきの奴みたいになりたいのか？」

スカタンクがイーブイの前にどん!と立って、威圧した。

「うっっ……。」

イーブイは一瞬躊躇するも、その威圧に圧されて道を開けてしまった。

「さっすがアニキ!!」

ズバットがその様子を見て、スカタンクを誉め称える。

「オマエら。金になりそうな仕事はあったか？」

スカタンクがドガースとズバットを交互に見ながら尋ねた。

「いいや。アニキ。特にこれと言ったモノは無かったですぜ。」

「……ていうか、どれもショボいお礼ばかりだったぜ。ケツ。」

ドガースとズバットは掲示板を睨み付けながら言った。

「そうか。なら、こんな所に用はねえな。」

「帰るぞ、オマエら!!」

そう言ってスカタンク達　ドクローズは途中、他の探検隊達を

蹴散らしつつ梯子を登って行った。

「……………エリー、大丈夫？」

イーブイがエリーに声を掛けた。

「う……………ん。まあ……………なんとかね。」

正直、突き飛ばされた事よりも、あの悪臭の方が効いたわ……………。
そう言うエリーの鼻には、まだ何となくあの臭いがこびり付いて
いるようだった。

「……………私って、やっぱり弱虫なのかな……………」

イーブイがため息混じりに呟いた。見るとその瞳には涙が溜まっ
ていた。

「さっきだって、ほとんどエリーに任せきりだった。」

エリーがやられたというのに、何も出来なかった……………。

私、今までエリーと一緒に頑張ってきたつもりなのに……………。弱虫
な自分を変えようと努力してきたつもりなのに……………。やっぱり私は
……………今も……………弱虫なまま、なのかな……………？」

イーブイの瞳から零れ落ちた涙には、自分の努力は無駄になっ
ているのではないか、という不安が詰まっているようだった。

それを見て、エリーは静かに言う。

「……………イーブイ。」

貴方が成し遂げてきた事を思い返してみてよ。

お尋ね者をつまえたし、昨日は初探検を成功させたじゃない。さ
っきだって、奴ら（ドクローズ）相手にちゃんと言い返せたじゃな
い。

まだまだ変わりきれしていない所はあるけど……………、それでも出会っ
た時に比べたら確実に成長してるわ。

そんな一気に変わろうと思っちゃダメよ。少しずつ……………イーブイ
のペースで成長して行けばいい。

一緒に探検隊を組んでいるあたしが断言する……………イーブイは弱虫
なんかじゃない。自分を変えようと努力する、強い子よ。」

それを聞いて、イーブイは安心したのか泣き出してしまった。そ

んな彼女の頭をエリーは優しく撫でてやるのだった。

一方その頃、ギルド前の交差点では……。

「さっきのは、あつしがやったんじゃないでゲスのに……皆、酷いでゲス……。」

ビツパがブツブツ言いながら、長い階段を降りて来た。どうやら、さっきのオナラ臭の原因はビツパにあると勘違いされてしまったようである。

「あんな悪臭、あつしには出せないでゲスよ！……第一、あつしは絶対にやっつてないでゲスう！！」

……まあ、気を取り直して、今日も依頼頑張るでゲスよ！遠征メンバーに選ばれたいでゲスからね！」

ブツブツ言うのを止め、意気揚々とトレジャータウンへと準備に行くビツパ。その様子を物陰からじっと伺っているポケモン達が居た。

ドクローズだ。

「ほう。ここのギルドには遠征というものがあるのか。」

そう呟いて、スカタンクは階段の上を見つめた。

「……よし。オマエら。帰って悪巧みだ！」

『了解だぜ、アニキ。』

そう言うつと、3匹は交差点を離れ、どこかへと去って行った。

遠征メンバーの選抜に大きな障害が待ち受けている事をスカイズはまだ知らない……。

15話 ドクロース(後書き)

何かスカイズの2人は、親友通り越して姉妹のような気がしてきました(笑)

そしてイーブイは最近、頭撫でられてばかりのような……？

イーブイ「そうかなあ？」

エリー「イーブイの頭って、撫でるとふわふわで、最高よ」

……そうっすか。

……あと、ドガースの形容の仕方が酷いような。

エリー「紫色の丸いポケモン……いいんじゃない？当たってなくもないし。」

いっかあ(笑)

16話 パッチールのカフェ（前書き）

……最近サブタイがまんま過ぎるような気がするのですが。

エリー「……前からじゃない？」

………（汗）

では本編どうぞ　つくしゅん

イーブイ「作者さん、大丈夫？（汗）」

16話 パッチールのカフェ

「さあ。早速依頼をこなしに行くわよ。」

「うん！遠征メンバーに選ばれるよう頑張らないと！」

イーブイはようやく落ち着き、今スカイズは依頼をこなす為、ギルドの外に出た所だ。ちなみに今回の依頼は2つ 湿った岩場でハネッコを救助する事と、お尋ね者のニドリーノを捕まえる事である。

長い階段を降りて行くと、交差点の所にこの辺りでは見掛けない、2匹の青い身体をしたポケモン達が居た。

「あ！お客さんナノ！」

2匹のうちでは小さい方のポケモンがエリー達に気付いて言った。

「君達は……？」

スカイズは2匹に近付くと、イーブイが尋ねた。

「僕はソーナノ！で、こっちは……」

「ソーナンス！！」

どうやら小さい方のポケモンはソーナノ、もう片方のポケモンはソーナンスと言つらしい（ソーナンスは口紅らしき模様がある辺り、のようだ）。

「僕達、パッチールさんがやっているカフェで、“探検リサイクル”をやってるノ！」

ソーナノがニコニコしながら（と言ってもいつも笑っている顔だが）、説明するが、エリー達の疑問は膨らむばかり。その中でも真っ先に浮かぶ疑問はこれだ。

「……この辺りにカフェなんてあったかしら？」

エリーが呟くと、イーブイも「うーん」と首を傾げた。それを見たソーナノは一見何も無さそうな所を指（と言うより手）差して言った。

「今日オープンしたばかりナノ！ほら、あそこに看板を立ててある
ノ！」

言われて見てみれば、彼の指した先には看板を立ててあった。
近付いて見ると、それには《パッチールのカフェ》一攫千金！夢
とロマンのカフェ》と書かれていて、そのすぐ側には地下へと続
く穴があった。

「ねえ！せっかくだから寄って行こうよ」

イーブイの提案にエリーは頷き、ソーナノとソーナンスの案内で
カフェへと入って行った。

「2名様ご来店ナノ」

店に入ると、ソーナノが店内に良く響き渡る声で言った。

内部は広々としていて、大きな丸テーブルが幾つか置かれている。
そして、奥にはカウンターが左右2箇所にあった。

エリーとイーブイが店内をキョロキョロ眺めていると、入り口か
ら見て左側のカウンターから1匹のポケモンがこちらにやって来た。
身体にぶち模様があり、兎のような姿をしたポケモン　パッチ
ールというポケモンだ。

「いらつしゃいませですう　てまえ、このカフェの店長オーナーのパッチ
ールですう。」

こうして挨拶している時もパッチールはフラフラしている。それ
を見たイーブイは心配になったのか、声を掛けた。

「ね、ねえ。フラフラしてるけど、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。これが種族としての特徴ですから。」

笑いながらパッチールは答えた。

「ところで、お客様がもしよろしければ、このカフェについて説明
致しますが、いかが致しますかあ？」

相変わらずフラフラしながら、語尾は力の抜けた感じに伸ばして、
パッチールはスカイズに尋ねた。

「……この際だから、教えてもらおう？」

「うん パッチールさん、お願いします」

パッチールは「了解ですう」と言つて、スカイズの2匹を左側のカウンターに案内した。

「まずこつちのカウンターは、“パッチールのドリンクスタンド”と言いますう。お客様にお持ち頂いた食材を、てまえがフレッシュユ&ジューシーな飲み物に変えて提供致しますう」

「それじゃ、リンゴなんかを持って行くと、リンゴジュースにしてくれるって事？」

エリーが聞くと、「そんな感じですよ」とパッチールは大きく頷いた。

「……ただし、ここでは食材持ち込み制となっておりますので、ご注意ください」

次は、あちらを紹介しますう」

そう言つて、今度は反対側 入り口から見て右側にあるカウンターに連れて行つた。

「こちらは“探検リサイクル”と言いますう」

「あ。それ、さっきソーナノ君が言つてたよね？」

イーブイが言つと、今度はソーナノが前に進み出た。

「こつちは僕が説明するノ！」

この“探検リサイクル”では、不要になつた道具を回収して、道具を必要としている探検隊の皆さんに提供するノ！」

「へえ。まさに同じ探検隊どうし、助け合つて感じだね」

イーブイが尻尾を振りながら言つた。ソーナノはそれを聞くと、嬉しそうに頷いた。

「ねえ！せっかく来たんだし、何か飲んで行こうよ」

「……そうね。確かオレンの実があつたはず……」

バッグの中をこそこそ探して、オレンの実を取り出し、パッチールに手渡した。

「それじゃ、お席でお待ちください」

……オレンの実入りましたあ！」

パッチールが言うと、「ソオオオナンスッ!!」とソーナンスが返事した。ソーナンスが先程からこれしか言っていないのを弱冠気にしつつ、エリーとイーブイは席に着いて、飲み物を待った。

「お待たせしましたあゝ」

“オレン” ジュースでございますうゝ」

少しの間待っていると、パッチールがオレンジジュースならぬ“オレン” ジュースを持って来た。

イーブイは「わゝい」と言うと、早速ストローに口を付けて飲み始め、その様子に目を細めつつ、エリーもまたストローに口を付けた。

パッチールのカフェで気分をリフレッシュさせた後、スカイズは今日の依頼をこなしに早速湿った岩場へと向かった。

既にハネツコは救助して、安全な場所へと送った。後は、お尋ね者 ニドリーノを逮捕するだけだ。

「あ！居た！」

イーブイがニドリーノを発見した。そのニドリーノもこちらに気が付いて、ギクツとした。

「ゲツ！探検隊だ！」

そう言うなりニドリーノは逃げ出した。

「あっ、待ちなさい！」

……そうだ、イーブイ！」

エリーはふと気が付いたように、イーブイの方を見た。

「イーブイ、“でんこうせっか”で回り込んで、これをニドリーノの口に放り込んでくれない？」

そう言って、エリーが渡したのは何かの“タネ”だ。

「う、うん！任せて！」

“タネ”を受け取ると、イーブイはニドリーノ　正確に言えば彼の行く手　に向かって走り出した。

「“でんこうせっか”！」

風のようにニドリーノの隣を通り過ぎると、目の前に立ちふさがった。

ニドリーノが「ゲツ」とでも言うように口を開けたその時、彼の口めがけて“タネ”を投げた。

「！！？」

“タネ”が口に入り込み、ニドリーノは思わずそれを呑み込んでしまった。その瞬間、彼は痺れて身体が硬直してしまう。　エリーがイーブイに渡したのは、“しばらくのタネ”だったのだ。

「“ひのこ”！」

そして、さらにエリーが追撃を加える。

相手は動けない状態なので、当然直撃する。が、“しばらくのタネ”の効果は一撃加えると解けてしまう。ニドリーノの硬直は治ってしまった。

「よくもやったな……！！」

動けない状態で攻撃された事が頭に来たのか、“にどげり”で攻撃しようとする。だが、その前に……

「“だましうち”！」

エリーが“必中技”^{だましうち}をニドリーノの腹にぶつけて、彼はバランスを崩してその場に倒れた。

「……これで、依頼は終わったね！」

エリーがニドリーノを探検隊バツジで御用にした後、イーブイが口を開いた。

「そうね。あたし達もギルドに戻りましょうか。」

イーブイもバツジを取り出し、脱出機能を使ってギルドへと戻って行った。

「えっ？ランクアップ？」

ギルドへと戻った2匹は、ハネッコからはお礼の道具、ジバコイルからは報酬として3000ポケを貰った。だがポケの方は9割をギルドに納めなくてはならない為、ペラップにそれを届けに行った所、ランクアップの話が聞かされたのだ。

「言っただけだったか？」

依頼をこなすとそのランクに応じたポイントが加算されて行くんだ。

そして、一定のポイントが貯まると、探検隊ランクが上がる訳だ。オマエ達はノーマルランクだから……ブロンズランクに昇格できるぞ

「ちょっと探検隊バッジを貸してごらん」

エリー達がバッジを渡すと、ペラップは何やら操作してから2匹にバッジを返した。

今までピンク色に輝いていたバッジの真ん中の部分が、今度は緑色に輝いていた。これが、ブロンズランクの探検隊という証である。

「やったね エリー」

エリーとイーブイはパチンと前足を上げてハイタッチした。

遠征メンバーの選抜に向けて、大きな成果となっただろう。

……しかし、夕食を食べ終え、ギルドの皆が自室に戻ったその頃

……

「それじゃ、友達 遠征を終えるまでよろしくね」

遠征の助っ人を志願してきた3匹のポケモン達が、プクリンからの許可を得る為、彼と話をしていた。

先程のプクリンの言葉から察するに、どうやら遠征に付いて行く事に許可が下りたようだ。

そして、そのポケモン達と言うのは

「クククッ。ありがとうございます、親方様。任せて下さい。」
いかにも頼りがいのありそうな様子で答えるのは、リーダー格の
スカタンク。そして、彼の後ろに構えて笑みを浮かべているのは、
ドガースにズバット。

そう。ドクローズの3匹だった……。

16話 パッチールのカフェ（後書き）

相変わらずバトルとか苦手……（汗）

とゆうか、エリーの攻撃技のレパートリーを増やさないと、勝ち方がワンパターンに（蹴）

エリー「……いやもう、作者の技術の問題もあるんじゃない……。」

うるさい、狐（怒）

17話 助っ人(前書き)

何か長くなってしまった……！
タイトルと合っていないような気もするし……。

あ、それから、今回の依頼主のポケモン達に引いてしまった方は、無理しないで下さいね(笑)

……前書きなので詳しくは語れませんが(汗)

17話 助っ人

翌朝。

今日も1日の修行をこなす為、皆は起きだし、朝礼へと向かう。全員が遠征メンバー入りを目指していて、朝から気合いの入りがいつもと違う。

そんな雰囲気の中、朝礼が始まった。

「えー。今日は仕事にかかる前に、新しい仲間を紹介するよっペラツプの言葉に弟子達は顔を見合せた。」

「新しい仲間……？」

「また新しく弟子でも採ったのかな……。」

全員がざわめき合う中、ペラツプはその“新しい仲間”を呼んだ。「こつちに来なさい。」

その瞬間、辺りは微かに“悪臭”に包まれる。

嗅覚が敏感なポケモン達はこれだけでも、顔をしかめた。

この臭いは……！

昨日嗅いだ“あの臭い”はそう簡単に忘れられるものではない。エリーはすぐにこの悪臭の原因に察しが付く。

段々と臭いが強くなって行く中、梯子をあるポケモン達が下りて来た。それと同時にエリーはため息を吐き、イーブイは息を呑んだ。何故なら、現れたそのポケモン達、ペラツプの言う、“新しい仲間”とは、ドクローズだったからだ。

「この方達は探検隊、“ドクローズ”の皆さんだ。」

ペラツプがにこやかに紹介する。他の皆はあまりの悪臭に嫌悪感を露あらわにしているというのに……。ペラツプの嗅覚はどうなっているのだろうか。

「クククッ。よろしくな。」

「へへっ。」

「ケツ。」

とても感じが良いとは言えない挨拶に、弟子達は眉をひそめる。そんな様子は気にもせず、ペラップは話を続けた。

「この度、ドクローズの皆さんには助っ人として、遠征に参加してもらおう事になった。」

「ええっ!? な、何だって!？」

イーブイは思わず声を上げた。

その声に弟子達は全員彼女の方を向き、ペラップは微かにイラついた様子になった。

「こら! いきなり大声を出すんじゃない。」

「うつつ……。」

周りからの視線とペラップの叱責に、イーブイは耳を垂らした。

「ペラップさん。アイツは大袈裟なんですよ。」

スカタンクがペラップを取り成す。

すると、ペラップはエリー達スカイズとドクローズを交互に見た。「何だ? スカイズとドクローズは知り合いだったのか? なら話は早い。」

一瞬エリーは、ドクローズと纏めてペラップもどつき飛ばしたい、という衝動に駆られたが、なんとか我慢した。

「遠征までの数日間、一緒に生活する事になった。遠征でいきなり一緒になっても、チームワークが掴めないだろうから……。」というのが親方様のご意見だ。

皆、仲良くするんだよっ。」

エリーは絶句する。この悪臭はもとより、こんな不良ワルが遠征が終わるまでギルドに居座る事になるうとは……。

「それじゃ、皆っ 仕事にかかるよっ。」

ペラップがそう言うも、返ってきた「おー」という声は皆バラバラで、元気もなかった。恐らく皆、この悪臭に参ってしまったのだろう。

「あれ? 皆元気ないね? どうしたんだい?」

アナタはこの悪臭を何とも思わないのデスカ？

弟子達全員の心が一致する。

ついにドゴームが我慢できなくなったのか、ペラップに向かって文句を言った。

「だってよお！こんな臭いののに、元気なんか出せるかよ！」

この発言に皆はざわざわと同意する。

ペラップが言い返そうと口を開いた……が、言葉が出なかった。否、出せなかった。

ギルド全体を地響きが襲ったからだ。

「わわわっ……親方様の怒りが……。」

ペラップが慌てだす。

どうやらこの地響きの原因はプクリンにあるようだ。

親方の方を見てみると、彼はわなわな震えて、呻き声を上げていた。

「ほ、ほら！皆、元気出して！」

今日も張り切って仕事にかかるよっ！」

「おーっ！！！」

皆は無理矢理元気を絞り出して、挨拶した。

その途端、地響きはピタリと止み、プクリンはいつも通り、のほほんとした表情になった。

掲示板に向かう途中、ドクローズとすれ違ったが、ツンと澄まして通り過ぎた。

こうなってしまった以上、空気か何かとして扱った方が気が楽そう思ったからだ。

とはいえ、あの悪臭はそう簡単に慣れるものでもなかったが……。

「はあ……。」

ドクローズから離れ、依頼掲示板の前に立った所でイーブイがため息を吐いた。

エリーには理由が何となく分かった　恐らくドクローズの事だろつ。

「何であんなポケモン達を遠征の助っ人にしたのかなあ……。」「イーブイが浮かない顔で呟いた。

「そうね。」

「……だけど、親方が決めたというのなら、あたし達にどうこう出来る問題じゃないわ。」

あんな奴らなんて気にせず、探検隊としての活動をしていくのが一番よ。」

エリーがそう言葉を掛けると、イーブイは「そつだよね」と言つて、笑顔をこぼした。

その会話の後、エリー達は依頼を選び、早速ダンジョンへと向かった。

「……までは良かったのだが。」

滝壺の洞窟

「……。」
まだダンジョンに入って間もないと言うのに、エリーはもう疲れた表情を浮かべていた。

その原因が……

「早く助けに行かないと、ボクの彼女が……っ！」

エリーの後ろに居る、青い身体をした、ウミウシポケモン　今回の依頼主であるカラナクシだった。

スカイズが受けた依頼はカラナクシを滝壺の洞窟に居ると言つ、恋人のサニーゴの所まで連れて行く、と言つもの。

ランクアップした事もあり、少し難しめの依頼に挑戦してみたのだ。

だが、この依頼人、口を開けば彼女を心配する言葉ばかりが飛び出す。

気持ちは解らなくもないんだけど……

そうは思っていないても、エリーはかなり辟易していた。

一方のイーブイは、

「ハニー”って、サニーゴさんの名前？

可愛い名前だね」

……尻尾を振りながら、重大な勘違いをしていた。

はあ……と再び大きなため息を吐きつつ、エリーはカラナクシに注意を促す。

「サニーゴの心配をするのはいいけど、注意してよね？

ここはダンジョンの中なんだから。

貴方がやられたら、元も子もな」

「ああ……。ボクのサニーゴ……。今頃1匹で心細い思いをしているだろう……。

ああ……。可哀想に……！」

聞いている可能性は皆無だった。

「……依頼主じゃなかったら、一発思いっきりひっぱたいてやるんだけど。」

そんな呟きも当然、カラナクシの耳に入っているはずもなかった。

しばらく歩を進めると、カラナクシがピタツと止まった。

イーブイが「どうしたの？」と訊ねる前に、カラナクシが口を開いた。

「居る！この近くにボクの愛しのハニーがっ！」

カラナクシの突拍子もない発言に、少しの間スカイズは呆然とした。

「えっと……解るの？」

イーブイが驚きながら、訊ねると、カラナクシは「当然だ」と言

いたげな口調で答えた。

「そりゃそうさ！」

何てったってボクとサニーゴは、赤い糸で結ばれてい

「まあ、サニーゴがどこに行ったか解らないし……とりあえず、この近くを探してみましよう？」

カラナクシの言葉を遮って、エリーが提案した。

「う……うん！そうだね！」

話を遮られ不満げな視線を向けるカラナクシを気にしながらも、イーブイも賛成した。

「う……怖いよお……。」

1匹のポケモンが3匹のポケモンに囲まれて、震えていた。

囲んでいるのは、丸いヌルヌルした身体に、足とおたまじゃくしの尻尾が生えたポケモン ニヨロモだ。

一方で囲まれているのは、珊瑚を模したポケモン スカイズ（

とカラナクシ）が探している、サニーゴだった。

「おい！ここはオレ達の縄張りだ！」

勝手に入ってきて来て、タダで済むと思うなよ！！」

「ひい……。」

ニヨロモ達の凄みにサニーゴはさらに怯えてしまつた。

「何とか言ったらどうなんだ！？」

1匹のニヨロモが“おうふくビンタ”を仕掛けようとした。サニーゴは固く目を瞑った。

その時……

「“でんこうせっか”！」

イーブイが“でんこうせっか”でニヨロモを弾き飛ばした。

驚いているサニーゴに、エリーは近付き、声をかけた。

「貴方がサニーゴ……よね？」

「はい……そうですけど……。」

サニーゴは細い声で答えた。

「あたし達は探検隊スカイズ。」

貴方を助けに来たのよ。カラナクシも一緒に居るわ。」

サニーゴの目がカラナクシを見つけた。その途端、サニーゴの様子が一変した。

「ダーリン」

「マイハニー 無事だったかい？」

お互い呼びながら近づくと、2匹は抱き合った。

……ただ、カラナクシには手がないので、サニーゴがカラナクシを抱き締める形になっていたが。

「……………」

ハートが飛び交っているのが、目に見えるような光景に、エリーはしばし固まった。が、気を取り直して、イーブイの横に並び、ニヨロモの方を向いた。

「こ……ここはオレ達の縄張りだぞ！」

「勝手に入って来て、タダで済むと思うなっ！！！」

仲間が倒された事で、動揺している感じのするニヨロモ達。だが、それでも自分達の縄張りを主張し、攻撃を仕掛けて来た。

「……………仕方ない、か。」

勝手に縄張りに入ったあたし達が悪かったんだから……できれば、戦いたくなかったんだけど。」

エリーもイーブイも戦闘体勢に入った。

「食らえ！ “バブルこうせん”！」

ニヨロモ達も技を放った。

普通ならばここで躲そうとするだろう。しかし、エリーもイーブイも躲そうとしない。

それどころか、“バブルこうせん”は2匹を避けて、吸い寄せられるようにカラナクシの方に向かって行った。

彼は“バブルこうせん”をまともに浴びたが、目の前のサニ

ーゴに夢中になっていて、全く気付いていなかった。

「なっ……………!?!」

ニヨロモは驚いて声を上げた。そんな彼らにエリーは種明かしをした。

「よびみず”。彼 カラナクシ カラナクシの持っている特性よ。

水タイプの技は全て特性の持ち主が吸収して、無効化してしまうの。

……………だから、あたし達にいくら水系の技を放つても、無駄って事よ。」

それだけ説明すると、エリーもイーブイもニヨロモに向かって走り出した。

「たいあたり”!”」

「だましうち”!”」

エリー達の攻撃を受け、2匹のニヨロモは、先に倒された1匹と同じように、目を回して伸びた。

「……………ふう。」

これで、後はカラナクシ達をダンジョンから脱出させるだけね。」

「そうだね。」

ホッと一息吐くと、カラナクシ達の方を向く。

「カラナクシさん、サニーゴさん!

ギルドに帰る……………よ……………?」

イーブイの声は尻すぼみに消えて行った。

カラナクシとサニーゴの2匹は未だイチャイチャしていて、ニヨロモ達が居なくなった事にも気付いていなかった。

「……………ねえ……………。1回、ひっぱたいてもいいかしら……………。」

周りを気にせずイチャつく2匹を見て、我慢していたイライラが最高潮に達したエリーが呟く。……………どうやら半ば本気のようなのだ。

「だ……………ダメだよ!そんな事しちや……………。」

イーブイは危険を感じて慌ててエリーを止め、自身の探検隊バツジを使って、カラナクシ達を脱出させた。

続いて、エリーとイーブイもバッジを使い、ギルドへと戻って行った。

ギルド

「ありがとう、スカイズ。」

ボクのサニーゴが無事だったのも君達のお陰だよ」

「本当に感謝してるわ

ありがとう」

全員がギルドへと戻り、カラナクシ達はスカイズにお礼を述べた（ちなみに、この間も2匹はベツタリしたままである）。

「困ってるポケモンを助けるのは、探検隊として当然だよ」

イーブイがにっこりと言った。

「これがお礼よ 受け取って」

そう言って、サニーゴが差し出したのは、CDのような物だった。

「これは……。」

「技マシン

頭に乗せるだけで、その中に記録されてる技が覚えられるの

……もちろん、使いこなすには、それなりに練習が必要だけど。

ちなみに、その中に記録されてるのは、“めざめるパワー”って

技よ」

エリーの不思議そうな顔を見て、サニーゴが丁寧に説明した。

「それじゃ、帰ろうか サニーゴ」

「ええ、そうね ダーリン」

2匹が帰る様子を何匹かのポケモンが、口を開けて見ていた。

「……はあ。

あの2匹……一緒に居るだけで疲れるわ……。」

「でも、すつごく仲良さそうだったね」

イーブイの微笑ましい台詞にエリーは微笑を浮かべた。

ちょうどその時、チリーンが食事の支度が出来た事を告げ、皆は

食堂に向かった。

そして、お腹も一杯になり、皆が眠りについた頃……。

「アニキー。何か腹減りやしませんか？」

ギルドから提供された、自室でズバットが口を開いた。

「ケツ。あれ位の食事じゃ足りねえぜ。」

続けて、ドガースもまた、ギルドの食事について文句を言う。

すると、スカタンクがすくっと立ち上がった。

「クククツ。」

ギルドの奴らは皆、寝静まった事だし……盗み食いするぞ！」

そう言っつて、ドクローズは夜の闇に紛れ、食堂へと忍び込んだ。

翌朝、ペラップが確認に来た時には、食料はほとんど残っていなかった……。

17話 助っ人（後書き）

依頼を考える 前話でランクアップした 難しめの依頼に挑戦させてみよう 依頼主を案内する依頼はどうだろう？

……という、連想ゲームを経て、頭の中に降臨したのが、あのバカツプルでした

私の耐性がなさすぎるせいで、何度か挫折そうになった、というのは秘密です

18話 リンゴの森(前書き)

ついに、狐^{エロ}にとって、恐怖の空間、リンゴの森の登場です

18話 リンゴの森

「みつっー！ 皆笑顔で明るいギルドー！」

この日もまた、いつものように朝礼を行い、それからそれぞれ自分の行くべき場所へと向かう。

それはスカイズも同じ。彼女達もまた、掲示板を見に行こうとしていた。

「おーい、スカイズ！」

ちよつとこつちに来なさい。」

ペラツプがそんなスカイズを呼び止めた。

「何だろう」と顔を見合せながらも、エリーとイーブイは彼の元へと向かった。

「なあに？ ペラツプさん。」

イーブイが首を傾げて訊ねた。

「今日は、依頼とは別に頼みたい事があるのだ。」

「頼みたい事？」

エリーが聞き返す。

「ああ。」

今日は、“セカイイチ”をオマエ達に調達して来て欲しいのだ。」

ペラツプの頼み事の内容に、聞き慣れない単語があり、エリーは訝しげな表情を浮かべた。

「セカイイチ」……つて？」

「ああ……。 “セカイイチ”、というのは、リンゴの一種だ。

とても大きく、凄く美味しいのだが、滅多な事では手に入らない貴重な物なのだ。

親方様の大好物だから、ギルドにはたくさん置いてあるのだが……今朝見たら、空っぽになっていたんだよ。」

ペラツプは「はて？」と首を傾げた。

「……でも、そんな珍しいリンゴ、どこに行ったらあるの？」
イーブイが訊ねると、ペラップは考え事を中断し、地図を取り出して説明した。

「いつも調達しに行っている場所がある。ほら、ここだ。」
地図上に翼を置いた。

「ここはリンゴの森、という所だ。」

その名の通り、森の木のほとんどがリンゴの木なのだ。

そして、その奥にある一本の巨大樹　それが、セカイイチの樹だ……」

「ペラップ……今、何て……。」

ペラップの説明が終わると同時に、エリーがほとんど消え入りそうな声で言った。

「ん？」

奥地にある一本の巨大樹が、セカイイチの木だと言ったが

「ち、違う！　その前！」

ど、どこに行け……って言ったの？」

聞き違いであって欲しい

そう切実に願うが、直後、そんな願いは打ち砕かれる。

「リンゴの“森”と言ったが、それがどうかした

……って、大丈夫かい！？」

エリーがへなへなと崩れ落ちたのを見て、ペラップが慌てて言った。

「あ、あのね、ペラップさん。」

エリーは虫が苦手なんだよ……。」

イーブイが代わりに事情を説明した。

「そうだったのか？」

……確か、あの森は虫ポケモンがたくさんいたなあ……。」

ペラップの空気を読まない発言が、エリーに追い討ちをかけた。

「誰か代わりはいないの……？」

そう問いかけるエリーの瞳は珍しく涙目になっていた。

「皆、出払っているからなあ……。私もやらなければいけない事が山積みだし。」

かといって、セカイイチが無かったら親方様は……。親方様は……。

ペラップは急に震えだし、顔には冷や汗をかき始めた。

「……………」

セカイイチが無かったら、親方様はどうなるの？」

急に様子がおかしくなったペラップを不思議に思い、イーブイは訊ねた。

「親方様は……。」

「……………になるのだ。」

ペラップは答えようとすることも、口から肝心の“どうなるか”が出てこない。

イーブイはさらに首を傾げる。

「え？ 親方様はどうなっちゃう」

「と、とにかく！」

セカイイチが無いと、親方様は大変な事になるのだ！

頼む！ 行ってきてくれっ！！」

イーブイの質問を遮って、羽をバタつかせながらペラップが言った。

その慌てぶりと必死の頼みに、イーブイは了承しようとしたが、問題はエリーだ。

虫ポケモンがたくさん居るような場所に行って、エリー、大丈夫かな？

そう思ったイーブイは、微妙に震えているエリーの方を向いた。

「ええっと……大丈夫？」

イーブイはエリーの顔を覗き込む。エリーは無言でコクコク頷いた。

「……………」

「行くしかないでしょ？ 他の人が皆行けないんじゃないじゃ……。」

ペラツプの話が本当なら、セカイイチが無いと、何だか大変な事になりそうだし……。

行くわ。ペラツプ。セカイイチ、採って来る……。」

しかし、直後の大きなため息が、本当は行きたくない、という気持ちを持っていった。

「た、頼んだぞ！」

セカイイチが無かったら、親方様は………だからな。」

最後にペラツプにもう一度念押しされ、早速スカイズはリンゴの森へと出発した。

「へへっ。アイツら、オレ達が盗み食いしたせいで、とんだとばかりだな。」

「ケツ。そうだな。」

スカイズとペラツプのやり取りを、少し離れた場所で聞いていたドクローズが言った。

「クククッ。」

おい、オレ様達もリンゴの森へ行くぞ。」

スカタンクが意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「……奴らを蹴落とすチャンスだ。」

「ここだね！ リンゴの森は！」

スカイズはリンゴの森の入り口に立っていた。

周囲からはリンゴの甘い香りが漂ってくる。

「わー 甘くていい香りがする！ ね？ エリー！」

「そ、そうね……。」

イーブイは尻尾を振って、嬉しそうな様子なのに対し、エリーは気もそぞろ、というような感じで周りを見ていた。

それを見たイーブイはエリーに近づいて、声を掛けた。

「エリー。私も一緒なんだよ？ だから、大丈夫だよ！」

私達2匹、力を合わせれば、虫ポケモンなんか怖くないよ！」

そう笑顔で言うイーブイを見て、エリーは何だか安心感を覚えるのを感じた。

「……ありがと、イーブイ。

一緒に頑張ろ！」

「うん」

エリーの不安が少し和らいだ所で、スカイズはリンゴの森へと入って行った。

「めざめるパワー」！」

向かって来たバタフリーをイーブイが撃退した。

ちなみに、この“めざめるパワー”は昨日の依頼のお礼として貰った技マシンで覚えたものだ。

“めざめるパワー”は使ったポケモンによって、タイプが変わる。イーブイの場合は炎タイプになったようだ。

まだまだ、練習の必要はあるものの、この森には、炎の技に弱いポケモンが多く住んでいる事が幸이었다。

今のところ、入り口でのイーブイの励ましのお陰で、エリーも（とりあえず表面上は）虫ポケモンに冷静に対処していて、歩みは順調だった。

これには、後を追っているドクローズも少し不意を突かれた。

「ケツ。アイツら……虫が苦手だって言うから、もうちょいいてこずるかと思っただが……。」

ドガースが苦々しげに呟く。

「アニキー。これじゃ、アイツら追い越せませんよ？」

ズバットが困ったように言う。

セカイイチは全て自分達ドクローズが頂き、スカイズには収穫とらせない

それが、ドクローズの計画だ。

そうすれば、自分達の腹は満たされるし、スカイズは任務失敗という事になる。

しかし、その作戦を成功させるには、先に行くスカイズを追い越さなくてはならない。

確かに、少し予定と違ったが……

スカタンクはニヤリと不敵に笑う。

実は、彼は中々の策士で、少し計画が狂わされた位では全く動かない。

そんな彼が取り出したのは、不思議玉。

「少し、奴らを足止めするんだ。」

玉を高々と掲げると、それは光輝いて、効果を発揮した。

そして、間髪を入れずに自分達は穴を掘り、地中に身を潜めた。

直後やって来たポケモン達は彼らの頭上　つまり、彼らの潜んでいる地面の上を通りすぎ、真っ直ぐにスカイズへと向かって行った。

「……？　何？」

不審な物音を聞き、スカイズは後ろを振り返った。

すると、当然ながら迫って来る大量のポケモン達　ほとんどが

虫ポケモン　が目に入る。

「……？　虫！？」

咄嗟に逃げ出そうとするが、反応が遅かった。

2匹はあっという間に囲まれてしまった。

これで奴らはしばらく先には進めないだろう

そう思い、満足げな笑みを浮かべると、ドクローズは一旦脇道に逸れ、リンゴの森の奥地へと向かった。

18話 リンゴの森（後書き）

エリー「……………」（呆然）

あーあ。固まっちゃったよ（笑）

エリー「わ、笑い事じゃないわよ!!

何で虫ポケモンに囲まれなきゃならないのよ!?

確か前にもなかった? こういうの!!」

あー、大量のイトマルに囲まれたあの話?（第8話）

あつたね（笑）

エリー「だから、笑い事じゃないわよ……………」（泣）「挫けそうにな
ってる

イーブイ「エリー、大丈夫なの? 私達、あそこから抜け出せるの
?（汗）」

さあね?

そこは、次回のお楽しみですよ?（笑）

あ、ちなみにスカタンクが使ったのは“あつまれだま”です。

……………ただし、効果を敵ポケ仕様に変えておきました!

そして“めざめるパワー”も本家での効果です。

……………だって、ダンジョンに入る毎にタイプ・威力が変わるって
少々面倒くさ（言っではいけない

炎タイプになったのは、やりたい事がある
にしないで下さい……っ！

何でもありません。気

19話 森の奥地で

ペラップに頼まれ、リンゴの森を進むスカイズは、突如現れたポケモン達に囲まれていた。

そのポケモン達と言うのは一部草ポケモン　ナゾノクサやクサイハナ　がいるものの、大部分が虫ポケモンだった。

「な、何でいきなりこんなたくさんさんのポケモンが……。」「イーブイが呟く。

これは、ドクローズが使った“あつまれだま”の効果なのだが、当然スカイズはそんな事知るはずもない。

「エリー。大丈夫?」

イーブイは後ろを向き、震えているエリーに声を掛けた。

ここまで虫を見ても、取り乱す事はしなかったエリーだったが、さすがにこの状況は堪えたようだ。蹲って震えている。

「待ってて、エリー！」

何とかするから……!!」

それを見たイーブイは、自分達を囲んでいる大量のポケモン達に向かって技を放った。

「めざめるパワー」!!」

イーブイは“めざめるパワー”を連発するが、1匹で相手をするには数が多すぎた。

数が減らないどころか、イーブイの疲労は蓄まって行くばかりだ。

「……!?!」

ついに技を使う力　パワーポイント　PPが切れてしまった。

その隙を突かれ、イーブイはまともに、数匹分の攻撃を受けてしまっ。

「イーブイ!!」

エリーは唇を噛んだ。

イーブイが1匹で頑張ったのに……あたしは

その時、青い玉がエリーの目に入った。

それは、不思議玉。それも、近くに居るポケモン達の動きを封じてしまう“しぼりだま”だった。恐らく、イーブイに倒されたポケモンが持っていたのだろう。

あれを使えば……！

だが、問題はそれが落ちている場所だ。

“しぼりだま”はキャタピーと呼ばれる虫ポケモンの目の前に落ちていた。

迷ってるヒマなんてない！

「ひのこ」……！

エリーは上に向かって、“ひのこ”を放った。

困んでいるのは、皆、炎技が苦手な虫タイプや草タイプ……ポケモン達は一瞬怯んだ。

その際に“しぼりだま”を取ると、それを高く掲げた。

“しぼりだま”がまばゆい光を放ち、それが収まった時には、ポケモン達の動きが止まっていた（宙に浮いているポケモンは地面に落下していた）。

エリーはホッと安堵し、すぐにイーブイの側に駆け寄った。

「イーブイ！ 大丈夫！？」

「う……うん。大丈夫だよ。」

イーブイはエリーに介助され、なんとか立ち上がった。

「ゴメンね。イーブイ。」

貴方1匹で戦わせて……。これ、食べて。」

イーブイに謝り、エリーは鞆からオレンの実とPPマックスを取り出した。

「ありがとう。」

それから、エリー。私、全然気にしてないよ？

エリーが虫ポケモン苦手なの知ってるもん。」

そう言うと、イーブイはにこっと笑った。

「イーブイ……。」

でも、イーブイが努力してるのに、このままじゃ示しが付かないわよね……。あたしも頑張らなきゃ。虫嫌いを克服出来るように……

その時、近くの茂みがガサガサ揺れた。

そして、勢い良くポケモンが飛び出て来た。頭に一本の毒針を持った、毛虫ポケモンのビードルが。

「……!! む、虫!?!」

「え、エリー、大丈夫 わっ!?!」

悲鳴を上げるのと同時に、エリーはイーブイを連れて逃げ出した。エリーの虫嫌い克服は、まだまだ先の話のようである。

再び落ち着きを取り戻したエリー、そしてイーブイはリンゴの森の奥深くまで来ていた。

2匹の目の前には、かなりの年月を生きてきた風のある、1本の巨大樹が立っている。

「うわぁ……凄い大きな木だねー!」

イーブイは木を見上げて、感嘆の声を漏らした。

「もしかして、これが……」

「クククツ。そうだ。セカイイチの木だ。」

エリー達はビックリして辺りを見回す。

すると、目の前のセカイイチの木の上から、3つの影が降って来た。

「君達は……!」

「ドクローズ！」

スカイズは、目の前に降り立った影　ドクローズを睨み付ける。

「へへっ。オマエ達。来るのが少し遅かったな。」

「オマエ達がやって来るのを、セカイイチ食べながら待ってたんだが……。」

あんまり来るのが遅いんで、ちよつと食い過ぎちまったぜ。」

ここでドガスは大きなげっぷをした。

上を見上げて見れば、木には、ほんの僅かのセカイイチが残っているのみだった。

「イーブイ。アイツらに、セカイイチを取られる訳には行かないわ。

アイツらを倒して、セカイイチを手に入れ　」

「オイオイ。何か勘違いしてねえか？」

「……えっ？」

エリーがイーブイに向かって話すのを、スカタンクが遮った。スカイズは怪訝そうな顔をして、彼の方を向く。

「オレ様達は、オマエ達に協力してやろうとしてるんだぜ？」

ほら。」

ドガスとズバットが、セカイイチのたくさん詰まったバスケットを持って来た。

「持ってけよ。ペラッパに頼まれてんだろ？」

スカタンクはニヤリと笑う。

当然、ドクローズにスカイズの協力をする意志はない。彼ら（ドクローズ）の目的は、スカイズにこの依頼を失敗させる事なのだから。

だが、ただ失敗させるのもつまらないので、ここで思いっきりからかってやろうと言う魂胆なのだ。

しかし、スカイズはドクローズを睨み付けたまま、返事をしない。

やがて、エリーが口を開いた。

「ふざけた芝居は止めなさいよ。」

貴方達があたし達に協力なんてするはずない。何を企んでいるの

？」

「驚いた！ コイツら、全然騙されねえ。」

ドガースが少し落胆して言った。

「やっぱり、私達を騙そうとしてたんだね！？」

イーブイが怒ったように言う。

対するスカタンクは、余裕の笑みを浮かべていた。

「クククツ。引っ掛からなかったのは、少し残念だが……。」

面白いものが見れたしな。まあ、良しとするか。」

スカタンクの言葉にドガースもズバツトもニヤリとした。

「ああ。そうだな。」

仕掛けた側に見れば、最高に面白かったな、あれは。」

「ケツ、確かにな。」

あんなにビビりまくってたもんな。あのポケモン達の大群に。」

ドクローズの言う、「面白いもの」が何だったのか気が付いたスカイズは、はつとした表情になる。

「あんな大量のポケモン達が集まって来たのは……君達のせいだったんだね！？」

ドクローズ

もうこれ以上アイツらに邪魔される訳には行かないよ！ エリー、何としてでもセカイイチを手に入れよう！」

珍しく憤慨した様子のイーブイを見て、スカタンクは「クククツ」と笑った。

「ほう。今日は随分と威勢が良いな。」

……ならば、オレ様達も本気で相手をしてやろう。」

スカタンクとドガースがずい、と前に進み出た。

何か仕掛けて来る、と悟ったエリーは咄嗟に“ふういん”をかけるようにした。

しかし……

「食らえ！ オレ様とドガースの必殺技……」

“どくガススペシャルコンボ”！！」

相手の方が早かった。

エリーとイーブイはまともに、“どくガススペシャルコンボ”なるものを浴びてしまった。

「きゃあっ!」

「うわあ!?!」

あまりの悪臭に、2匹はその場に倒れ込んでしまった。

「……………ん……………」

しばらくして、エリーは目を覚ました。

ドクローズもセカイイチの入ったバスケットも消え去り、木に僅かに残っていたセカイイチも“ベトベタフード”に変わり果て落ちていた。

「うーん……………」

呻き声が聞こえて振り向くと、隣で気絶していたイーブイが目を覚ました所だった。

「イーブイ、大丈夫?」

「うん。大丈夫だよ。」

エリー、セカイイチは…………? ドクローズは…………?

イーブイの質問に、エリーは悔しげに首を振った。

「やられた。セカイイチはドクローズに持ってかれたわ…………。残っていたセカイイチも、ほら…………。」

セカイイチの木の周りに落ちている“ベトベタフード”を示した。

「…………でも、ちゃんとしたのが残ってるかもよ?」

探してみよ……………」

ポジティブ指向に切り替えたイーブイの言葉は、別の呻き声によ

って、中断された。

見ると、ドクローズの仲間であるズバットが、よろよると起き上がった所だった。

どうやら、彼も気絶していたようだ 仲間の必殺技によって。

「はっ！！ オレだけ逃げ遅れた！！」

そう叫ぶと、すぐさまその場を離れようとした。

「……ちよつと待ちなさい？」

周りの気温が一気に氷点下まで下がったような声に、ズバットは思わず停止する。

ズバットを引き止めたのは、エリーだ。

顔は絶対零度の微笑みを浮かべて 怒っている事は明白である。

「あんな悪行を仕掛けておいて……黙って帰して貰えると思ってるの？」

エリーの怒りのオーラに、当事者のズバットだけでなく、イーブイも数歩後退りした。

「お、おい！ ちよつと待て！」

アレを考えたのは、アニキ ー

「あら？ 最高に面白かった、とか言ってたの、どこのどなた？

あたし達こどもがどんなに大変な思いをしたかも知らないで……！！」

エリーの怒りは確実に上がっていた。それに気付いたズバットはさらに後退る。

「ちよ、待て。話せば解

ぎゃあああああ！！」

ズバットの悲鳴は、リンゴの森全体に響き渡ったとか、いないとか。

数分後

「エリー……。幾ら何でもやりすぎじゃ……。」「
イーブイが恐る恐る口を開いた。

2匹の目の前には、ズバットが所々黒くなって、倒れていた。

「そう？」

……。まあ、確かに少しやりすぎちゃったかもしれないけど……
気絶してるだけだから、放つとしてもそのうち目を覚ますわよ。
それよりも……。」「

気絶しているズバットを見事に無視して、エリーはセカイイチの
木に近付いた。

根元、木の枝と探したが、普通の赤いセカイイチは無かった。

「ダメだわ。全部腐ってる……。」「

「そっか……。」「

エリーの言葉に、イーブイは耳を垂らした。

「仕方ない……。ギルドに戻るっか……。」「

こうして、スカイズは足取り重く、ギルドへと戻るのだった。

19話 森の奥地で（後書き）

仲間の技で気絶し、さらに完全に怒ったエリーにボッコボコにされる……。

リンゴの森編でのアンラッキーキャラは、間違いなくズバットです

（笑）

エリー「……これで、あのデブスカンクもボッコボコに出来れば、最高なんだけどね」

うん。応援するよ

20話 仲間の励まし(前書き)

うーん……。

結局ゲームの内容をなぞるだけになってしまいました……orz

20話 仲間の励まし

「ええーっ!? セカイイチ、取って来れなかったのー!?」

スカイズが、セカイイチを取って来れなかった事を話すと、ペラツプが翼をバタつかせて叫んだ。

「だって、あのドクローズが邪魔を」

「お黙りっ!! 言い訳は聞きたくないよっ!!」

イーブイの言葉はペラツプのカリカリした口調で遮られた。イーブイは耳をしゅん、と垂らす。

「ああーっ! どうしよーっ!?

セカイイチが無かったら、親方様は……親方様はーっ!!」

ペラツプは落ち着きなく、行ったり来たりを始めた。

そして、勢い良く振り向いて言った。

「とにかくっ! 今日はオマエ達だけ夕飯抜きだよ!」

『ええっ!? そんなあ!』

ペラツプの“夕飯抜き”の言葉に、エリーとイーブイは声を揃える。

「当たり前だろ! こんな失敗をしでかしたんだ!

後、それから夕飯が終わったら、この事を親方様に報告しに行く。もちろん、オマエ達も一緒に、だ。

親方様の“アレ”を食らうのが私だけと言うのは……あまりにも不公平だからな。」

それだけ言うと、ペラツプはぶい、と何処かへ行ってしまった。

後に残されたスカイズの2匹は、悲愴感に襲われるのだった。

夕飯時は苦痛以外の何物でもなかった。

皆が食べているのを、ただ見ているだけ、というのはかなり辛い。

おまけに、この後何が待っているのだろう……と思うと、気が重くなるばかりだった。

イーブイは耳を垂らし、顔を俯かせて、かなり落ち込んでいる様子だ。

いつもより長く感じた夕食が終わると、スカイズはペラップに連れられ、プクリンの部屋へと向かった。

「親方様。」

ペラップが呼ぶと、しばらく反応が無かったが、いつもと同じように不意を突いてプクリンは振り返った。

「やあつ　君達、ボクのセカイイチを取ってきてくれたの？」

ぐさり！　プクリンのその言葉はスカイズの心に突き刺さった。

さらに、その「待ってました」と言わんばかりの声、そして笑顔が2匹に追い討ちをかける。

ペラップも言いにくそうに口を開いた。

「そ、それがですね……。スカイズは、任務に失敗しまして」

「大丈夫　失敗なら誰にでもあるよ」

それで？　ボクのセカイイチはどこにあるの？」

ペラップの言葉の意味を、完全に理解しなかったらしく、プクリンはさらに追撃を加えた。

ペラップは説明を付け加える。

「あのー……ですね……。大変言いにくい事なのですが……。」

“任務に失敗した”と言う事は、つまりい……そのお……

“セカイイチを取って来れなかった”と言う事でして……。」

「え……。」

プクリンは細く、小さい声を漏らす。

「その……セカイイチの収穫は0（ゼロ）という事に……。」

ですから……親方様。当分の間、セカイイチは我慢してもらう事になり……ます……。」

プクリンは「え……」の表情のまま固まっていた。

部屋全体を大きく震動させた。そして、一方のエリー達は鼓膜が破けそうになりながらも、必死に堪えていた。

3匹が苦しんでいると、部屋の入り口から声がした。

「御免ください！」

セカイイチを持って参りました！」

「え？」

“セカイイチ”という単語を聞いた途端、プクリンはピタリと泣き止む。

ホツとした3匹は、耳から前足（ペラップは翼）を離して、入り口を見た。

扉を開け、プクリンの部屋へと入って来たのは、スカイズの任務失敗の原因　ドクローズ、だった。

あ、アイツら……！！

エリーの睨み付ける目は無視して（ズバットだけは、びくびくと彼女を見ていたが）、スカタンクはポンと、大きくて赤い、美味しそうなりんごをプクリンに差し出した。

「ほら。本物のセカイイチですよ。」

お近づきの印にどうぞ。」

エリーとイーブイが驚いて居るのをチラリと見て、スカタンクは「クククツ」と笑った。

「わー　ボクの為にわざわざ取ってきてくれたの？」

ありがとー　友達、友達」

プクリンは早速頭にセカイイチを乗つけて、くるくる回り始めた。

「ほ、本当にありがとございました！」

ほら！　オマエ達も頭下げて！」

悔しくて、本当は文句の一つでも言っただけやん気分だ。

しかし、これ以上立場を悪くすると、遠征メンバーどころか、このギルドで修行を続ける事自体、怪しくなる。

唇を噛んで、ペラップの言葉に従うしかなかった。

「いえいえ、いいんですよ。」

私達はこのギルドにお世話になっている身……。困った時はお互い様です。」

スカタンクはそう言って、うわべだけの笑顔を浮かべる。ドガースもニヤニヤと笑った。ズバットだけは引きつった笑いを浮かべていたが。

「何て良い方達なんだ！」

アナタ方のような素晴らしい探検隊と行動を共に出来るとは……凄く光栄です！」

ペラップはそんな事には気付かずスカタンクの言葉に感動していた。

「では、もう遅いので、我々はこの辺で失礼致します。」

ドクローズはお辞儀して、部屋の出口に向かった。

その途中、スカタンクが目だけでこちらを見て、ニヤリと口角を吊り上げたのを、スカイズは見逃さなかった。

「ありがとうー 友達、友達ー」

そんな彼らの背中を、プクリンのご機嫌な声が追い掛けた。

「はあ……。」

ようやく解放され、部屋のベッドに倒れ込んだイーブイが、大きなため息を吐いた。

「プクリン親方に怒られなかったのは良かったけど……、

親方様も、ペラップさんも、すっかりドクローズは良いポケモンだ、って認識しちゃったよね……。」

「はあ……。」

その時、イーブイのお腹が鳴った。彼女はまたしてもしょぼんと耳を垂らす。

「うっ……お腹すいたよ……。」

「あ、ゴメン。エリーもお腹すいてるよね……。」

イーブイは苦笑いを浮かべた。

「このまま起きてても、気が滅入るだけだし……今日はもう寝ようか。」

「おやすみー、エリー。」

「にこっ、と微かに笑うと、イーブイは丸くなった。」

「……おやすみ、イーブイ。」

「そう言っつて、エリーもベッドの上で丸くなったものの、目は冴えたままだった。」

「もう少し早く……ちゃんと“ふういん”を決めていれば……」

「そうした思いが先程　　気絶して、目覚めた時から頭の中で渦巻いていた。」

「今更考えた所で、どうにもならない事は解っている。　　だが、今しがたのプクリンの部屋での出来事も悔しい気持ちをもより一層、深めているのだった。」

次の朝。

空腹で力が出ない身体を動かし、スカイズは朝礼の場へと向かった（エリーはあの後中々寝付けず、寝不足とも戦っていた）。

「えー。遠征メンバーの発表は、これから数日のうちに行いたいと思う。」

「ペラップがそう言うと、皆が興奮したようにガヤガヤし始めた。みんな、最後のアピール、頑張るんだよっ」

では、解散！」

朝礼が終わり、早速、依頼掲示板を見に行こうとすると、ペラッ
プに呼び止められた。

「あー、オマエ達。」

遠征メンバーに選ばれる事は諦めた方がいいと思うぞ。」

「え……ええっ!? な、何で!？」

ペラップの躊躇のない宣告に、イーブイは素っ頓狂な声を上げる。
「当たり前だ。オマエ達はセカイイチを取ってくる事に失敗したん
だ。」

……確かに、親方様が何を考えているのか、イマイチよく分から
ないが、内心では腸が煮えくり返っているに違いない。

だから……オマエ達を遠征メンバーに選ぶつもりなど無いだろう
な。」

スカイズは揃って顔を俯かせる。

ペラップはそれを見て、「少し厳しかっただろうか」とも思った
が、そのままその場から離れた。

「はあ……。ただでさえお腹減って力が出ないのに、あんな事言わ
れちゃ、余計に力が出ないよお……。」

イーブイがそう言うと、まるで共鳴したかのように、2匹のお腹
が同時に鳴った。

スカイズはその音にますます元気を無くし、ため息を吐く。する
と、突然誰かに呼ばれた。

「おい。エリー、イーブイ。」

「? 誰かしら?」

2匹が辺りを見回すと、弟子部屋への入り口で、ビッパが「こっ
ちこっち」と手を振って居るのが目に入った。

「ビッパ。どうしたの……?」

「しーっ! とにかく、こっちに来るでゲス!」

エリーとイーブイは顔を見合わせ、頭上に「?」を浮かべたが、
そのまま、弟子部屋へと入って行った。

スカイズ
自分達の寝室に入ると、ビッパだけでなく、キマワリとチリーンも待っていた。

「3匹とも……一体どうしたの？」

イーブイが首を傾げ、訝しげな表情で訊ねる。

「……グレッグル以外は誰も見てないでゲスね。」

ビッパが入り口の向こうを伺いながら、言った。

「だったら大丈夫ですね。」

…… エリーさん。イーブイさん。はい！」

チリーンがスカイズ（エリーとイーブイ）にリンゴを少し差し出した。

「リンゴ……？ 食べていいの？」

エリーが戸惑ったように聞き返すと、チリーン、キマワリ、ビッパはにっこりと頷いた。

「うわあい いったきまーす！」

イーブイは尻尾を大きく振り、喜びを露あらわにしてリンゴにかぶり付いた。エリーもまた、少し遅れてリンゴを一口齧かじった。

美味しい……

それはいつものリンゴと変わらないはずなのだが、普段より美味しく感じられた。

「昨日の夕飯の時、皆の分を少し残しておいたんでゲス。」

「……まあ、ドゴームは最後まで迷って居ましたけど。」

キマワリが笑いながら言うと、大きなくしゃみが聞こえて来た。それを聞いて、部屋に居る全員が笑いだした。

……そっか。いつもより美味しく感じたのは、皆の想いが詰まっていたからなのね……

「あら？ エリー。泣いてるんですの？」

エリーの瞳が僅かに潤んでいるのに気付いたキマワリが、からかうように言った。

「え？ な、泣いてなんかいいわよ……。」
エリーが照れ隠しするように再びリンゴに齧り付くと、全員がクスクス笑った。

「とにかく、たくさん食べて、遠征メンバーに選ばれるよう頑張るでゲス！」

「……それなんだけどね……。」

イーブイがリンゴから口を離して言った。

「ペラップさんが、“私達は、遠征メンバースカイスに選ばれる事は無いだろう”……って。」

全員が黙り込んだ。少し経って、キマワリが口を開く。

「そんなの……まだ分かりませんわ。」

チリーン、ビツパもそれに続く。

「そうですね。遠征メンバーはまだ決まってるませんよ？」

「これからまた頑張ればいいでゲス。」

「みんなあ……。」

でも……でも、いいの？

もし、私達を選ばれたら、この中の誰かが落とされるかもしれないんだよ？」

イーブイがその言葉に、瞳を潤ませながら訊ねた。

「その時は……その時です！」

「今度は、選ばれた人ポケモンを全力で応援しますわ！」

キマワリとチリーンが力強く言った。

「とにかく……最後まで気を落とさず頑張るでゲス！」

まずは、そのリンゴを食べて、元気を付けるでゲスよ！」

「……ええ！」

2匹は揃って大きく頷いた。

そして、食べかけで残っていたリンゴを再び食べ終わると、スカイズは元気良く依頼をこなしに出かけて行った。

いつまでも悔しがつてなんかいられない！ これから挽回して行けばいいんだわ！

20話 仲間の励まし（後書き）

あれ？ エリーってこんな涙脆い子だったっけ？

……いや。泣いてはいませんけど。

まあ、それはさておき、この下は“後書き番外編、まさかの第二弾（笑）”……となっております。

今回は、ゲーム中のドクローズの会話に少しアレンジを加えた物です。

……わざわざ後書きで、ドクローズなんか見たくねーよ！ ……

とか言う方はスルーしちゃってOKです

では、大丈夫な方のみ、どーぞ！

夜。

スカイズがようやく解放され、親方の部屋から出たのと同じ頃
「アニキー。何で、アイツらを助けたりしたんだ？」

ドクローズは自分達にあてがわれた部屋に戻っていた。開口一番

ドガースが訊ねる。

「あのままどうなるか見てても楽しかったらうに……。」「
クククツ。解ってねえな。」

オレ様達がここに来た目的は何だ？ 遠征だろ？

今はプクリンの信頼を得る事が大事なのだ。」

スカタンクがそう言つと、ドガースもズバットも「なるほどー」と言つた。

「それにしても……拍子抜けだな。」

皆が恐れるこのギルドの親方、プクリン……。

どんな奴かと思えば……ありや何だ？ ただのお子様じゃねえか。

「

「今回の作戦は楽勝だな！ アニキ！」

スカタンクはフツ、と鼻で笑つた。

「ああ。そうだな。」

「……ところで。」

ドガースの言葉に頷くと、今度はズバットをジロツと見た。

「な、何aska？ アニキ。」

アニキ（スカタンク）にじろじろ見られ、ズバットは少ししどろもどろする。

「何である時、びくびくしてたんだ？ ……ほら。プクリンの部屋に居た時の事だ。」

オレ様の目に狂いがなければ、エリーあのおんなをチラチラ見ていたような気がするが？

「へっ……？」

ズバットは思わずギクリとする。

「どうなんだ？」

スカタンクはさらに詰め寄る。

その一方でズバットは、

あのリンゴの森で、エリーアイツにボッコボコにされ、さらにそれが原因で奴がトラウマになつてゐるなんて……言えるかあ……ッ！

！

と、心の中で悲鳴を上げていた。

その後、ほとんど夜明け近くまでスカタンクの詮索は続き、ドクローズは全員寝不足のまま、朝礼に向かった……らしい。

最後、メチャクチャな終わり方だわww
とにかくの話で言いたかったのは、“ズバットにとって、エリー
はトラウマと化している”。それだけです
とことん不幸なズバット君なのでしたww

21話 遠征メンバー発表

それから数日。

仲間達に励まされ、やる気を取り戻した2匹スカイクは、着実に依頼をこなして行った。

そんなある日の夕食の席にて

「えー。今日は夕飯を食べ始める前に、少し話がある。」

ペラップがそう言うと、たちまちテーブルからブーイングが沸き起こる。

「何だよー、早くたべさせろよー。」

「遠征メンバーについての事なのだが……。」

“遠征メンバー”という言葉に反応して、ブーイングはすぐに収まり、水を打ったように静まりかえった。

「先程、親方様はメンバーについて決断なされたようだ。」

その発表は明日の朝礼で行う事にする。

……それじゃ、みんな お預けして悪かったな 改めて

『いただきますーす!』

「明日が遠征メンバーの発表かあ……。ドキドキするね? エリー。」

夕食が終わり、自室でリラックスしながらイーブイが言った。

「まあ、ペラップさんの言う通り、望みは薄いのもかもしれないけどね……。」

「イーブイ、まだ諦めるのは早いわよ。あれから、あたし達、頑張ったでしょ?」

苦笑いを浮かべるイーブイにエリーは優しく声を掛ける。

「うん。そうだよな!」

だから私……もし選ばれなかったとしても、悔いはないよ！
イーブイは元気良く言うと、にっこり笑った。

「……そっか。
それじゃ、そろそろ寝る？」

エリーが提案すると、それに返事をするかのように、イーブイは大きな欠伸をした。

「……うん。そうしようか。」

おやすみ」

「ええ。おやすみ。」

挨拶を交わすと、2匹は眠りに着いた。

スカイズの2匹が、すやすやと寝息を立て始めた頃……。

“巨大岩石群”と呼ばれる場所に、ある1匹のポケモンが現れた。暗くてその正体までは解らないが、輪郭そして、握りしめているリボンから察するに、キザキの森に現れたポケモンのようだ。

「……ここか。」

そう、呟くと、ポケモンは洞窟の中　ダンジョンの中へと入って行った。

巨大岩石群のダンジョンを抜けた先は、2つの洞穴に分かれている。

どちらかの洞穴が行き止まりだった場合、もう片方の洞穴に行けば、先に進める……普通ならばそう考えるだろう。しかし、この分かれ道は、どちらに行っても、元の場所　2つの洞穴の分岐点に戻ってしまうのだ。

こうなるともうお手上げ　これまで、巨大岩石群のお宝を手に入れようと挑んできた、数多くの探検家達は、どうしても先に進め

ず、諦めて帰る他なかった。

……しかし、真の道は右でも左でもない。正面　洞窟の固い、岩の壁の中に、宝へと続く道、大鍾乳洞は隠されている。　今ではその入り口は封印され、固く閉ざされているのだが。

例のポケモンはダンジョンを抜け、分かれ道にたどり着くとすぐに、壁に向かった。　脇目も振らず、真っ直ぐに。

そして、その壁をコツコツと叩いた。

「……やはり、封印されているか。」

そう呟くと、何やら鍵のような宝石を取り出し、かざした。

すると、壁が光りだした。

まばゆい光が収まると、ポケモンは腕を伸ばし、壁に触れた。腕はまるで水の中に入れたかのように、するりとその中に入った。

「……よし。」

それを確認すると、ポケモンは壁の中　大鍾乳洞に入って行った。

大鍾乳洞もまた、不思議のダンジョンになっており、それを抜けると、広々とした空間に出た。

かつては、この場所には“主”が居たのだが、大鍾乳洞が封印された時に去っていた。

まあ、お陰で無用な争いをする事も、正体が露見される事もなかったのだがな

そう思いながら、さらに奥へ進むと、ついに念願の物を発見した。
宙に浮かびながら、不思議な光を放つ歯車　　キザキの森にもあ
った、時の歯車だ。

ポケモンは近付くと、それを取った。

「これで、時の歯車は2つ！　……残る歯車は……あと3つ！」

彼が去った後の巨大岩石群は、キザキの森と同じように、シンと
静まり返っていた……。

次の日

「それじゃ、早速……遠征メンバーの発表を始めるよっ」

昨夜の夕食時に予告した通り、遠征メンバーの発表が始まった。

ペラツプは、ブクリンが決めた遠征メンバーの名前が書かれたメ
モを翼で器用に持っている。

「名前を呼ばれたら、前に出るように

まず1匹めは……ドゴーム」

「まあ、オレが選ばれのは当然だがな、ガハハハハッ！」

一番初めに名前を呼ばれたドゴームは、大きな声で笑いながら、
前に進み出た。

その様子を見た、弟子達全員は同時にこう思った。

よく言っ……

あのような事を言っているが、実は名前を呼ばれる直前まで、彼

が一番そわそわしていたのだ。

とにかく、ペラップは2匹めの発表に移る。

「2匹めは……ハイガニ」

「やった！ 選ばれたぜ、ハイハイ！！」

両手のハサミをブンブン振りながら、大喜びでハイガニは前に出た。

「そして……おっ。なんと、ビツパ」

「あ……あっしでゲスカ!?」

ビツパは驚いてそう叫んだきり、前に出ようとしなない。

「どうした？ 前に出ないのか？」

「そうしたいのは山々なんでゲスカ……感動して、足が震えて動けないんでゲス……。」

見ればビツパの顔には涙が光っていた。

「……………。まあいい。放っておくぞ。」

少し呆れて、黙り込んだ後、ペラップは次のメンバーの発表に移った。

「次は……キマワリ　そして、チリーン」

『きゃーっ！ 私（・ワタクシ）達も!?』

彼女達は互いに手を取って喜び合い、前に出た。

「　以上で、遠征メンバーの発表は……。」

その言葉を聞いた時、エリーは顔を俯かせた。

ダメ……だったか……

イーブイの方を見てみても、やはり彼女もかなり落胆した様子だった。

そんな彼女達を見て、ドクローズは意地悪く笑っている。

「……………あれ？」

突然ペラップが呟いた。何やらメモの端っこの方に目を止めている。

……こんな端の方にも名前が……。親方様は、字が汚いんだから……っと、こんな事言ったら、大変な事になるから、止めておく事

にして……

「……遠征メンバーだが、まだ続きがある。えー……

グレッグル デイグダ ダグトリオ そして、エリー

イーブイ

……つて、えええっ!?!」

これにはペラップだけでなく、その場に居る全員が口を開けた。

理由は明白。何故なら……

「これって、ギルドのメンバー、全員じゃないですかあっ!?!」

ペラップが困り果てたように、プクリンに言った。対するプクリ

ンは、ニコツと笑い、

「うん そうだよ」

……と朗らかに答えた。

「でも、これじゃ……選抜した意味が無いですし……何より、留守を守る者が居ませんよ!?!」

「大丈夫 ちゃんと戸締まりして行くから」

ペラップがこれ以上反論出来なくなり、口をつぐむと、今度は別の者がプクリンに進言した。

「親方様。私も心配です。」

そう言うのは、ドクローズのリーダー、スカタンク。

元々、リンゴの森のあの一件は、スカイズを蹴落とす為に仕組んだものなので、この結果は不服なのだ。

さらに、ギルド総出で遠征に行く、という事は、それだけ監視の目が増えると言うこと。このギルドに入り込んだ“最大の目的”を果たすにはかなり都合の悪い状況だ。

だから、何としても、全員で行く事だけは避けなければなら
ない。

「うーん……。友達にそう言われちゃうと困っちゃうんだけど……」

プクリンが困った風に言うのを見て、スカタンクはさらに言葉を
続ける。

「だいたい、全員で行く意味なんてあるんですか？」

「えー？ 意味はあるよー？」

スカタンクの方をパツと見て、プクリンは言った。

「だって……皆で一緒に行った方が楽しいじゃない？」

「えっ！？」

スカタンクは思わず変な声を上げた。それには気付かない様子で、プクリンはニコニコしながらさらに言葉を続ける。

「みんなでワイワイ行くんだよ？」

そう考えたら、もう、ボク、昨夜は楽しみで眠れなかったよ。」

プクリンの想像を上回るマイペースぶりに、スカタンクだけでなく、ドガース、ズバットも口をあぐり開けた。

ドクローズがこれ以上会話を続ける様子はない、と判断したペラツプは、コホン、と咳払いをしてから、皆にこの後の行動について伝えた。

「えー。では、選ばれた者は（全員だけど……）、トレジャータウンで冒険の準備をしてくるように。」

全員が戻って来たら、説明会を始める。……では、解散！」

そう言つと、ペラツプはプクリンと打ち合わせを始め、ドクローズは苦々しげにその場を離れた。

一方のスカイズとギルドの弟子達はその場に残り、一ヶ所に集まった。

「全員で遠征に行けるなんて……凄いですわ！」

キマワリがそう言つと、皆揃つて「うんうん」と頷いた。

「私達は落ちると思つてたから……ビックリしちゃったよ！」

「あたしもよ。」

エリーとイーブイは互いに微笑み合った。

「流石は親方様！ ですよね きゃっ」

チリーンは頬に手を当てて呟いた。

「うつつ……。遠征に参加出来るだけで十分嬉しいのに……。皆で行けるなんて、夢のようでゲス……。」

ビツパは先程から溜まっていた涙をポロポロと零し始めた。

「夢ではない。本当の事なのだ。」

「そうですね、ビツパさん！」

そう言うのは、ダグトリオ、デイグダの親子。

「とにかく、皆で行く以上は、全員の力を合わせて頑張ろうぜえ、グへへ。」

グレッグルの言葉にも、全員が頷いた。

「よおし！ 燃えて来たぜ！」

「お宝、たくさん見つけようぜ、ハイハイー！！！」

もう既に気合い十分なのは、ドゴームとハイガニだ。

「遠征、絶対に成功させましょうー！！！」

『おーーっ！！！！！！』

全員がにっこりと、そしてその中に気合いを秘めた表情で片手や片方の前足を宙そらに挙げた。

21話 遠征メンバー発表（後書き）

大鍾乳洞への入り口を封印を解く方法は、マナフィの映画を参考にしました（笑）

……確かありましたよね、宝石をかざしたら隠された通路が見つかる、というシーン。

間違ってたらごめんなさいm（――）m

大鍾乳洞を封印させた理由を言いますと、

あの場に“主”ことメタモンが居たら、この時点でジユプ兄の正体が知れ渡ってしまうのではないか

……という訳で、大鍾乳洞への入り口が封印された時にメタモンもどこかへ行ってしまった、という事にしました。

そして、封印を解く為に使った宝石は、決して強奪とかした訳ではありません（笑）

……えっと、今の説明、少々解りにくかったかもしれない（汗）すみません。私の説明力不足です……（汗）

22話 出発（前書き）

何だか、いつにも増して酷い文章に出来上がった気がします……。

r z

22話 出発

遠征メンバーが発表され、なんとギルドの弟子達全員で遠征に行ける事が決まった。

遠征の成功を誓い合った弟子達は、トレジャータウンにて、遠征の準備をしっかりと済ませ、現在は説明会が始まるのを待っている所だ。

「では、これから、遠征についての説明を始める。」

弟子達が全員揃ったのを確認すると、早速ペラップは説明会を開始した。

「まず、今回の遠征の目的。それは、前にも言った通り、ここより遙か東にある湖を調査する事だ。」

その湖の名前は“霧の湖”と呼ばれていて、その名の通り常に霧がかかっている。その為、はっきりと確認された事のない、幻の場所なのだ。

「……そして……そこには、とても美しいお宝があるとされている。」

“美しいお宝”の言葉に、弟子達は騒めいた。そんな中、ドクローズはニヤリと笑ったが、それには誰も気付かない。

「幻の場所に、美しい宝物か……。」

「何だかワクワクしてくるね！」

イーブイが目をキラキラさせて、エリーに話かけた。そんなイーブイの首元には、バンダナ 特殊防御を高めるキトサンバンダナが巻かれている。

「そうね。」

と、返すエリーの顔の左脇 尖った耳の下辺りには、特殊攻撃の威力を上げる、スペシャルリボンが付けてあった。

実はこの2つ、遠征に行く2匹への選別に、ガルーラがプレゼン

トした物なのだ。

皆の騒めきが止むと、ペラップは不思議な地図を取り出すよう指示した。

「霧の湖”があるとされるのは、ここだ。

未開の地なので、雲に覆われてはつきりと記されていないが……トレジャータウンから、かなり距離がある事が分かるだろう。」

ペラップが示したのは、北を上にして、右の端の方　つまり、東の果ての方だ。トレジャータウンは大陸の西の海岸沿いにあるから、ペラップの言う通り、かなり距離がある。

「なので、この高原の麓にベースキャンプを張ろうと思う。」

そう言っつて、ペラップは地図上の雲に覆われた部分から、少し西に翼を動かし、雲に覆われていない部分を示した。

「……ただ、ここまで全員で行くのは、機動性に欠けるので、幾つかのグループに別れて行く事にする。」

ペラップが発表した、グループ分けは、
まず、プクリンとペラップ、2匹のグループ。

プクリンは駄々を捏ねたが、ペラップに説得され、渋々納得した。

次いで、キマワリ、ドゴーム、ディグダ、グレッグルのグループ。
そして、ダグトリオ、チリーン、ヘイガニのグループ。

ドクローズは彼らだけの単独。

エリー達、スカイズにはビツパが加入した。

「一緒のチームでゲスね！　よろしくでゲス！」

「うん！　よろしくね！　ビツパ先輩！」

「一緒に頑張りましょ。」

スカイズとビツパはにこやかに挨拶を交わした。

「それじゃ、張り切って行くよーっ！！」

「おーっ！！！！」

……こうして、ギルドの遠征が始まり、皆はそれぞれ選んだル―

トで、ベースキャンプを目指す事になった。

「わーっ！ この下海だよー！？」

海沿いのルートを選んだ、スカイズ、そしてビツパは、断崖絶壁を進んでいた。

今のは、崖の下を見たイーブイの言葉である。彼女は思わず身震いした。

「……やっぱり、“遠征”というだけあって、道はそれだけ厳しくなるのかもね……。」

ポツリとエリーが呟いた。

しばらく進むと、洞窟が見えて来た。その入り口にはガルーラの形をした像が置いてある。

「ビツパ先輩。これは、なあに？」

その像の顔を見上げて、イーブイが訊ねた。

「ああ。これが噂の“ガルーラ像”でゲスね。」

「ガルーラ像？」

エリーが聞き返すと、ビツパはコクリと頷いた。

「あつしもまだ使った事はないんでゲスが、これを使えば、ガルーラさんの倉庫にある道具を引き出したり、逆に手持ちの道具を預けたり出来るんでゲスよ。」

『す、凄い……。』

エリーとイーブイは同時に呟いた。

とはいえ、出発する前にトレジャータウンでしっかり準備をしてきたので、ガルーラ像は利用せず、そのまま洞窟に入るうとした。しかし……

「あ、あれ？」

ビツパが声を上げた。

それを聞いて、エリーとイーブイも中を見ると、洞窟は二手に分かれていた。

「どっちに行けばいいのかしら……。」

「じゃあ、私に任せてー」

どちらに進むべきか考えていると、イーブイが前に進み出た。

「何かいい考えでもあるんでゲスか？」

「うん　こつう時はねー、」

ビツパの問いかけにイーブイはにっこりと頷き、右前足を前に突き出した。

そして……

「どーちらにしようかな……。」

エリーとビツパは思わずその場にずっこけた。

自分の背後で、そんなギャグみたいな現象が起こっている事など露知らず、イーブイはそのまま続けている。

「……てんのかみさまのいうとーりっ！」

よし、こつち！……ってあれ？　2匹ともどうしたの？」

ようやく、ずっこけているエリーとビツパに気が付いたイーブイが訊ねた。

「そ、そんな決め方でいいの……?」

エリーが力なく問う。

「でも、行くだけ行ってみるのもいいんじゃないでゲスかね？」

ビツパがそう提案すると、イーブイはにっこりと笑顔を浮かべ、

「じゃ、早速行ってみよーよ」

と、先頭を切って元気良く歩き出した。

そんな大張り切りのイーブイを見て、エリーは少し驚いたが、「

可愛いなあ」と微かに笑顔を零す。

そして、先に歩き出したイーブイとビツパを追って、エリーもまたイーブイの選んだ洞窟へと入って行った。

「ずつき”でゲス！」

ビツパは向かって来たミニリュウに“ずつき”を食らわした。その一撃でミニリュウは目を回して倒れた。

「おい！ そっちはどうでゲスカー!？」

ビツパは振り向いて、エリー、イーブイの状況を確認する。

実はこの数分前、突然ポケモン達　今しがたビツパが倒したミニリュウ、そしてキヤモメ、トドグラの3匹　に襲われ、手分けをして戦っていたのだ。

「あたしの方は終わったわよ。」

相性は悪かったが、エリーはキヤモメを倒していた。

「こっちもだよー」

イーブイがにこり、と言う。相手はタマザラシの進化形、トドグラだったけど、どうやら勝てたようだ。

「このキトサンバンダナのお陰で、“みずでっぽう”受けてもあまり痛くなかったよ！」

イーブイが首のバンダナを触りながら言った。

「それは良かったでゲス！」

3匹はそう言葉を交わすと、再び洞窟の中を進み始めた。

「でも、水タイプが多いよね、このダンジョン。」
イーブイが歩きながら、ふと呟く。

「どうやらここは“沿岸の岩場”と言っらしいでゲスよ。」

「だから、か……。」

沿岸 海沿いにある訳だから、道理で水タイプのポケモン多く生息しているはずである。

「でも、見るでゲス！ あそこ、明かりが見えるでゲスよ！」

ビツパが前方を指す。

確かに光が漏れているのが見える。

「出口、なのかしら？」

「とにかく、行ってみようよ！」

光の方に向かって歩くと、段々と光が強くなり、やがて外に出た。洞窟の外の眩しさに慣れ、辺りが見えるようになると、前方に大きな山があるのが見えた。

「あれはツノ山でゲスね。」

ベースキャンプに行くにはあの山を越えなくちゃいけないようでゲス。」

地図を広げたビツパが言った。

「え？ それじゃ、私達、正しい道に来れたんだ？」

イーブイが一番安堵したように言う。

聞けば「勢いで突入したけど、後になって不安になった」とのこと。

そんな「えへへ」と恥ずかしさ半分、苦笑い半分の表情を浮かべているイーブイを見て、エリーもビツパも可笑しそうに笑う。

「……でも、今から山を越えたら、日が暮れてしまうわ。今日はこの辺で休まない？」

「うん！ いいよー」

「あつしも賛成でゲス。」

エリーの提案に賛成すると、全員で夕飯の仕度（と言っても、それまでに拾ったリンゴや木の実を並べるだけだが）に取り掛かった。

3匹でお喋りしながら夕飯を食べ終えると、寝る準備を整え、また明日に備えて眠りに着いた……。

22話 出発（後書き）

イーブイ「あれ？ 沿岸の岩場でのバトルの描写がなかったよ？」

うっ……ごめんなさい（汗）

エリー「バトル描くの面倒だった、とか言わないわよね……？」

い、言わない言わない！！（汗）

ツノ山ではちゃんと描くから！……多分。

エリー「多分、って（呆）」

23話 ツノ山で(前書き)

前回の沿岸の岩場は省略してしまったので ツノ山は1話使って
書こうと思ったら……

……(;)

訳の解らぬ事になりました。

……結局、何がしたかったんだろ、私(蹴

23話 ツノ山で

ベースキャンプを目指し、海沿いの道を行く事になった、スカイズとビツパ。

3匹は沿岸の岩場を抜け、ツノ山の麓で夜を明かした。

朝食を終え、出発の準備も整え、今は地図を広げ今後のルートの確認をしている最中だ。

「えーと……沿岸の岩場を抜けて、目の前の山がツノ山なんだよね？」

イーブイが地図上の自分達が居るであろう、おおよその位置を前で突いた。

「ベースキャンプはツノ山を越えたすぐ先ね。」

今から登れば、今日中には着けるんじゃないかしら？」

「……じゃ、早速行くでゲスか？」

ビツパが言うと、エリーは「ええ」、イーブイは「うん！」と同時に返事をした。

そして、早速トレジャーバッグを持ち、ツノ山へと向かった。

「……あれ？」

洞窟ダンジョンの入り口を見た瞬間とた、沿岸の岩場の時と同じようにビツパが声を上げた。

「どうしたの？ ビツパ先輩。」

「もしかして、また分かれ道？」

エリーの言葉にビツパはコクリと頷く。

「じゃー、私の出番だね。」

イーブイがぴよこりと前に進み出た。

「また“アレ”で決めるんでゲスか？」

ビツパが訊ねた。（彼の言う“アレ”とは昨日の“どちらにしようかな”の事である。）

「うん。そーだよー」

につこりと笑い、その質問を肯定すると、早速イーブイは前足を正面に突き出した。

「……ねえ、2匹とも！」

イーブイが最初の「ど」と言い掛けた所で、エリーが突然他の2匹ツバを呼んだ。

彼女はじつ、と右側の洞窟を見つめている。

「どうしたんでゲスか？」

「何だか右側の洞窟……騒がしくない？ 様子が変わわ。」

それを聞いて、イーブイもビツパも耳を澄ます。

「……本当だ！」

「悲鳴のような声まで聞こえるでゲスよ!？」

その時、洞窟の中から誰かが走って来た。

短い足を懸命に動かし、こちらに向かって来るのは、きのこポケモンのキノココだ。しかも、その身体には至るところに傷が付いている。

「ね、ねえ！ どうしたの？」

イーブイがそのキノココに話し掛ける。

「あ、あなた達は？」

キノココは立ち止まると、おどおどした様子で3匹を見た。

「あたし達は探検隊よ」

「た、助けて下さいっ!！」

エリーが“探検隊”と言うや否や、キノココは頭（というより体全体）を下げて助けを求めてきた。

3匹は驚いたが、目の前のキノココは傷だらけで、何か良くない事があったのは容易に想像できる。

エリーは何があったのか訊ねた。

「変な3匹組が、ぼく達の持つ宝物を独り占めにしようとしているんです……」。

ぼく、なんとか逃げ出したんですけど、この山に住む仲間達は…

…。」

キノココは不安げな表情で山を見た。

「宝物？」

「この事です。」

首を傾げるイーブイにキノココは、何とか守りぬいた自分の宝箱を見せた。

赤くて、何だかつかっこいい雰囲気のは、頑丈そう簡単には開きそうも無い。

「一体何が入っているんでゲスか？ こんな頑丈そうな宝箱に……。」

「それは……開けてみないと分かりません。でも、例を上げて言うならば……専用道具、なんかです。」

専用道具 前にキマワリも言っていたが、特定のポケモンとその進化前後のポケモンにのみ効果が発揮される道具だ。店では買えない為、ある意味では貴重な道具とも言える。

「でも……その宝箱、とても頑丈そうよね？ 当然、力任せじゃ開かないんでしょう？」

「もちろんです。」

……ただ、エスパー技には弱くて……。 “サイコネシス” なんかを受けると、簡単に開いてしまっんです……。

奴らの仲間の中に、ネイティが居ましたから、多分そいつに開けてもらおう気なのではないか、と……。」

「とにかく皆を傷付けて、宝物を奪うなんて許せないよ！」

イーブイが憤ったように言う。

「キノココ。あたし達が何とかするわ。」

エリーがそう言うと、キノココは体を震わせた。

「あ……ありがとうございます……！」

「早速行くでゲス！」

トレジャーバッグからオレンの実を取り出し、それをキノココに渡すと、スカイズ、そしてビツパはツノ山へと入って行った……。

「中々たくさんのお宝が手に入ったな。」

ダンジョン
洞窟内で、目の前に積み上げられた大量の宝箱を見て、ガハハハ、と笑うのは岩の身体をした翼竜、プテラ。

「でも、ここのおぼけもん達、あまり張り合いがありませんデシタ。」
片言で話すのは、丸く小さな鳥、ネイティ。

「……………」

そして、2匹の話を聞いているのだが、聞いていないのだから、とにかく無口な大きな赤い蜘蛛、アリアドス。

ツノ山で暴れ回っていたのは、この3匹のようだ。

「さて、こんなにも宝は手に入ったし……………さっさと帰るか！」

「アレ？ ネエ、プテラ。こんなたくさんのお宝、どうやって持って帰るの？」

その場に妙な沈黙が走る。

「もしかして……………考えてなかった、トカ？」

「……………そ、そんな事ねえよ！！」

一瞬ギクツとした後、プテラは慌てて取り繕う。

だが、ネイティは白い目で見たままだ（アリアドスは相変わらず沈黙したまま無反応を貫いているが）。

「ほ、ほら！ ネイティ、お前が運べばいいだろ！？ “サイコキネシス”で！」

「嫌ヨ。こんなたくさん持ったら、重いモン。」

プテラとネイティはギャーギャー言い争いを始めた。……とてもこの山のポケモン達に恐怖を与えたとは思えない。

「きつと、あのポケモン達だよ！」

「へ？」

聞き慣れぬ声に、2匹は思わず言い争いを止めた。

そこに居たのは、キノココから事情を聞き、ツノ山に突入した、スカイズとビツパだった。

「貴方達ね？ この山のポケモン達の宝物を強奪していた、のは……ツ！？」

アリアドスの方に視線が行った瞬間、エリーの口調がおかしくなった。

なんとかか叫び声を上げるのは堪えたものの、プテラとネイティは変な物でも見たような目で彼女を見ている。

気を取り直したプテラが、エリーの質問に答えた。

「ああ。この山のポケモン達から宝を奪って居たのは、オレ達だ。それよりもお前達……何者だ？」

今度はプテラがエリー達に訊ねた。

「私達は探検隊だよ！」

「この山に住むポケモンはみんな、困ってるんでゲス！ 宝物を返して、出て行くでゲス！」

“探検隊”という言葉聞いて、ネイティは少し後退りした。

「どうするノ、プテラ！ 探検隊、ダツテ！ 逃げた方がいいんじヤナイ？」

「冗談言つな！ せつかく手に入れた物を手放して逃げてたまるか！ 行くぞ、ネイティ！ アリアドス！」

プテラが合図を掛けると、ネイティはため息を吐きながら、アリアドスは相変わらず無言で、一斉に襲い掛かって来た。……が。

「!!!! 虫!? 虫は来ないでえっ!!!」

さすがに自分の方に向かって来るアリアドスには堪えられなかったのだろう。

エリーは“ひのこ”で返り討ちにし、アリアドスはあっさりと倒れた。

「あああああ!? アリアドスっ!!!」

「……エリー、どうしたんでゲスか?」

エリーの虫を見た際の取り乱しように初めて見たビツパは、イーブイに訊ねた。イーブイは、困ったような顔を見せながら説明する。「エリーはね、虫が苦手で、虫を見るとあんな風に取り乱しちゃうの……。」

一方のプテラ達と言うと、ネイティは諦め気味の表情で傍観者に回り、プテラは1匹で戦うという、分裂した状態になっていた。

「よくもアリアドスをやってくれたな!

覚悟しろ! “かみなりのキバ”!

プテラは電気を纏わせた牙で噛み付こうと、突進してきた。

「ふういん”!”

だが、エリーは動じる事なく、プテラの動きを封じた。彼女はイーブイとビツパに「今よ」と合図を送る。

「行くよ、ビツパ先輩! “てだすけ”!”

合図を受けてイーブイは、仲間の攻撃技の威力を上げる“てだすけ”をビツパに施した。

「“ずつき”でゲス!”

“てだすけ”を受けたビツパは、プテラの腹に渾身の“ずつき”をした。

プテラは吹っ飛ばされ、ネイティと気絶しているアリアドスをも巻き込み、洞窟を転がって行く。

転がりながらも、彼らの言い争う声が聞こえてきた。

「だから、逃げようって言ったノニ!!!」

「だって、せつかく手に入れた宝、簡単に諦められる訳ないだろ!

「？」

「……ああ。確かにたくさんさんの宝が手に入ったな。」

「お前の反応は遅すぎなんだよオオツ！！」

アリアドスの度が過ぎる反応の遅さに突っ込みを入れるプテラの叫びはやがて、エリー達の耳には聞こえなくなった。

「……何だったの、アイツら……。」

しばらく唾然としていたエリーがようやく一言口に出した。

「……やりすぎてしまったでゲスかね……あっし……。」

ビツパはビツパで彼らを吹っ飛ばしてしまった事を後悔している様子。

「ビツパ先輩、気にしちゃダメだよ！　だって、みんなの宝物、取り戻せたんだよ？」

結局彼らは手に入れられず、残った宝物を示しながら、イーブイがにっこり笑い、励ました。

「皆さんーん！」

振り向くと、先程のキノココが駆けて来る所だった。幸いな事に怪我は完全に治っている。

「プテラ達を追い払ってくれたんですね！　ありがとうございますーん！」

『う、うん……。』

3匹は釈然としない部分がある為か、微妙な返事をする。

「どうかしました？」

キノココはその様子に不思議そうな顔をして、訊ねた。

「ううん！　何でもないよ！　……あつ、みんな出て来たね！」

ツノ山から脅威(?)が去った為か、山に生息しているポケモン達が、ひよこり、ひよこりと顔を見せ始めた。

「それで……お礼と言ってはなんです……。受け取って下さい！　キノココは自分の持っていた赤い宝箱を差し出した。

「えっ、いいの？」

「もちろんですーん！」

「エリー、イーブイ。貰っておくといいでゲスよ。」

イーブイは少し躊躇するも、キノココから宝箱を受け取った。彼女の抱えている様子から察するに、あまり重くはないようだ。

「……ところで、キノココ。あたし達、このツノ山を越えたいんだけど……この道で合ってる？」

エリーが質問した。

先程のプテラ達を止める為、飛び込んだのだったが、抜けられないか解らなかつたからだ。

「大丈夫ですよ。このまま先に進めば、越えられます。

……えっと、頑張ってくださいね！」

キノココは笑顔を見せ、応援の言葉を送った。

「ありがとう。」

「バイバイ」

「さよならでゲス！」

キノココに別れを告げると、スカイズ、そしてビツパはさらに、洞窟内を進んで行った。

まず目指すのは、皆との合流場所のベースキャンプだ。

23話 ツノ山で（後書き）

……ホントに何だったんだろ、アイツら（＾O＾）ノ

その場の思い付きで突っ走ってはいけませんね（反省）

……というか、あの3匹、もっと何というか……悪役らしくするはずだったのに、

何時の間にやら、ただの3バカに降格してました

プテラ「ただの3バカに降格してた、だと……！？」

3バカは愛されキャラなんだぞっ！！

オレ達もいずれば超人氣キャラに……！！」

ネイティ「ッテいうか、3バカって認めてどうするノ（呆）」

まあ、保安官には逮捕されなかったけど……

今後の出番なんて予定してないよ？

多分、読者様の記憶から抹消されてくのがオチなんじゃないかな。

プテラ「……………！！？」 ショック

アリアドス「……………ああ、確かに3バカは愛されキャラだ。」

ネイティ「だから反応が遅すぎるノヨ、アナタ（呆）」

プテラ「こーなったら、オレ達をまた見たいって奴は、この作者に言え！」

もしかしたら、出番があるか m ぎゃあっ! ! ! 「

勝手な事言っな (怒)

(プテラの言っ事には耳を傾けなくてオッケーです。)

エリー「 っていうか、何で後書きにまで出てるの、マイシン..... 。

「

24話 ベースキャンプ(前書き)

ほとんど原作そのまま+ちょっと短い……かも? || 早く完成した訳

……とは言っても、(携帯版で)3ページあるので、長々的には普通とあまり変わらないかもしれません。

文字数にしたら、短め……だと思います……?

24話 ベースキャンプ

ツノ山のダンジョンを抜けると、そこは霧に包まれた世界だった。「うわあ〜……もう、この辺りから霧が出てるんだね〜……。」
イーブイが呟いた。

その口調はドキドキしているようにも感じられる。

目的地は、常に濃い霧に覆われている秘境、“霧の湖”。この、今はまだ辺りが辛うじて見える霧が、その秘境に近づいているのだ、という実感を与えさせるのだろう。

そのまましばらく進むと、霧の中にテントが浮かび上がって来た。

「あつ、あそこがベースキャンプじゃないでゲスかね？」

3匹は急いでテントのある方向に向かった。

「オマエ達、遅いつ！ 他の皆はもうとっくに到着してるよっ！」
到着した事を知らせると、早々にペラップに怒られた。

エリー、イーブイ、ビツパは口々に「ごめんなさい」と謝る。

「……まあ、いい。早く荷物を置いて。説明を始めるぞ。」
ペラップはスタスタと他の皆の所に歩いて行った。

後を追おうとすると、エリーは妙な感覚に襲われ、ふと立ち止まる。

何かしら？ この感じは……。

あたしは、この場所を……知っている？

そんな感覚に首を傾げていると、先に行っていたイーブイがエリーを呼んだ。

「エリー！ 早くおいでよー！」

「……。今、行くわ。」

ぼーっと上の空な返事をする、皆の所に向かった。

「えー。では、無事に全員が集まったので、これから霧の湖の探索を始める。」

ビツパ、イーブイ、遅れてエリーが皆の所に集合すると、ペラッブが口を開いた。

「見ての通り、この辺りは深い森に覆われている。霧の湖は、この森のどこかにあるとされているのだ。……今のところ言い伝えできないが……。」

「ヘイ！ 本当にあるのかい！？ 霧の湖なんて！」

ヘイガニがハサミを上げてこう言った。

「ヘイガニ！ それを言ったら夢がありませんわ。」

「そうだ！ 今さら何言ってるんだよ！」

すると、たちまち起こった反論の声に、彼は「ヘイ……。」としゅん、となった。

「あの……。」

ヘイガニに続いて、控えめに口を開いたのは、チリーンだ。

「私、ここに来る途中で、ある伝説を耳にしたのですが……。」

『伝説？』

皆は口々に聞き返した。

「はい。霧の湖についての伝説なのですが……。」

霧の湖には、とても珍しいポケモン、ユクシーが住んでいるそうなんです。

そして、そのユクシーは……自分と瞳めを合わせた者の記憶を消してしまう能力ちからを持つそうなんです。」

記憶を消す能力ちから！？

チリーンの語る、ユクシーの伝説にエリーは目を見開く。……そして、ある考えもまた頭の中に浮かんできた。

当然この伝説に驚いたのはエリーだけではない。周りの皆もまた驚いて、周囲はザワザワと騒めき合っていた。

その騒めきが止んだ所で、チリーンは続きを語る。

「なので、もし霧の湖に行った者が居ても、皆、ユクシーに記憶を消されてしまい、湖の存在を伝える事ができない。そうやって……ユクシーは、霧の湖を守っている、という訳なんです。」

チリーンが語り終わると、皆は沈黙した。やはり“記憶を消す”の部分が相当堪えたのだろう。イーブイとビツパに至っては、微かに震えている。

「ああ。まあ、確かに恐ろしい伝説だが……こうした場所には伝説や言い伝えがあるものだ。」

それに……我々は今までもそういった困難に打ち勝って、数々の探検を成功させて来たんじゃないか」

ペラップがこう言うと、皆のやる気が復活した。

「その通りですわ！」

「それこそが親方様のギルドが一流、と呼ばれる所以ゆえんだからな。」

「うん、今回もきつと大丈夫だよ」

成功目指してがんばろ」

樂觀的な言葉にも思えるが、親方プクリンがそう言うと、何故だか安心できた。

「では、今回の作戦なのだが……」。

まず、私とプクリン親方はベースキャンプ（ここ）に残る。オマ工達は各自森を探索してきて欲しい。

……また、この場所は見えての通り、霧もやがかかっている、奥に行けばさらに濃くなるものと思われる。霧の湖は、この霧もやの所為で発見されにくいのだろう。

なので、霧を取る方法、もしくは霧の湖そのものを見つけた者は私か親方様に報告するように！

では、頑張つて行こーっ！

「おおーっ！」

ドクローズを除く全員が、片手または前足を上げて、ペラップの合図に応え、気合いを注入した。

皆は荷物を準備しながら、「見つかるといいね」と話したり、「一番最初に見つけるのは自分だ！」などと意気込んだりしている。そんな中、デイグダ、ダグトリオの親子が先に出発したのを見て、「こうしちゃいられない」と弟子達みんな、そしてドクローズも次々に森へと消えて行った。

「私達も早く行かなきゃ！」

イーブイはバッグを準備する。だが、エリーは先程、チリーンの話を聞いていた時に浮かんだ考えについて頭を巡らせる事に集中していて、他の事が上の空になっていた。

この感じは何なの……。この場所の事を前から知っているよ
うな……。この、感じは……。

それに、訪れた者の記憶を消すという、ユクシーの伝説……。もしかして……。あたしは以前、本当にこの場所に来た事があって、ユクシーに記憶を消された……。そうは考えられないかしら……。

「……りー……えりー……エリー!!」

1匹悶々と考えていたエリーは、ほとんど叫ぶようなイーブイの声にびくっ、として、自分の世界から戻された。

「どうしたの？ さっきからぼーっとして。エリーらしくないよ？」
イーブイは心配そうにエリーの顔を覗き込む。

「ごめん、イーブイ。大丈夫よ。」

「……そう？ じゃ、早速出発しよう！」
バッグを肩に掛けると、2匹は森の中に入ろうとした。

「あれ？」

イーブイが道の脇にある茂みの近くに目を止める。

「どうしたの？」

「あそこ……何か落ちてる。」

言われて見てみれば、赤い色をした何かが落ちている。

2匹は近付いてよく見た。それは、キラキラと紅く輝いて、とても綺麗な石だった。

「わあっ。きれいな石だね！」

イーブイは瞳を目の前の石のように輝かせ、尻尾をピコピコ振っている。そして、彼女は石に手を触れてみた。

「うわぁ。この石、温かいよ？ エリーも触ってみる？」

イーブイはエリーにその紅い石を手渡す。

石を手にとったエリーは、周りの気温の低さとは対比的に、まるでつい先程まで陽だまりの下にあったかのような石の温かさに驚いた。

「本当だ……。温かい……。」

「珍しいから取っておこうか？」

イーブイの提案に「そうね」と頷き、エリーは石をバッグにしまった。

「それじゃ、森に入りましょうか。」

「うん！ 霧の湖……見つけたそうね！」

2匹は、深い霧の立ち込める森　濃霧の森へと行って行った……。

25話 霧の湖を探して

ツノ山を越え、ようやくベースキャンプに到着した、スカイズとビツパ。

既に到着していた、他の仲間達と共にペラップから今回の作戦を聞き、いよいよ霧の湖の探索に移った。

しかし、秘境・霧の湖がそう簡単に見つかるはずもなく、探索を始めた時刻も遅かった事もあり、各自がそれぞれの場所で休息を取った。

次の日、一日かけて探したのだが、結局見付からず再び夜を迎えた。

「見付かるのかなあ……霧の湖……。」

眠たそうにうとうとしながらイーブイが呟く。

現在、スカイズは少し広めの木の洞うらの中に居る。夕御飯は食べ終え、後は明日も続く探索に備えて寝るだけだ。

「弱気な事言わないで。」

あたし達が探しているのは、幻とまで言われている場所なのよ。

そう簡単に見付かるはずない……だけど、気を落とさず頑張りましょ？」

エリーはそう言って微笑みかけると、相手もまた「そうだね」と笑顔を見せた。

2匹の眠気はピークに達している。お互いに「おやすみ」と言葉を交わすとすぐに眠りに着いた。

翌日。

この日もまた、朝から霧の湖の探索を開始するスカイズの2匹。恐らく他の皆も探索し始めているだろう。

濃霧の森には相変わらず霧が立ち込めているが、そんな光景にも大分慣れて来て、霧で辺りがよく見えない分周りの気配を察するのに敏感になった。

「イーブイ、何か来るわ。」

エリーがポケモンの気配を感じ取り、イーブイに警告を送る。イーブイの方も気付いていたようで、「解ってるよ」と頷いた。

霧の中から現れたのは、頭から生えた2本の大きな角が特徴的なオドシシだった。

すると、オドシシの角に付いた、黒い珠が怪しい輝きを放ち始めた。

「！ オドシシの角は見ちゃダメよ！」

それに、いち早く気が付いたエリーがイーブイに注意する。……が、一足遅かった。

「ふぁ〜……。何か眠くなって来ちゃった……。。」

とろん、とした目付きで欠伸をしたかと思うと、イーブイは眠りに着いてしまった。……オドシシの“さいみんじゅつ”にかかってしまったのだ。

イーブイが行動不能になったのを確認すると、オドシシは足を高く上げると、エリーに向かって踏み下ろして来た。

先にエリーを倒してから、眠っているイーブイを倒すつもりなのだろう。だがエリーはそれを軽く躲す。

「そう簡単には行かないわ。」

エリーは直ぐ様“ひのこ”を放った。

最近、“ひのこ”の熱、威力共に上がっているような気がしていたのだが、オドシシがその一撃だけで倒れたのには驚いた。

ともあれ、襲って来る敵は近くにはもう居ないので、眠っているイーブイの口に状態異常を治す“いやしのタネ”を入れ、飲み込ませた。

すると、眠っていたイーブイは一発で目を覚ました（まだ目はとろん、と寝呆け眼だったが）。

「あ、あれ……？ オドシシは？」

ぽーっ、と辺りをキョロキョロ眺めながらイーブイが尋ねた。

「オドシシならあたしが倒したわ。」

「そっかぁ……。」

何となくまだ寝呆けているようだ。2匹は少し休んでから、再び探索を開始する事にした。

探索を再開してしばらく経った。

霧は森の入り口より明らかに濃くなり、微かに水の音が聞こえてきた。

「もしかして、霧の湖が近いのかな？」

イーブイは期待のこもった声で呟くが、エリーは「解らない」とばかりに肩をすくめた。

さらに進むと、あれだけ鬱蒼と茂っていた木々が無くなった。

どうやら濃霧の森を抜けたようだ。

森を抜け出した先は、あちこちから滝が流れ落ちており、滝の落ちる先には、水溜まりが出来ていた。どれも“湖”とは呼べない、“池”程度の大きさだったが。

さらに、一步踏み出すと足が泥濘ぬかるみにはまった　かなり水気を含んでいるようだ。

「これじゃ、霧の湿地帯ね……。」

そう呟くエリーは、水気を含んだ地面に、不快そうな顔をしていた。

「ヘイヘーイ！　お二人さーん！！」

2匹が先に行くか迷っている、聞き慣れた陽気な声が聞こえて来た。近付いて来るに連れて、赤いシルエツトが見えてきた　ヘイガニだ。

「ヘイガニ先輩！　何か手掛かりは見つかった？」

「いや、それが全然……。」

その言葉を聞き、スカイズは残念そうな表情を浮かべ、うな垂れる。

「でも、何か妙なモノ見付けたぜ、ヘイヘーイ！」

「妙なモノ？」

ヘイガニに連れられて、湿原を進むと、霧の中から巨大な何かが浮かび上がって来た。

イーブイは急に現れたそれに驚いたのかビクツ、としてエリーの側にピツタリくつついた。だが、近付いて見てみると、それは何かのポケモンの形をした石像だった。

それは、二本足で立っており、顔から首の辺り、尻尾、そして胸の脇にトゲが付いた、怪獣のようなポケモンだった。土台はぬかるんだ地面の所為で地面にのめり込み、斜めに傾いている。

「これってポケモンなのかな？　見た事もないけど……。」

「グラードン。」

エリーが言うと、イーブイもヘイガニも「えっ？」と言うように彼女の方を向いた。

「この石像のポケモンの名前。」

日を照らす能力で洪水に苦しむ人々を救い、さらに大地を盛り上げて大陸を広げた、と言われている伝説のポケモンよ。」

エリーがこう説明すると、2匹の顔は「へえ〜」と言つような納得した表情になった。

「私、全然知らなかったよー。凄いポケモンなんだね、“ぐらーたん”って!」

「……イーブイ、“グラードン”よ。」

「あ……そうそう“ぐらーどん”ね……。」

イーブイは「てへっ」と苦笑いを浮かべる。

「オレ、その伝説は知ってるんだけど……グラードンがどんな姿をしているかまでは知らなかったな……。」

ヘイガニの言葉を聞き、ふとエリーは疑問を覚える。

そういえば、あたし……何でこの石像のポケモンがグラードンだって解つたのかしら?

一方のイーブイは興味津々で瞳を輝かせながら、グラードン像をあちこちから眺めている。すると、そんな彼女から突然「あっ」という声が聞こえて来た。

「どうしたの?」

その声を聞き、我に返つたエリーと、ヘイガニはイーブイの元へと向かった。

「見て、ここ。何か書いてあるよ?」

イーブイの言う通り、グラードン像の土台には何やら刻まれている。

「これは足形文字だな。」

「ちよつと読んでみるね。」

イーブイは刻まれた文章を読み上げ始めた。

グラードンの命灯しき時、空は日照り、宝の道開くなり

「宝の道……だって!?!」

読み終えるや否やヘイガニが興奮した声を上げた。

「この“宝”って、霧の湖の宝物の事指してるのかな?」

イーブイもまた興奮して、尻尾を振っている。

「でも……グラードンの命を灯す、って……？」

エリーの言葉に全員が沈黙した。ヘイガニは「うん……」と腕組み……ならぬ鉄組みしながら石像の周りを歩き始めた。

「そうだ！ ねえ、エリー！」

イーブイがキラキラと瞳を輝かせて、エリーの方を振り向いた。

何か良い案でも思い付いたのだろうか？

「ちょっとこの石像に触れてみて！ 何か見えるかもしれないよ？」

「……そうね……。」

霧の湖には、あたしの謎を解く鍵があるかもしれない……。

それに少しでも近づけるのなら……

「やってみる価値はあるかもね……。解ったわ。」

そう頷くと、エリーは石像の土台部分に触れてみた。

すると……

来た！

例の強烈な目眩が彼女を襲った。

しばらくそれに耐えていると、頭の中に声のみが響いて来た……。

そうか！ ここに！ ここに………があるんだな！

それは突然そこで途切れた。

今の声は一体……

考えていると、再び目眩がエリーを襲った。

また、なの？ 連続で……

そう思った瞬間、先程と同じ声が頭の中に響いて来た……。

なるほど。グラードンの心臓に日照り石をはめる。それで霧は晴れるのか！

流石だな！ やっぱりオレのパートナーだ！

ここでまた、音声は途切れた。

今の声は……一体、誰の声なの？

何故だか知らないけど、懐かしいような気がして……

凄く、気になる……

「エリー、大丈夫？」

「……え？ あ、ごめん。大丈夫よ。」

自分の聞いた声について考える事に一生懸命になっていたエリーは、イーブイの声で石像に触れてみた本来の目的を思い出した。

「何か、見えた？」

「……ええ。確か……。」

エリーは“声”の内容をイーブイに伝えた。

「グラードンの心臓に日照り石をはめる……かあ……。」

グラードン像の正面に回って良く見てみると、胸の辺りに何かをはめ込む為に出来たような、穴があった。

「あそこにその石をはめ込むみたいだね。」

「……でも……日照り石って何なんだろうね？」

イーブイは首を捻る。

「日照り“石”……“石”……。」

「……もしかして……！」

ねえ、イーブイ？」

エリーが呼び掛けると、イーブイは「何？」と振り向いた。

「あたし達が森の入り口で拾った石……あつたでしょ？」

「あの、紅くてきれいな石？ それがどうし あ！ もしかして

！ あれが日照り石！？」

イーブイも悟ったようだ。エリーはコクリと頷く。

「ちよっとはめ込んでみようよ！」

興奮して尻尾を振りながら、エリーに催促した。

バッグの中から例の紅い石を取り出すと、エリーはグラードン像

によじ登って、窪みにその石をはめ込んだ。

エリーが地面に着地後、しばらく何も起こらなかった。

「もしかして違ったのか」そう思い始めた瞬間、グラードン像の目が光り、ゴゴゴ……と地面が振動し始めた。

「へ……へいへい！？ 一体何が起こってんだよ！？」

自分の知らない間に、事が急展開を見せた事に驚いたヘイガニは、スカイズの下に戻って来て、両手を振り回して訊ねた。

「わ、解らないよ！ 石像の窪みに私達が拾った石をはめ込んだらこうなって。」

「とにかく、ここに居るのは危ないわ。一旦離れましょう！」

3匹は慌ててグラードン像から離れた。

……そして……辺りは光に包まれた。

25話 霧の湖を探して（後書き）

裏話的なモノ

イーブイの聞き間違いについて（笑）

ズバリ、「ルビー」のポケモンに付けていたニックネームの名残です

当時の私は“種族名の頭2文字+たん”（例：ピカチュウ ピカたん）と言うニックネームを付けていたのです。

エリー「……ねえ、その法則に当てはめると」

うん。グラエナとかグラードンって、グラタンになっちゃうんですよえ（笑）

流星にそんなニックネーム付けなかったと思いますけど。

……で、そんな事を今回の話を執筆中にふと思い出したのですが……

だからって、グラードンを“ぐらーたん”に聞き間違えるなんて無理がありましたよね（苦笑）

エリー「書いてから言わないですよ。」

……すみませんでしたm（）（）m

26話 グラードン像の前で(前書き)

良いサブタイが思い浮かびませんでした……orz

26話 グラードン像の前で

霧の湖の探索を始めて3日目。

ヘイガニと合流したスカイズは、あちこちから滝が流れ落ちる湿地帯で、伝説のポケモン・グラードンの像を発見した。

そのグラードン像の心臓に、濃霧の森の入り口で見つけた紅い石日照り石をはめ込んでみた所、辺りが光に包まれて？

エリーは思わずぎゅっと瞑っていた目を開けた。

漂っていた濃い霧は消え、辺りは太陽の光に晒されていた。

エリーはその光に目を瞬く。

「……霧が晴れたわ……。」

その声にイーブイ、ヘイガニも目を開けると、思わず眩しそうな表情を浮かべた。

「お日さまが眩しいね……。」

ふっ、とイーブイは上を見上げた。その途端、彼女は「あっ」と息を呑む。

「え、エリー！ ヘイガニ先輩！ 上を見て！」

言われて、エリーもヘイガニも上を見た。そして、2匹もイーブイと同じように息を呑んだ。

3匹の目線の先には、高台が在った。その高台からは水が、現在自分達が居る湿地帯へと流れ落ちていた。

「……道理で、霧の湖が見付からないはずだわ。」

エリーが言うと、イーブイとヘイガニは揃って「えっ？」と聞き返した。

「だってあたし達、この辺りをウロウロする事しか出来なかったんだもの。」

「へい！ それって、もしかして……。」「
目を見開いて訊ねるヘイガニに、エリーは静かに頷き、宙に在る大地を見上げる。」

「多分、霧の湖はあそこに在るのよ。」

3匹はしばらく黙って、上を見つめていた。

「こ……こうしちや居られない！」

やがて気を取り直したヘイガニが口を開いた。

「オレはベースキャンプに戻って、報告してくる！」

オマエ達は、先に進んでくれ！

……っと、その前に……。」

ヘイガニはハサミを上に向けて“バブルこうせん”を放った。

「これで、他の皆に伝わったよな、きつと。」

じゃ、オマエ達。オレ達も後から行くからな、へいへい！」

それだけ言うと、ヘイガニは濃霧の森へと消えて行った。

「……エリー。私達は先へ行こ。」

「待ちなっ！」

突如響いた声に、先へ進もうとしていたスカイズは思わず振り返る。

そして、自分達を引き止めた声の主が分かると、2匹の表情は陰しくなった。

『ドクローズ……！』

そこに居たのは、スカタンク、ドガス、そしてズバットの3匹
ドクローズだったのだ。

「クククツ。ご苦労だったな、オマエ達。」

「謎さえ解いてくれれば、もう用はねえ！」

「へへっ。霧の湖のお宝はオレ達が頂くぜ！」

この言葉でスカイズは一瞬にして悟る。やはりドクローズに
は、端はなから自分達ギルドに協力するつもりなど無かった事を。

「それが目的だったんだね！ やっぱり遠征の助っ人なんて嘘だったんだ！」

「クククツ。その通りだ。」

イーブイが憤慨したように言うが、スカタンクは鼻で笑い、それをたじろぐ事も無く肯定する。そして、ニヤリと笑うと、ズイと前に進み出た。

「……さて、悪いがオマエ達にはここでくたばってもらおう。」

「そ……そうは行かないよ！！！」

「貴方達なんかに、霧の湖の宝は渡さないわ！」

スカイズとて、ここで引き下がる訳には行かない。自分達を引き止めようとするスカイズを見て、スカタンクは「クククツ」と笑った。

「忘れたのか？ オマエ達。以前対峙した時、オレ様とドガースの“どくガススペシャルコンボ”に敗れている事を。」

「ケツ。つまり勝負は目に見えてるんだよ！」

エリーもイーブイも、うっ、と言葉に詰まる。

確かに以前、自分達は負けた。

エリーに至っては、自分の反応が遅れた事が悔しくて、一晚寝付けなかった程だ。

そんな悔しい思いをした日を、そう簡単に忘れられるはずない。どない。

「……確かにそうだったわね。」

エリーは、口を開き、ドクローズを見据える。

「でも、だからって……今回も同じ結果になるとは限らないわ！」
スカイズが戦闘体勢に入ったのを見て、スカタンク、そしてドガース、ズバットもバカにしたように笑う。

「バカな奴らだな！ へへっ。」

「ケツ。アニキ、さっさとやつつけちゃいましょうぜ！」

ドガースの催促に、スカタンクは「そうだな」と頷くと、“必殺技”を繰り出す準備に入る。それと同時にエリーとイーブイも、技

を放つための力を蓄え始めた。

そして、お互いが同時に技を放とうとした……

その時だった。

「あ〜ん。待つてよお〜！ ボクのセカイイチ〜！」

「！？」

その場に居た全員の動作が止まる。

スカイズ、そしてドクローズの居る湿地帯に、赤くて大きなリング　セカイイチが転がってきて、泥濘にはまって止まった。そして、それを追ってピンク色のポケモン　プクリンもこの場所へとやって来た。

彼は泥濘にはまったセカイイチをヒョイ、と持ち上げると、満面の笑みを浮かべた。

「やっど捕まえたっ　ボクのセカイイチ

キミが居なくなったら……ボクは……ボクは……。」

プクリンの目に涙が溜まる。

「お、親方様……？」

スカタンクが声を掛けた。

その声でようやくプクリンは、スカイズとドクローズの存在に気付いたようだ。

「あれ？　キミたち、こんな所で何やってるの？」

それぞれの顔を見回しながら、不思議そうな表情でプクリンは訊ねた。

「な、何って……。霧の湖の探索です。」

「プクリン親方こそ、何をしてたの？」

間抜けにも受け取れるプクリンの質問にエリーが答え、イーブイは逆に彼に質問を返した。

「お散歩してたの」

「さ、散歩？？」

敵対する二組の力の抜けた声が重なった。そして、この5匹の頭

の中に同じ考えが同時に過る^{よぎ}

ベースキャンピングから数日かかるようなこの場所に“散歩”しに来たの(か)……？

「そしたらね、セカイイチが勝手にボクの手を離れて、転がって行っちゃったから、ここまで追いかけて来たの。」

……ところで、キミ達。」

突然真面目な声に変えて、プクリンはスカイズの方を向いた。

「こんな所でサボってちゃいけないよ？」

ほら。早く探索を続けて続けて。」

急にこのような事を言われ、数秒間エリーもイーブイもぽかんと固まっていた。

だが、せっかく霧の湖があると思われる場所を発見したのだ。

「……エリー。先へ進もう？」

気を取り直したイーブイに促され、スカイズは目の前に見える、高台に向かって歩き始めた。

一方のドクローズは、思わぬプクリンの登場で、最大のチャンスを邪魔された事に内心戸惑っていた。

「あの……親方様。」

スカタンクは声を掛ける。

その声で、鼻歌混じりに「早く報せが来ないかな」と頭にセカイイチを乗せ、くるくる回っていたプクリンはそれを一旦止めて振り向いた。

「どうしたの？ トモダチ？」

「我々も湖の探索に向かおうと思うのですが……。」

こう提案すると、プクリンは困った表情を見せた。

「ええっ？ いいよお。トモダチにそんな苦労はさせられないよお。」

探索はスカイズの2匹に任せて、キミ達はここでボクと一緒に報

せを待つてよ」

そう言つと、プクリンは再びセカイイチを頭に寄せ、くるくる回り始めた。

(み、妙な事になりやしたね……。)

(どうするんですか、アニキ?)

この展開に困惑したズバットとドガースは、ひそひそ声でスカタンクに指示を仰ぐ。

だが、スカタンクもまた僅かに冷や汗をかいている。プクリンの“得体の知れない何か”に飲み込まれてしまったようだ。

数秒間黙つた後、ようやくアニキは自分スカタンク
ドガースとズバットに指示を出す。

(こうなつたら……。下手に出てるのはうんざりだしな。)

プクリンをやっつけて、霧の湖の宝を手に入れる！ それに、奴は貴重な宝を持っているらしいしな。ついでにそれも奪つてやる。クククツ。)

一流として有名なギルドの親方を倒す。

大胆とも無謀とも取れる作戦に、ズバット、そしてドガースはこくり、と唾を呑み込んだ。

(そんじゃ……。やるぞ、ドガース。)

合図を送ると、スカタンクとドガースは、プクリンに気付かれないうちに、ジリジリと忍び寄つた。

(クククツ。これで、かの有名なプクリンも終わりだ！)

食らえ！ “どくガススペシャルコ”

……。そして、スカイズ、さらには仲間のズバットまでも気絶させた“必殺技”を放とうとした、その時だった。

「何してるの？ トモダチ？」

……。辺りに鋭い声が響いた。

一方、先を進むスカイズは……。

「見て！ 洞窟があるよ！」

イーブイが先程発見した、高台の麓にある洞窟を見つけた。

「もしかして、この洞窟があの高台の上へと続いているのかしら？」

エリーが上を見上げながら言う。

「多分ね……。それにしても暑いね、ここ……。」

エリーは炎タイプなので、暑さには耐性があったが、イーブイは汗を垂らし、耳も力なく垂れていた。

「もしかすると、中はもつと暑いかもしれないわ……。イーブイ、大丈夫？」

エリーが気遣うようにイーブイの方を見ると、彼女は力強い瞳で見つめ返し、垂れていた耳もシャキッと立ち上がった。

「大丈夫だよ！」

秘境と呼ばれている場所まで、近付いているかもしれないんだもん……。こんな所でへばってなんか居られないよ！」

「……解ったわ。でも、無理はしないでね？ じゃ、行きましょ！」

こう言うと、スカイズは高温の洞窟 熱水の洞窟へと入って行った。

26話 グラードン像の前で（後書き）

……ちなみに、抜けるのに数日かかった濃霧の森ですが、奥地の方から入れば、入り口ベースキャンプに戻れる設定です。

色々突っ込みたくなるかと思いますが、そこは“不思議のダンジョンだから”と言う事で納得して下さいs（蹴

あと、それからプクリンがベースキャンプから数日かかるような場所に“散歩”しに来たのも、プクリンだからという事で納得しt（殴

……プクリン繋がりについてですが、プクリンの「友達」を漢字からカタカナ表記にしました。

他の話も修正したいと思います。

時間とやる気のある時に、いずれ……

27話 熱水の洞窟（前書き）

前回の更新から、三週間……。ようやく更新です。

本当にすみません……（汗）

無理矢理感が漂ってます（え？）

三週間かけてこの出来かよ、とかいう突っ込みはナシの方向で……

o r z

27話 熱水の洞窟

グランドン像の謎を解き、霧の湖があると思われる高台を見つけたスカイズ。

いざ、先へと進もうとするが、またしてもドクローズの邪魔が入った。

スカイズとドクローズ 両者がぶつかり合うかと思われた、その時。突然やって来たプクリン親方のお陰で、スカイズは先へと進む事が出来た。

そして、スカイズは高台の下にあった洞窟 熱水の洞窟を見つけ、中へと入って行った。

一方のプクリンとドクローズはと言うと……。

「何してるの？ トモダチ？」

鋭く言い放たれたその言葉が、ドクローズの動きを止めた。

プクリンはそんな彼らを真っ直ぐに見つめている。……やがてプクリンは悲しげに口を開いた。

「キミ達は……スカイズに嫌がらせを仕掛けただけでなく、

このギルドをも騙そうとしてたんだね……。」

「なっ……！！？」

ドクローズは思わず声を上げる。

まさか、自分達がスカイズに仕掛けた事をプクリンが知っているとは思わなかったからだ。

プクリンは、自分の手に持っているセカイイチに目を落とし、言う。

「セカイイチはね、生なる木によって味が違うんだよ。

ボク、色んなセカイイチを食べたから、どこの物か解るんだ。

……キミ達がボクにプレゼントしてくれた、あのセカイイチはリングの森の物だった。しかも、つい数時間前まで木に実っていたかのように、とても新鮮だった。」

ここでプクリンは一息吐く。

「それに……頭を下げるよう言われた時のスカイズの表情……すごく、すっごく悔しそうだった……。」

それで、ボク思ったの。

あの日、キミ達もリングの森に行ったんだよね？　そして、スカイズが任務を失敗するように何かを仕組み、キミ達キミたちがその任務を横取りしたんだ。彼女達の信用を失なくし、逆に自分達の信キミたち頼を上げる……という一石二鳥を狙う為に。

だって、そうじゃなかったら、スカイズに頼んだ仕事なのに何でわざわざキミ達がリングの森のセカイイチを採って来たの？」

しばらく沈黙が続いた。

ズバットとドガースは冷や汗をだらだらかいて、プクリンを見ている。

やがて聞こえてきた「クククツ……」と言う笑いが沈黙を破る。

その笑いの正体は、言わずもがなスカタンクである。

「今回の作戦は楽勝だと思ったんだがな。

まさかセカイイチたった一つで、オレ様達のやった事を見抜いてくるとはな……。」

スカタンクはプクリンを睨み付ける。

「それじゃ、皆で行こうとか提案したのも、オレ様達への監視の目を増やす為だったのか？」

オレ様達がスカイズにちよつかいを出させねえように
「ううん。違う。」

スカタンクの指摘に、プクリンは静かに首を横に振る。

「みんなでワイワイ行けば、この遠征は楽しくなる、そう思ったからだよ？」

……その内にキミ達とスカイズの関係が改善すれば良いな、って思ったの。

キミ達の本当の目的が、霧の湖の宝を横取りする事だとは思わなかったよ……。」

プクリンは悲しげに耳を垂らす。

「キミ達の考えは……変えられないのかな？」

それを聞いて、スカタンクは「フン」と鼻で笑う。

「オレ様達は悪の探検隊“ドクローズ”だ。これが……オレ様達のやり方なんだよ！」

ドガース！」

スカタンクはここで子分の1匹、ドガースに合図を送る。

彼らは先程の会話中もずっと“必殺技”の力を蓄え続けていたのだ。

「オレ様達の邪魔をするなら倒すまでだ！」

くらえ！ “どくガススペシャルコンボ”！！！」

そして……それを一気にプクリン目がけて放った。

一方、熱水の洞窟を進むスカイズは……

「たいあたり」!

ピンク色の身体をしたポケモン、ブルーがエリーに向かって来た。つい数分前、ブルー、マグマツグ、カモネギの3匹がスカイズに攻撃を仕掛けて来て、スカイズは3匹と戦っていた。

エリーはブルーとカモネギの2匹を相手にしており、イーブイはマグマツグと戦っている。

ブルーの“たいあたり”を後ろに飛び退いて躲すと、今度は後ろからカモネギが“つつく”で向かって来た。

だが、エリーは6本の尻尾で“だましうち”を決め、そして追撃に“ひのこ”を浴びせる。

これでカモネギは倒れた。残るはブルーだけ。

そう思い、ブルーの方を振り向くと、ブルーは凄い形相でこちらを睨んでいた。

その“こわいかお”に一瞬怯んだエリーは、ブルーがさかさずかさず仕掛けて来た、“たいあたり”をもろに食らってしまった。

「……っ!」

“たいあたり”の勢いで吹っ飛ばされるも、すぐに体勢を立て直す。

そして、口から“ひのこ”より威力の高い炎を一直線にブルーに向かって放った。ここまでの道中で覚えた“かえんほうしゃ”だ。

これでブルーも倒れた。エリーはほっと一息吐く。

「エリー! 大丈夫!?!」

イーブイが近寄って来た。

どうやら彼女の方も勝つたらしい。だが、歩き方が変だ。

「……イーブイ、どこか怪我したの?」

「ちよっと、火傷しちゃったみたい……。」

見ればイーブイの足は赤くなっている。

マグマツグの持つ特性、直接攻撃を仕掛けて来た相手を火傷させる“ほのおのからだ”の効果だろうか。

エリーはすぐにトレジャーバッグから火傷を治すチーゴの実を取り出した。

「ちよつと染みるけど、我慢してね？」

そう言つと、前足を巧く使つてチーゴの果汁を絞り取り、火傷した箇所垂らした。

「……いたっ！」

イーブイは痛そうな表情を浮かべた。だが、それも数秒だけで楽になったような表情に変わる。

「……どう？」

「うん、もう大丈夫だよ！ ほら！」

エリーが訊ねると、イーブイはピョコピョコ飛び跳ね、答えた。

先へ進んでも大丈夫だろう……そう判断し、スカイズは再び上を目指し始めた。

しばらく歩みを進めると、これまでとは違った雰囲気の出た。……何か、妙な所ね。

敵ポケモンの気配が全くしない……。」

「たぶん、ここはダンジョンの中間地点なんじゃないかな？」

エリーの疑問にイーブイが答える。

「中間地点？」

「うん。一部のダンジョンにしかないけど……ポケモンが全く出て来ないから、休憩スペースにもなってるんだよ。」

さらに、元来た道に戻ればダンジョンの入り口に戻れるんだ。」
イーブイの説明に納得し、頷きながら周りを観察する。
その時だった……

グオオオオオツ……

『！！』

突然、微かにだが聞こえてきた音に驚いて二匹は顔を見合わせる。

「イーブイ、今の聞こえた？」

イーブイは首を縦にコクコク振り、答える。

「うん。聞こえたよ。」

何かの鳴き声にも聞こえたけど……。」

グオオオオオオオツ！

もう一度、今度ははっきりと聞こえてきたその音に、イーブイは
ゴクリと唾を飲む。

「この先には一体何が待ち受けているんだろう……？」

でも……頂上まではあと少しだと思っただ。エリー、がんばろう
ね？」

最後の言葉はエリーの方を向いて言った。微かに笑いかけるイー
ブイの顔を見ながらエリーは考える。

あと、少し……。あと少ししたら、あたしの謎が解けるのか
もしれない……。だから、頑張らなくちゃ……。

何が待ち受けていようと……。

そういえば……イーブイにはまだ話してなかったっけ。ベースキャンプに着いてからあたしが感じた、不思議な感覚について……

「イーブイ。」

しばらくの考え事の後、エリーが口を開いた。イーブイは「何？」とこちらを向く。

「少し話したい事があるの。聞いてくれる？」

イーブイが「もちろん」と頷いたのを見て、エリーはここに来てからずっと感じていた事を話し始めた。

「……そっか。エリーはそんな事を考えてたんだね。」

「ごめんね、ずっと黙ってた。」

エリーが謝ると、イーブイは「気にしないで」と返した。そして、エリーの方に身を乗り出す。瞳をキラキラさせて。

「ねえ、エリー！　そういう事なら、ますますこの上に行かなきゃ！　そして、ユクシーに会って、真実を聞くんだよ！」

エリー、行こう！　この上に！」

根拠はない。……なのに、自分の感じた事を信じてくれた、そして自分の事のように一生懸命になってくれるイーブイに、感謝の気持ちは湧き上がる。

「……ええ！」

そして、こう返事を返すとエリーはイーブイと共に、熱水の洞窟の頂上を目指すのだった。

27話 熱水の洞窟（後書き）

《宣伝》

現在、一周年記念企画として、登場キャラへの質問を募っています。

イーブイ

「期間は6月26日までだよ」

詳しくは『探検の記録』を見てね」

それから、感想の制限を無しに設定しました。

ユーザー登録している方以外の読者様もお気軽にどうぞ

28話 湖の番人（前書き）

時間をかけた割には、質が低下するという、不可思議な現象が起こっています

とにかく、更新遅れて申し訳ありません（汗）

28話 湖の番人

熱水の洞窟を進むスカイズ。彼女たちは、中間地点で謎の鳴き声を聞く。

この先に何が待ち受けているのか
不安を抱きつつも、彼女達は頂上を目指す。

頂上に霧の湖が在る事を、そしてエリーの秘密が明かされる事を
信じて。

「ここは……？」

再びダンジョンを進んでいたスカイズは、これまでとは違った雰囲気を持った場所に辿り着いた。

ダンジョンを抜けたのだろうか？

だが、その達成感を感じない。

感じるのは、ピリピリとした、張り詰めたような雰囲気のみ。

「……高台の頂上、なのかな？」

「でも、湖らしい物はないし、それに」

とてつもなく危険な予感がする

皆の視線が目の前のグラードンの像に集まる。

「……これか。グラードンの石像と言うのは……。」「
ペラップが像をしげしげと眺めながら呟いた。

「それにしても……。」「
キマワリが辺りを見回す。

「誰も……居ませんわね……。」「

「ヘイガニ！ 本当に親方様はこっちに来たんだろうな？」

ペラップがグラードン像から目を離し、ヘイガニに訊ねた。
するとヘイガニはハサミを振り回しながら言い返す。

「もちろんだ！ ヘイハイ！！」

濃霧の森から出て来た親方様と、確かにすれ違ったぜ！

スカイズは先に進んでいるはずだから、多分その後を追っている
んじゃないかと思うぜ！」

「そうか……。ん？」

ペラップが何かに気付いて足下を見る。

何事かと首を傾げ、皆も足下に注目する。

ズシンッ、ズシン……ッ

「地面が……揺れてる……。？」

微かな音とともに、地面が揺れていた。

皆がそれに気付き始めると、今度は別の音が聞こえてきた。

グオオオオオ……ッ！

……そう、スカイズも聞いたあの鳴き声だ。

「今の鳴き声は……。！？」

「何だか危険な予感がしますね……。」「

驚く者、怯える者。皆まぢまぢの反応をする。

そんな中、ペラップが指示を出した。
「とにかく我々もスカイズの後を追うぞ！」
そう言うと、ペラップが先頭、他の弟子達は後に続く形で、高台の麓に向かって走りだした。

*

「ここに洞窟の入り口があるぞ！」
グラードン像の前を離れて数分後、ギルドの弟子達も熱水の洞窟の前に辿り着いた。
「ここから上に行けるのか？」
「さあ……それは分からないが、とにかく行ってみよう！」
ペラップの号令とともに、彼らもまた熱水の洞窟に突入する。

「ところで、グラードンってというのは何なんでゲスか？」
洞窟に入って間もなく、走りながらビツパが口を開く。
「グラードンってのは、大地を広げた伝説のポケモン 確かエリィがそう言ってたぜ！」
ヘイガニがエリィから聞いた事をそのまま伝えたと、ビツパを始めとする何匹かが僅かに震えた。
「ひええっ。何だか凄そうなポケモンでゲスね……。」
もしそんなのと戦ったりしたら……。」
「戦うなんてとんでもない！」
ペラップが話に割り込む。
「グラードン相手に戦ったりしたら、まずそのポケモンの命は無いと思った方がいい！」

それほどまでに強いんだよっ！ 伝説のポケモンは……！」

*

「このポケモンは……っ！」
スカイズは自分達の前に、地響きとともにその姿を現したポケモンに目を見開いた。

目の前に立つポケモンは、とてつもなく巨大で、背中の赤い甲羅には黒のラインが入っており、身体の所々にトゲが生えている。その姿形は紛れもなく例の像のポケモンだった。

「これが……本物のグラードン……？」
イーブイがグラードンを見上げながら、畏怖したように呟く。

グオオオオオーッ！！

グラードンが咆哮を上げた。

その声は、スカイズが熱水の洞窟で聞いたのと同じ咆哮^{こえ}。グラードンこそがその正体だったのだ、とすぐに悟った。

グラードンは激しい口調でスカイズに問い詰める。「オマエ達ッ！！！ ここを荒らしに来たのかッ!？」

その迫力にエリーでさえも圧倒されそうになるが、自分達の目的を伝える。まさかそれが相手を激昂させるとも知らずに。

「荒らしになんて来てないわ。あたし達はただ、霧の湖を探しに」

「何ッ!? 霧の湖だとッ!?」

グラードンは再び咆哮を上げる。

「ダメだ! 霧の湖へは行かせはしないッ!!」

我は湖の番人 侵入者は生きては帰さん!! 覚悟しろ!!」

そう言うなり、グラードンは自分の周りにあつた石をスカイズに向かつて放つた。

「……!」

それに気付いたスカイズは、慌てて避ける。

並の威力を大きく越えた“げんしのちから”は、彼女達の居た地面を窪ませた。

もし、あんなのに当たつたら……

そう考えるだけで、二匹の背筋が凍った。

ここは一旦引くべきか。

エリーはそう考えるが、次の瞬間には、グラードンの言葉が頭を過つた。

侵入者は生きては帰さん!!

それは、先に進むにしろ、無事に帰るにしろ、グラードンと戦い、尚且つ勝たなければならぬということ。

「イーブイ……」

目配せすると、イーブイは震えながらも頷いた。

「うん……。エリー、がんばろうね!」

二匹は、大地の神 グラードンに向かつて、駆け出した……。

28話 湖の番人（後書き）

宣伝

一周年企画の締め切りは今週の土曜日までです。

感想からでもメッセージでも、どちらでもOKです。

そして、送って頂いた方の名前は、明かす予定はありませんので、お気軽にどうぞ

エリー

「詳しくは“探検の記録”をご覧ください。」

本編の捕捉説明

何だか恒例となってきましたね、これ……

まずは“テレポート”に関して。

この小説では、

「“テレポート”を使うポケモン、または一緒に移動するポケモン

が、移動したい場所をはつきりイメージしないと“テレポート”できない”という設定になっています。

今回はハイガニのイメージによって、グラードン像の前に“テレポート”した、という訳です。

じゃないと、広大な濃霧の森の先にあるグラードン像まで、あんな僅かな時間では辿り着けませんし、

チリーンは最初から“テレポート”使えば良かったのでは……”という問題になってしまいます。

濃霧の森を広く設定した時に、必至になって考えた、というのは秘密ですからねッ！　どんなキャラだよ

……すみません、ただ言ってみたくなっただけです（蹴

それからプクリンとドクローズの安否については、今後の話で明らかにします。

（本来ならば、今話でドクローズの安否は解るはずでしたが、何か入れられませんでした “何か” って）

こんな長つたらしい説明を読んで下さってありがとうございます！

では、また次回

29話 番人との対決（前書き）

やっとこさ更新できました……。

あれ？ もしかして『スカイズ』の更新、一ヶ月ぶりなのでは……

（汗）

エリー

「（ゴッゴリ）」

……（悪寒）

怒ッテマスヨネ……？（汗だらだら）

エリー

「もちろん」

ひいっ、笑顔が怖いよー！（号泣）

29話 番人との対決

「かえんほうしゃ”！」

グラードンとの戦いの火蓋が切られて間もなく、エリーが炎をグラードン目掛けて一直線に放つ。

だが、グラードンは右手の甲で、それを掻き消してしまった。

「全然効いてないよ!？」

イーブイが焦ったように言う。

「あのグラードンの赤い部分は、自分の身を守る鎧のようになってるのね。」

「……でも、だからって……」

エリーは頭上に煌めく太陽をチラリ、と見た。

現在の時刻は夕方に近い。それなのに、昼間のように煌めくこの太陽は、グラードンの特性“ひでり”によるものだった。

強い日差しの下では、炎技の威力は上がる……のだが……。

“かえんほうしゃ”を弾く^{はじ}くだなんて……

改めて伝説のポケモンの能力の高さを認識させられ、エリーはゴクリ、と唾を呑む。

だが、必ず勝つ、と誓い合った以上はここで諦める訳には行かない。

「遠距離攻撃がダメなら、今度は直接攻撃で攻めるわよ。」

イーブイにそう言うと、彼女はコクリ、と頷いた。

「わかった! “でんこうせっか”!」

素早い攻撃に、グラードンは回避も防御態勢に入ることでもできず、腹部にイーブイが突っ込む。

グラードンの表情が僅かに歪む……が。

「グオオオオオーッ!!!!!!」

「……!?!? うわあっ!?!?」

グラードンが咆哮を上げた途端、イーブイは弾き返されてしまった。

「イーブ……!?!?」

エリーは声を上げる。だが次の瞬間、顔から血の気が引く。

弾き返されたことで尻餅をついているイーブイに、追撃を加えようとグラードンがその凶悪な爪を振り上げていたからだ。

「!!! イーブイ、逃げてッ!!!」

そう叫び、グラードンの動きを止めようと咄嗟に“ふういん”を放つ。……しかし。

「っ!?!?」

微かに動きは止まったものの、相手の身体が大きすぎて効力が弱まってしまったのか、すぐに動きだしてしまった。

そして、ギラリ、と光る爪はそのまま一直線に……。

「イーブイ……!!!」

砂煙が上がる。

先程、イーブイの攻撃を弾き返す時に上げた咆哮。あれは、使った者の攻撃力と防御力を同時に上げる、“ビルドアップ”という技だったのだ。

攻撃力が上がった後であのような攻撃を受けたら……。

「い、イーブイ……。」

エリーが戦いの最中だということも忘れ、思わず呟く。すると……。

「だいじょうぶだよ!」

元気な とは言い難いが、イーブイの声が砂煙の向こうから聞こえてきた。

続けて、かすり傷だらけな上に、砂に塗れたイーブイ本人が姿を現す。

「イーブイ……っ!」

エリーが今度はホツとしたような声で、その名を呼ぶ。

「エリーが少し動きを止めてくれたから、なんとか躲せたよ。ありがとう」

イーブイはにこっ、と微笑む。

「……よかった……。」

そう呟くと、エリーは再びグラードンの方に向き直る。

そう、まだグラードンとの戦闘は終わっていない。

先程、エリーとイーブイが話している間に攻撃の準備を整えていたのだろうか。グラードンはスカイズが彼の方に向き直ると、すぐさま土の塊 “マッドショット” を放ってきた。

「……っ！ “かえんほうしゃ” ！！」

エリーはそれを “かえんほうしゃ” で相殺を試みる。

土と炎はぶつかり合い、押し合いの展開になる。だが、“マッドショット” の方が準備をしつかりと整えてからの発射だっただけに、“かえんほうしゃ” は段々と押されてきた。

「“めざめるパワー” ！！」

イーブイが炎の力に覚醒した“めざめるパワー” で助太刀に入る。“かえんほうしゃ” と “マッドショット” のぶつかり合いに、さらに“めざめるパワー” が加わり、爆発してこれらの技は消滅した。

そういえば、イーブイの“めざめるパワー” のタイプは炎だったわね……。……！ そうだ！ これならグラードンも、もしかすると……

イーブイの“めざめるパワー” を見て、何かを思いついたような表情をするエリー。

だが、ゆっくりと考えている暇はなかった。

「わわっ！？ グラードンがこっちに来るよ！？」

ズシン、ズシン、と地面を揺らしながらグラードンがスカイズの方に向かってきた。

「……！！ イーブイ！ あたしに“めざめるパワー” を放って！」

それを見たエリーは、イーブイにこう言うと、イーブイは一瞬驚いた後、ブンブンと首を振る。

「ええっ！？ そんなこと、できないよー!!」

「いいから早くー!!」

こうしている間にもグラードンは迫って来ている。

イーブイは覚悟を決めて、技を放った。

「め、めざめるパワー」!

放たれた技はエリーに向かって真っ直ぐに飛び、そのまま彼女に当たった。

本来ならば、それはダメージになるはずなのだが、エリーは傷一つ負っていない。その炎の技は彼女の身体へと吸収されたのだ。

彼女の、技の力となるべく……。

「……！ そっか、エリーの特性は“もらいび”……!」

特性“もらいび”……炎タイプの技を受けると、自分の炎技の威力が上がる、という特性だ。

エリーは向かってくるグラードンを見据え、そして技を放った。

「かえんほうしゃ」!

先程よりも太く、威力も上がった“かえんほうしゃ”がグラードンを襲った。

グラードンは一旦止まり、再び硬い甲羅の部分で防ごうとしたが、それは叶わず炎に呑み込まれた。

「グオオ……ッ!」

流石にこれには、グラードンも苦しそうな声を上げる。

だが、そんな状態でもグラードンは反撃を試みた。

尻尾を大きく振り上げ、そして思いつきり地面を叩きつけた。

「きゃっ!?!」

「わわっ!?!」

叩きつけられた地面は振動し、“じしん”となってスカイズを襲った。

威力はさほど無かったが、地面タイプの技を苦手とするエリーに

技の中断をさせるには十分だった。

「エリー、だいじょうぶ!?」

バランスを崩し転倒していたイーブイはブルブルツ、と身震いして立ち上がると真っ先にエリーの身を案じた。

「まあ……なんとか……。」

そう答えた瞬間、ふっ、と目の前が暗くなった。

上を見ると、グラードンがすぐそばまで近付いていた。そして、足をスカイズの真上に上げた。

「!?」

エリーは先ほどの“じしん”で崩した体勢から立て直せていない。

グラードンのような巨大なポケモン“ふみつけ”られたら。

イーブイは思わず目を瞑るが、エリーは真っ直ぐグラードンを見つめて

「“ふういん”……!」

先程はあまり効果のなかった“ふういん”だが、片足を上げた状態で無理矢理動きを止められ、グラードンはバランスを崩し、ズズン……という音を立てて仰向けに倒れた。

「今よ!」

「! わかった!」

グラードンが倒れたことにより起こった震動を数秒耐えた後、エリーが掛け声を掛け、二匹は同時に高く跳躍した。

「“かえんほうしゃ”!」

「“めざめるパワー”!」

そして、グラードン目がけて、灼熱の炎と炎の力を秘めた粒子を同時に放った。

「グオオオオオ……ッ!」

グラードンはその声を上げると、その全身から力が抜けた。

「やっ、た……?」

スカイズがその状況を理解するのに、しばらく掛かった。

そして、ようやく実感が湧いてくるとイーブイがエリーに抱き付いた。

「やったー！ 私たち、伝説って呼ばれてるポケモンに勝ったんだよ！ エリーー！！」

「イーブイ、少し落ち着いて？」

ピョコピョコはしゃぐイーブイをエリーが宥める。

二匹がこうして、じゃれ合っていると……

辺りは突然、強烈な光に包まれた。

「！？」

「な、何！？」

もしかやグラードンを倒しきれていなかったのか。

そう思い、エリーは咄嗟に身構える。

やがて、その光は収まった。

目が慣れてきた二匹が見たのは……

段々と薄れゆく、グラードンの姿だった。

29話 番人との対決（後書き）

今気が付いた。

ぐらたんさん、グオオーツ！ としか言っていない

エリー

「前は普通に喋ってたような気がするんだけど。」

イーブイ

「それより、“ぐらたんさん”って……（、；；；）（

30話 霧の湖（前書き）

わああ、何か長くなってしまった……！

文字数6000超、（私のケータイでは）ページ数6……！

いつも通り、行間詰めて書いているのでもしかしたら読むの大変かもしれませんが……（汗）

エリー

「途中で区切れればよかったじゃない。」

それが出来てたらそうしてます（汗）

まあ、挿絵も3枚入れたので、多少は読みやすくなると……いいです（願望）

エリー

「挿絵描きすぎでしょ（呆）」

いいじゃん、夏休みなんだから。

30話 霧の湖

『グラードン!?』

霧の湖の番人 大地の化身、グラードン に勝利したスカイ
ズ。

だが、その直後、今にも消えそうなグラードンの姿を見て、二匹は声を上げる。

「ど、どどどどうなってるの!? わ、わわわ私たち何かしたかな!?」

イーブイは動揺しすぎて口が上手く回せていない。

「わからないわ……。」「
エリーもまた、顔には出ていないものの、先程まで戦っていたグラードンの姿が、今や半透明なことに動揺していた。

……そうこうしている間に、グラードンの姿は完全に消滅^きえてしまった。

「わーーーーーっ!!!? グラードンが消えちゃったよー!!!?」

「ちょ、イーブイ、重い……きゃっ!」

驚きと不可解な現象への恐怖のあまり、イーブイはエリーに飛び付き、その重みで二匹はまとめて転倒した。

> i 1 0 6 4 1 — 9 6 7 <

その時……。

「今のは本物のグラードンではありません。」

どこからか声がした。

イーブイはさらに驚いて飛び上がり、エリーは辺りを見回す。

「!? 誰!?」

「私はここを守る者……。この先へ通す訳には行きません。すぐに立ち去りなさい。」

その声は、低く脅すような声で言った。

エリーはその見えない存在に、慌てて訴えた。

「ちょっと待って！」

あたしたち、悪いことしにきた訳じゃないのよ? 少し……確かめたいことがあるだけなの!」

「……確かめたいこと?」

“声”の脅すような響きが若干和らいだ。

「うんっ! そうだよ!」

シヨックから立ち直ったイーブイが、合いの手を入れる。

「あたしたちは探検隊だから……。宝とか手に入れられたらそれは嬉しいけど……。でも、それが誰かの迷惑になってしまうのなら、全然要らないわ。」

「私たち、ここまで来ただけでもすっごく嬉しいんだよ? ……」

でも、ただ一つだけ、どうしても知りたいことが……。」

イーブイの声は尻すぼみに消えて行き、しばらく沈黙が続いた。

スカイズが「やはり帰るしかないだろうか」と少し諦めかけた頃、意外な答えが返ってきた。

「分かりました。貴女たちのこと……信じましょう。」

その言葉の直後、スカイズの目の前に光が現れ、やがて……一匹のポケモンが姿を見せた。

そのポケモンは、頭が黄色である以外は、大部分が灰色で、身体からは二本の長い尻尾が生えている。額と尻尾の先には宝石のようなものも付いていた。

ポケモンは、口を開いた。

「初めまして。私はユクシー。霧の湖の番人です。」

『ゆ、ユクシー!?!』

エリーとイーブイはポケモンの名に驚いて、同時に声を上げる。何せチリーンの話した伝説に出てきた、スカイズが霧の湖を指す原動力となったポケモンが目の前にいるのだ。

「はい……。私は霧の湖で“ある物”を守っているのです。」

「“ある物”?」

エリーが首を微かに傾げ、聞き返す。

「貴女たちを信じて……。今からその霧の湖にお連れします。……着いて来て下さい。」

ユクシーはふわり、とさらに奥へと進んで行った。

エリーとイーブイは戸惑ったように顔を見合せたが、ユクシーの後に着いて行くことにして、さらに奥へと進んで行った。

しばらく進むと、ユクシーは止まり、エリーたちの方を振り向いた。

「ここが、霧の湖です。」

もう夜なので少し見づらいかもしれませんが……。」

『わあ……!』

エリーとイーブイの口から感嘆の声が漏れる。

二匹の目の前には広大な湖が広がっていて、その真ん中は青緑色に光っている。

「こんな高台に、こんな湖があったなんて……。」

「ここは地下から水が湧き出ること、このような大きな湖になっているのです。」

ユクシーが穏やかな声で説明する。

「へえ、そうなんだあ……。」

それで、えつと……。ユクシーさん? キミが守っている物って何なの?」

イーブイが湖から目を離して、ユクシーを首を傾げて見ながら訊ねた。

「……湖の真ん中に光る物が見えるでしょうか。」

「ええ。見えるわ。」

「あの、青緑色の光のことだよな？」

ユクシーの質問に、エリーは頷きながら、イーブイは湖の光を前足で示しながら答えた。

「前に行つてよく見てみて下さい。」

ユクシーに促され、エリーとイーブイは湖に近づき、青緑色の光をじつと見つめた。

あれは……？

光の中に、歯車らしき物が見えた。

それを見た瞬間、エリーは心が何故か騒めくのを感じた。

何でかしら……。あれを見ると、何だか……ドキドキする

……。あれは……一体何なの……？

「わあ！　すごくきれいだね！」

魅入られたように歯車を見つめていたエリーは、イーブイの声で我に返る。

イーブイの瞳はキラキラ輝いていて、尻尾はピコピコ動いていた。

「ねえ、ユクシー。あれは……一体何なの？」

エリーは、純粹に喜んでいる様子のイーブイを見て微笑んでいるユクシーの方を振り向き、訊ねた。

ユクシーの表情が僅かに緊張した面持ちになる。

「あれは……」

時の歯車、です。」

『ええっ……！？』

驚いて二匹は声を上げた。

時の歯車。

歯車がある地域の時を守っているといわれている、とても重要な宝物。そして同時に取ると時が止まるともいわれている、恐ろしい宝物でもある。

「時の歯車……あれが……？」

「そうです。」

そして、私はあの時の歯車を守るためにここにいるのです。

これまでに、ここにやって来た者がいましたが、その度に「

ユクシーの額の宝石が輝いた。

すると、先程消滅きえたはずのグラードンがユクシーの隣に姿を現した。

「！！？」

「わー！ー！つ！！？　ぐぐぐぐぐ……グラードン！！？」

その突然の出現に、イーブイはズザザツツという音を立てて後退りし、エリーも驚いた表情を隠しきれなかった。

「お、落ち着いて下さい！　さっきも言いましたが、これは本物のグラードンではありません。」

「ふ、え？」

「！　そっか……。」

ユクシーの言葉に、イーブイはポカンとした表情で、気の抜けた声を出す。

一方のエリーはというと、一匹納得して呟いた。

グラードンが出現する直前、ユクシーの額の宝石が輝いたのを思い出したのだ。と、いうことはつまり。

「貴方の“ねんりき”を使って作り出した、偽物ね？」

その言葉にユクシーはこくり、と頷く（イーブイはホッと胸を撫で下ろした）。

「その通りです。」

ここに誰かが侵入する度に、私が作り出したグライドンの幻影で
追い払ってきました。

中には、貴女がたのように幻影を打ち破る者もいましたが、そう
いった者たちには、今度は私が記憶を消す」

ユクシーはここで一旦、言葉を区切った。その表情はどこか切な
げだ。

「そうすることで、この霧の湖を　時の歯車を守ってきたの
です。」

「ユクシーが記憶を消す、という噂は本当だったのね……。」

エリーが呟くと、イーブイがその中の言葉に怪訝そうな表情をす
る。

「記憶を、消す？」

あーっ！ エリー！　納得してる場合じゃないよ！？　“あのこ
と”きかなきゃ！」

目の前に広がる霧の湖や、時の歯車で本来の目的をすっかり忘れ
ていた。

エリーは「そうだった！」と言うと、ユクシーに話し掛ける。

もしかしたら、自分の過去あたしが判るかもしれない

「あの、ユクシー？　さっき言った訊きたいことなんだけど……。」

「何でしょう？」

ユクシーは首を傾げ、先を促す。

エリーは真剣な眼差しでユクシーを見据え、話を続けた。

「あたしはエリーって言うの。」

今はロコンの姿をしてるけど、元は……　人間、なの。」

「えっ……？　人間？」

ユクシーは当然驚いた表情を見せ、訊き返す。

エリーはコクツと頷き、話を続けた。

「そうなの。」

「だけど……人間の時の記憶を覚えていないの。」

だから　もしかして、あたしはここに来たことがあって、貴方

に……えっと、記憶を消されたんじゃないか、って。」「
心臓が普段より早く動いているのを感じながら、エリーはユクシ
ーに訊ねる。

「ユクシー……ここに、そんな人間がやって来たことはない？」

ユクシーが考え込むのを、エリー、そしてイーブイもまた固唾を
呑んで見ていた。

やがて、ユクシーが口を開く。

「いいえ……ここに人間が来たことは一度もありません。」

その言葉に、エリーもイーブイも揃って肩を落とす。

「……それに、私が消すのはこの霧の湖に来たという記憶のみ。全
ての記憶を消す力は……私にはありません。」

「えっ、そうなの？」

イーブイは思わず聞き返したが、その後で口を塞ぐ。ユクシーが
僅かに哀しそうな表情を浮かべたからだ。

「どうやら、“記憶を消す”という部分だけが噂として広まってし
まっているようですね。」

……まあ、その方が霧の湖に近づく者が少なくて良いのですが。
言葉とは裏腹にユクシーの声は、まだ哀しげだった。

「えっと、その……疑ってごめんなさい。」

エリーが謝ると、ユクシーは慌てて両手をブンブンと振った。

> i 1 0 6 4 2 — 9 6 7 <

「え、い、いいんです。こちらこそ貴女たちのお役に立てず……。」
その後でユクシーは微笑を浮かべて言う。

「解るといいですね。貴女の人間の時の記憶。」

「……ありがとう。」

ユクシーからの励ましに、エリーは微かに笑ってお礼を述べた。

「時の歯車かあゝ 残念」
突然響いたその声に、驚いてエリー、イーブイ、ユクシーは咄嗟に振り向く。

「さすがに時の歯車は持つて帰る訳には行かないもんね」
そう言いながらこちらに歩いてくるのは、紛れもなく……

『プクリン親方!?!』

エリーとイーブイは揃って声を上げた。

驚いている三匹を余所に、プクリンは見慣れない顔　ユクシーを発見し、早速挨拶をする。

「やあつ　初めまして、ともだちともだち」

ユクシーはプクリンのテンションに押され、固まっている。

「わあつ　キミ、凄いなゝ　ともだちともだち」

プクリンの興味が幻影グラードンに移ったところで、ユクシーはハッと我に返り、スカイズに訊ねた。

「あの……、この方は?」

「プクリン親方だよ。私たちが修行しているギルドの親方様なんだ。」

イーブイが紹介した。

「……不思議な方……ですね……。」

グラードン(の幻影)にも物怖じせず、むしろフレンドリーに接しているプクリンに啞然としながら、ユクシーがポツリ、と呟いた。
スカイズもこの意見に『まあね……』と同意した。

「あ、そろそろ時間ですね。」
不意にユクシーが呟いた。

「何の?」

そう訊ねようとしたところで、湖からドシャアアツという大きな音がした。

『わあ……!?!』

エリー、イーブイ、そしてプクリンもその光景に目を奪われた。
湖の真ん中　ちょうど時の歯車が浮かんでいる、その真下から
巨大な間欠泉が吹き上がったのだ。

それは内側から時の歯車の青緑色の光で照らされて、とても美しいものだった。

しばらくその光景に見惚みとれていると、後ろから羽音が聞こえてきた。

「ひゃっ……。」

振り向いたエリーが見たのは、熱水の洞窟から飛んで来るバルビートとイルミーゼの大群。

苦手な虫ポケモンの大群にエリーは思わず目を瞑ってしまった。

「ねえ、エリー。目を開けてみなよ！　すっごくきれいだよ！」

イーブイに促され、エリーは恐る恐る目を開けた。

「……！！」

一方、他の弟子たちは

「ふう、やっと着いたですわ。」

熱水の洞窟を抜け、先程サイズがグラードンとの戦いを繰り広げた場所まで来ていた。

熱に弱いキマワリやグレッグルは少しへばっている。

だが、そこでダグトリオが一喝する。

押して行く。

ここでようやく、グランドンにはかり目が行っていた弟子たちは霧の湖に気付いた。

『おおお……っ！』

彼らから感嘆の声が一斉に沸き上がった。

先程吹き上がった間欠泉にバルビートたちの光が加わって、それは美しい光景になっていた。

「あつ、スカイズ！」

湖のすぐ側そばで、この光景を眺めているスカイズを見つけ、皆はその周りに集まった。

「オマエらも、ここにいたんだな！」

「うんっ！」

二匹は揃って元気良く頷いて見せる。

「それにしても、綺麗な光景ですね……。」

「本当にゲスね……。」

ギルドの皆もこの光景が気に入ったようだ。皆、無言で魅入っている。

> i 1 0 6 4 3 | 9 6 7 <

「……エリー、ちゃんと見てる？」

イーブイがいたずらっ子みtainな微笑を浮かべて訊ねてきた。

「もう……ちゃんと見てるわよ。」

対するエリーは、僅かに口を尖らせて答える。イーブイは「ごめんごめん」と謝ると、湖を見て言った。

「きれい……だね。」

「ええ……。」

「私、今すっごく幸せだよ……。」

エリーは湖から視線を外し、イーブイを見る。イーブイの瞳はこれ以上はない程輝いていた。

「みんなと一緒に、こんな……こんなきれいなものが見れて。」

霧の湖の宝つて、時の歯車じゃなくて……きつとこれなんだよ！」

エリーは微笑んで「そうね」と言った。そして、再び湖に視線を移し、ぼんやりと考えた。

あたしは、ここに来たことはない……。なら何故、この場所を知っていたのかしら……。それに、時の歯車……。何であれを見た時……。あたしはあんなにドキドキしたのかしら……？

しばらく考え込んでみたが、考えても仕方のないことだと結論付け、皆と一緒に心行くまで目の前の風景を眺め続けたのだった。

*

「色々とお騒がせしました

今日は本当に楽しかったよ　　ありがと、ともだちともだち

「
間欠泉の吹き上げも終わり、皆がベースキャンプに戻る時間が訪れた。」

現在はお世話になったユクシーに、別れの挨拶をしている。

「私は……貴方たちの記憶は消しません。貴方たちを信頼しているからです。」

ですので、このことは誰にも言わないで下さい。」

“信頼”という言葉に、全員の気が引き締まった。

「うん、分かってるよ、ユクシー。」

最近、時の歯車が盗まれる事件が起きたりしてて物騒だしね。

「このことは誰にも言わない。プクリンのギルドの名にかけて、ね。」

プクリンが弟子たちの顔を一人一人見回すと、それぞれが力強く頷いた。

「ありがとうございます。」

「……皆さん、お気を付けて。」

「うん。ユクシー、元気だね！」

「さよなら。」

各々、ユクシーと挨拶を済ませると、霧の湖を後にした。

こうして、ギルドの遠征は幕を下ろした。

翌日の朝、“プクリンのギルド”はベースキャンプを発ち、トレジャータウンへの帰路に着くのであった。

30話 霧の湖（後書き）

ユクシーは、本当は美しい霧の湖を色々なポケモンに見て欲しいのではないか……。
こんな妄言 想像が頭をよぎったので、ちょっと取り入れてみました。

エリー

「確かに綺麗だったものね……。」

イーブイ

「それにしても“遠足”はこれでおしまいかあ……。」

……イーブイ、“遠足”じゃなくて“遠征”だから。

31話 ギルドの休日（前書き）

や、やっと完成した……！（息切れ）

エリー

「おそい（怒）」

もう怒ってるの隠そうともしないし……orz
本当にすみません……。

約9カ月経ってますが、物語の中では遠征から帰ってきた直後です。

あと、イーブイが爆弾発言をしています、覚悟してお読み下さい。

31話 ギルドの休日

「起きろおおお!!! 朝だぞおおお!!!」

突然の大きな声に、エリーはビックリして飛び起きた。

寝惚けた頭は状況を理解するのが遅く、数秒経った所でようやく把握した。

そうだ……帰ってきたんだっけ

エリーたちプクリンのギルドの面々は、遠征を終え昨日の夜遅くに帰ってきた。そして、直ぐ様寝室に向かい、あつという間に眠りについたのだが……流石に疲れていたらしく直前まで熟睡していた。

普段だったら起こされる前に起きてるんだけどな……

ギルドの目覚まし係・ドゴームの大声は、戦闘の際の武器にもなる為、とにかく凄まじい。

その為、普段は彼が起こしに来る前に起きて、耳を塞ぐなりしているのだった(それでも凄まじいことには変わらないが、やらないよりはマシ)。

だが、そんなドゴームの大声を持ってしても起きないポケモンが1匹……。

エリーはドゴームに「おはよう」と短く挨拶すると、そのポケモン イーブイを起こしに掛かった。

「イーブイ、朝よ、起きて。」

そう言っってイーブイの足の裏を前足で器用に撥る。

するとあの騒音でも起きなかったイーブイから反応が帰ってきた。

「ふはっ、ふふふふ……あははははっ!!」

イーブイがヒーヒー言い始めた辺りでエリーは撥る前足を止め、挨拶する。

「おはよ。」

「うん……おはよう、エリー。」

そう返すイーブイの目には笑いすぎの涙が光っている。

「朝礼始まるから早くしろよ。」

イーブイも起きたのを確認すると、そう言い残しドゴームは部屋を出ていった。

「ふあ、まだ眠いよ……。」

朝礼の場へ向かう道すがら、目は覚ましたが頭は醒めていない様子のイーブイがあくびをしながら言った。その足取りも何となく覺束ない。

「こんなんで今日、探検行けるかなあ?」

あのペラップがそう簡単に休ませるはずがない。そう予想を立てながら朝礼に向かった。まさか、その予想を裏切る展開が待っているとも知らずに。

「えー、まずは皆 遠征ご苦労だったな」

今日の朝礼はやはり遠征についての話から始まった。皆も疲れて眠いのか長つたらしいペラップの話は眠気促進効果をもたらしていた(みんな欠伸ばかりしている)。終いにはずつと眠たそうにしていたイーブイがエリーにコテン、と寄りかかって眠りに入ってしまった。

「ちょ、イーブイ!!」

密かに慌てるエリーだったが、ペラップには気づかれていないようだ。

「えーと、では最後に今日の予定だが、

皆遠征で疲れたらうから今日1日休みにするよ!」

ペラップがまさかそんなことを……と驚いて顔を上げる。

プクリンの提案をそのまま伝えただけなのだろう。彼の音符の形をした顔には「一日分の儲けが減って残念です」と書かれてあるようだった。

もつとも、周りは「休み」という単語に浮かれてそれには気付いていないようだが。

「さて、どうしようかしら。」

寝室でエリーが一人呟く。

傍らには本格的に寝入ってしまったイーブイ。

朝礼の後、やっとの思いでここまで運んできたのだった。

そんな思いをしなくても起こせば良かったのだが、その気持ち良さそうな寝顔を見ると、どうしても起こす気は消え失せてしまった。

「まあ……イーブイ、人一倍張り切ってたし……いいか。」

初めての遠征に誰よりも張り切っていたイーブイ。その張り切りが、遠征が終わりホッ、としたことで一気に疲れに変わったのだろう。一探検家として成長を続けているとはいえ、イーブイ自身はまだ幼い部類に入る。無理もないだろう。

休みだし、ペラップに怒られることもないだろうし……ということでもう少し寝かせてあげることにした。

残る問題はイーブイが起きるまで何をしているか、だった。

普段のハードスケジュールに慣れてしまうと、何もしないというのも反って落ち着かない。

「そうだ。ガルーラさんの所に行こうかな。」

ふとここで、遠征の間に道具が溜まっていたのを思い出す。

イーブイが起きるまでその荷物を整理してればいいだろう。そう思ったエリーはその旨を記した置き手紙を残し、トレジャータウンに向かった。

*

「うう、よく寝たあ！」

ふああ……と大きな欠伸をし、イーブイが目を覚ました。

「あれれ？　ここ弟子部屋だ？」

朝礼の時に寝ちゃったような……と冷や汗をたらし、それと同時に場所が変わっていることにも疑問を抱く。

「エリーが運んでくれたのかな……ん？　あれなんだろう？」

ここで、弟子部屋の地面に落ちていた一枚の紙に気付く。拾ってよく見てみると、何やら文字が書かれてあった。

「えっと……先にトレジャータウンに行っています』……あつ、エリーからの手紙だ。」

ふと、室内が嫌に明るいことに気付いた。

「あれ？　そういえば、今……何時なんだろう？」

慌てて窓に駆け寄り、外を見る。もう既に太陽は真上。つまり……

…

「お、お、お昼だあ……っ！！！！」

イーブイは外に飛び出して行った。

「はあ、はあ……お、お待ちせ……。」

息咳切って辿り着いた先はガルーラの倉庫。

ギルドを飛び出したイーブイは、トレジャータウンを駆け抜け、この倉庫の前で店主のガルーラと喋っているエリーを見つけたのだ。
「ふふ、随分よく寝てたわね。」

「もうお昼よ」とからかうように言うと、イーブイは真っ赤になつて俯いてしまった。

それを見て「ごめんごめん」と謝ると、言葉が続けた。

「気にしなくていいのよ。あたしが寝かせておいてあげたんだから。」

「疲れは取れたかい？ イーブイちゃん。」

今まで二匹のやり取りを笑顔で眺めていた、倉庫の店主、ガルーラが訊ねた。

「あつ、ガルーラおばちゃん！ こんにちは！ それと……ただいま！」

イーブイは元気良く挨拶をした。

「うんうん。すっかり元気みたいだね。」

「……遠征は楽しかったかい？」

「うん！ とーつても！」

「それは良かった。」

そのまま、遠征の思い出を話し始めたイーブイをガルーラは微笑みながら見つめる。

自分を慕ってくれる幼いイーブイを心配していたガルーラは、その元気な姿を見て、ホッと一安心していた。

イーブイの遠征報告が一段落ついた所を見計らって、エリーは口を挟んだ。

「ねえ、イーブイ。これからちよつと行くところあるんだけど……どうする？ まだ話してる？」

「……あつ、私も行くよ！」
慌てて立ち上がった。

「それじゃ、失礼します。」

「またね、ガルーラおばちゃん！」

「ああ、またおいでね、エリーちゃん。イーブイちゃん。」

二匹はガルーラに挨拶をし、倉庫から離れた。

「それで……行きたいとこってどこ？」

エリーより少し遅れて歩くイーブイが訊ねた。

「ネイテイオ鑑定所よ。」

「かんでいじよ??？」

「ほら……ツノ山で貰った、どうやっても開かない宝箱があったでしょ?」

遠征への道中にあつたツノ山。そこで悪事を働いていた変な三人組を追い払った時に、お礼に貰ったのがその宝箱だった。

荷物になるから、と遠征先から倉庫に送ったのを先程、荷物整理をしていた時に発見したのだった。

そこで、ガルーラに宝箱を開ける方法を相談してみた所……

「その鑑定所は“宝箱を開けること”が仕事なんだそうよ。」

「へ、へえ。変わったお仕事だね。」

「確かにね。」

ふと気がつけば二匹の周りにはメインストリートの賑わいになくなっていった。

ガルーラによれば、そのネイテイオは結構な変人で、店も人通りポケモンの少ない町外れに構えているらしい。

「確かこの辺って聞いたんだけど……あつ、あれかしら。」

木の上に、ひよっこりと緑色の屋根が見える。

「他に建物なんてないもんね。行ってみよーよ!」

二匹は屋根の見える方へ走って行った。

「……うわぁ……。」

これが鑑定所の前に立ったイーブイの第一声だった。

店の前には大きな宝箱……はともかくとして、濃い顔をした人形がごてごてと置いてあつた。

「何ていうか……変人って言われている理由がよく分かるお店ね。」

店をまじまじと見ていたエリーが感想を述べる。

「お店の人はいないのかしら？」
ネイティオ

見た所、店にポケモンがいる気配がない。

「あっ、あの！ すみませ〜ん！！」

イーブイが試しに中に向かって呼び掛けてみる。

しかし、反応がない。

「…………留守、かしら？」

「かも

何か用…………？」

「うわああああっ！！？」

イーブイが「かもね」と言おうとすると、突然後ろから声が聞こえ、二匹はびつくりして飛び上がった。

エリーが慌てて振り返ると、緑色の顔とジト目が自分の顔から僅か数センチの所にあった。

い、いつの間にこんな近くに

更なる驚きと共に、後退りして距離を取った。

「えっと、あの、貴方がネイティオ？」

「ん。」

ネイティオがかなり短い返事で質問を肯定した。

「この宝箱を開けてくれるって聞いて来たんだけど…………は？」

エリーが宝箱を取り出すと、ネイティオがずいっ、と左の翼を差し出した。

「150ポケ。」

「あ、ああ。お金ね…………。」

独特すぎる雰囲気には押されつつもはい、と150ポケをその翼に乗せる。

イーブイはイーブイで先程のドッキリと、ネイティオの持つオーラに慣れることができず、口をポカンと開けたまま声を出せずにいる。

「じゃ、開けたげる。」

それだけ告げると、ネイティオは店先のガラクタだらけの中の少

しだけ空いたスペースに移動した。

「クワ……クワワ……」

ネイティオの念力サイコパワー徐々に集まり、そして……

「クワアアアアアーツ!!!」

雄叫びと共に一気に宝箱に向かって放たれた。

「はい。」

そう短く言うと、左の翼に宝箱から取り出した小瓶を乗せて差し出した。

エリーが慌てて前足を出すと、その上にポトリ、と落とした。瓶の中には何かの毛が数本入っていた。

「それ、キュウコンの毛。」

「キュウコンの毛……?」

ようやく立ち直ったイーブイが小瓶の中を覗き込みながら疑問符を浮かべた。

「ん。キュウコンとその進化前のロコン共通の専用道具。」

防御力が上がるよ、との説明に二匹は『へえ……』とまじまじと毛を見つめた。こんな毛にそんな効果があるとは驚きだった。

小瓶の中へエリーの興味が完全に向かっていると、不意に巻き毛を軽く突つかれた。

振り向くとまたしても顔のすぐ側にネイティオの顔があった。

「!!!?」

エリーは慌てて適度な空間を作った。

「見つけたらまた来て。」

『は、はい……』

最初から最後までネイティオワールドに吞まれっぱなしだった。

「何だかふしぎなポケモンだったねえ。」

メインストリートの賑わいに戻った所でイーブイが口を開いた。

「ええ……。つてかパーソナルスペース狭すぎ……。」「
何度驚かされたか……。と不機嫌な様子で呟く。
それに苦笑いを浮かべると、イーブイは別の話題へと方向転換し
た。」

「ねえねえ、これからどこ行くっ?」

「えっ、ああ、そうね……。そうだ!」

エリーはバッグの中をガサガサと漁った。

「ねえイーブイ。これなくんだ?」

「あっ、グミ!」

エリーが取り出したのは赤と白のグミ。それぞれエリーとイ

ーブイの好物のグミだった。

「パッチールのカフェで飲み物でも飲みましょうよ!」

「さんせ〜い!」

エリーの提案にイーブイは尻尾を大きく振って賛成した。

「エリー! イーブイ!」

パッチールのカフェに着くと、誰かに名前を呼ばれた。

視線を向けると、キマワリとチリーンがこっちこっち、と手を振
っていた。

「キマワリ先輩! チリーン先輩!」

エリーとイーブイはそのテーブルに向かう。

「アナタ達も何か飲みに来たんのですの?」

「ええ。さつき道具を整理してたら見つけたから……。」「

エリーは先程のグミを取り出してみせる。

「私達はさつき飲み終わっただんですけど、せっかいですからお話で
もみましょうか。」

チリーンが笑顔で提案する。その瞳には何か企みを隠していそう
な、危険な光を放っていた。

「うん、いいよ〜 エリーもいいよねっ?」

「え……ええ、いいわよ。」
だが、そんなことには気づかないイーブイが賛成したことによつて、エリーも首を縦に振るしかなかった。

*

「ところで……好きな人とかいないんですの？」
「……ぶつ。」

グミを飲み物に変えてもらい、しばらくエリーとイーブイはキマワリ、チリーンと他愛のない話をしていた。

そこで突然のキマワリからの質問。しかも内容が内容なだけに、エリーは思わず吹き出してしまった。

先程、チリーンから誘われた時に感じた嫌な予感はこちらだったか。そう簡単には引き下がってくれそうもない先輩二人を見て直感した。「エリー、だいじょうぶ？」

「うん。まあ……。で、突然何ですか。」
イーブイに背中をさすられながら、ジト目でキマワリとチリーんに訊ねる。

「だって気になるじゃないですか エリーさんだってそういう相手がいっても可笑しくないお年頃でしょう？」

せっかく女の子だけなんだからじっくり話しましょ

語尾に音符をつけて言った。キマワリ曰く、チリーンにとって恋バナが活力源とのことだった。

「残念ですけど、じっくり話すことなんてないですよ。だって好きな人なんていな」

「えー！ いないのー!!!?」

そう大声で口を挟んだのはチリーン……ではなく、キマワリでもなく、イーブイだった。

三匹が一斉にイーブイの方を向く。

「エリー、好きな人いないの？　じゃあ、私は？」

「……は？」

突然の爆弾発言にイーブイを除く三匹は思わず固まる。

そのことには一切気付かないイーブイが涙声になりながら続ける。
「私、エリーのこと大好きだもん。キマワリ先輩のことも、チリーン先輩のことも、ギルドのみんなのことも、トレジャータウンのみんなのことも大好きだもん。」

そういうことか。と、皆納得しホツと胸を撫で下ろす。

自分が爆弾を投下したことに全く気づいていないイーブイだけが、瞳から涙を溢し続けていた。

勘違いし続けているイーブイの頭をぼんぼん、と頭を撫でる。

「大丈夫、大丈夫。私もイーブイのこと大好きよ。」

結局、このことで恋バナはうやむやになり、1日限りのギルドの休日は終わった。

そして夜が明けて、次の朝。

「今日からギルドは通常営業だよ　皆、頑張っ行ってこーっ！」

『おーっ！……!』

ペラップの号令と共に遠征前と同じ日常が始まった。

「何！？ 足形が分からないだど！？」

探検に行こうとしていたギルドの皆が、不意に聞こえたドゴームの大声に動きを止める。

デイグダが足形を判別できなかったことはない。意外な状況に皆が見張り穴の近くに集まった。

「足形が分からないってどういうことだよ！！？」

ドゴームの怒声が飛ぶ。

「だってえ、分からないものは分からないんだもん……。」

デイグダが困ったように言うと、上から何やら別の声が聞こえた。

「……え？ 親方様に会いたいんですか？ お名前は……。」

一瞬の間。次の瞬間、デイグダの声は叫び声に変わった。

「お名前は、ヨノワールさんっ！！？」

31話 ギルドの休日（後書き）

エリー

「……確かに爆弾だったわね。」

イーブイ

「？ 私、変なこと言ったかな？」 本気で分かってない

もちろん二人は友達として大好きなので勘違いしないで下さいね（笑）

エリー

「だったら誤解を招くような会話入れないでくれる？」

チリーン

「せっかくのガールズトークもうやむやにされましたし……（超笑顔）」

作者&エリー

「うおっ!?!?」

チリーン

「今からでも遅くないです！ さあ、今からお喋りしましょうっ!」

エリー

「話すことなんてないって言ったでしょ〜!?!?」 連行

イーブイ

「チリーンさんが怖い……（汗）」

うん……。

最後に、ネイティオさんの所にあつた濃い顔の人形は

千葉の某テーマパークの海の方にある、恐怖のホテルにいるお人形
さんをイメージして頂ければ。

そしてネイティオさんは左利きなイメージ。

いつになく後書きがめっちゃくちゃ

32話 ヨノワール(前書き)

ついに

ヨノワールさんが本格登場だぜひゃっふーい／＼。。(ノ！！

エリー・イーブイ

『作者さんが壊れた……。』

32話 ヨノワール

その日、ギルドの地下二階は騒めいていた。

弟子たちが群がるその中心には親方であるプクリン。そして向かい合い、話をしている見知らぬポケモンがいた。

彼の名はヨノワールというらしい。つい先程、見張り穴の上に立った時、デイグダにそう名乗ったのだ。

その瞬間から、ギルドの中は大騒ぎになった。ペラップの一喝により、多少落ち着きを取り戻したものの、今またこうしてヨノワールを興味津々で見つめている。

何故、皆がこのような反応を見せているのか理解できないエリーは、近くにいたキマワリに聞いてみることにした。

「ねえ、ヨノワールって……一体何者なの？」

「何ッ!? オマエ、ヨノワールさんを知らないのか!？」

反応したのはドゴームだった。話し掛けたキマワリも遅れて振り返る。

驚きの視線に晒されて、多少の居心地の悪さを覚えながらもエリーは「ええ。」と肯定する。

「知らないわ。見たことも聞いたこともない。……イーブイは？」
「私も知らないよ?」

イーブイに質問を振ると、きよとんとした顔でエリーと同意見だと言った。

「まあ、知らないのも無理ありませんわね。有名になったのはつい最近ですもの。」

「有名?」

「ええ。突如、彗星の如く現れた凄腕探検家として有名ですわ。」

これで、来訪時の大騒ぎにも、今現在、ヨノワールを見つめる皆の熱っぽい視線にも納得した。

有名人ともなればこの反応は当然だろう。

「でも、凄腕ってどんな風に凄いの？」

エリーが訊ねる。

「ああ……まず特徴的なのは、チームを持たず単独で行動することだ。」

「たった一匹で？」

イーブイが驚いた声を出す。

この世界では、探検家はスカイズのように探検家どうしチームを組んで行動するのが大半だった。その方が、ダンジョン内で敵に襲われた時に対処しやすかったりと利点が多いからだ。

たった一匹でダンジョンを探検することなど、余程腕に自信のあるポケモンでないとできない。

今度はキマワリが説明する。

「さらに凄いのは……その、知識の多さですわ。この世の中で知らないことはない、と言われていきますわ。」

イーブイが「ええっ!？」と驚く一方、エリーは「それはちょっと大袈裟なんじゃないの。」と疑心全開で呟く。

それを聞いたキマワリは微かに苦笑いを浮かべる。

「まあ、確かに大袈裟な言い方もしれませんがね。」

でも……その知識で数々の探検を成功させてきた訳ですし、あなたが嘘ではないと思いますわ。」

一通りヨノワールの人となりについての説明が終わった所で、再び群がりの中心　プクリンとヨノワールの方へと視線を戻す。

彼らの話題は遠征の成果へと移っていた。

「そうですね……何も分からなかったのですか……。」

「うん。残念だけど、今回の収穫はゼロ。ごめんね、役に立てなくて。」

どうやら、ヨノワールは霧の湖のことについて聞きたかったらしい。そして、それがここに来た目的なのだろう。彼からは少し落胆の色が伺えた。

だが、いつまでもそんな表情を出していることなどせず、穏やかな表情を浮かべる。

「ふむ。ここへ来たのも何かの縁です。」

私は暫くトレジャータウンに滞在する予定ですので、その間またこちらに伺ってもよろしいでしょうか？」

「もっちろん！ 大歓迎だよ」

みんなもいいよね？」

皆の尊敬を集める有名人が、再びここを訪ねたいと言うのだ。異論を唱える者はいなかった。

皆ガヤガヤと歓迎の言葉を述べる。

ここでペラップがバタバタと羽ばたいて、一言注意する。

「皆っ！ いくらヨノワールさんが有名だからって、サインをねだったりして困らせるんじゃないよっ！」

「いえ、サインくらいお安い御用ですよ？」

ヨノワールがやんわりと言うと、周りがガヤガヤと騒ぎ始めた（ペラップもにやけそうになっている）。

「では、私は街を見て回ろうと思うので……。」

これで失礼します、と言うと、ヨノワールはギルドを出て行った。その姿が見えなくなると、皆ヨノワールの話題を始める。イーブイも興奮したようにエリーに話し掛けた。

「すごいね、すごいねっ！！ すごいでのゆうめいな探検家！ あんなポケモンがいるなんて私、ちっともしらなかったよ。」

「なあに？ イーブイもサインが欲しいの？」

エリーが茶化すように言うと、イーブイがむう……とむくれたような表情をする。

「そうじゃなくてっ、いや、それもあるけど……。」

認めちゃうんだ……と苦笑いを浮かべるエリーの表情は、下を向いてモゴモゴと何を話しか決めかねているイーブイには気づかれなかったようだ。

やがて、イーブイは言葉を選びつつ話し始める。

ヨノワールは驚いて上を見上げる。

階段を駆け下りてくるのはロコンとイーブイの2匹だった。

先程の声はロコンの方だろう。

「はやく行こー！ ひさしぶりの依頼でわくわくしてるんだっ！！」
言葉通りのイーブイの声に、ロコンは短くため息を吐くと、何も
言わずにイーブイを追いかけた。

2匹は木の陰にいたヨノワールには気が付かず通り過ぎて行った。
再び1匹になったヨノワールは小さく呟いた。

「まさか……な。」

32話 ヨノワール（後書き）

エリー

「あれ、何か短くない……？」

うーん、本当は探検まで入れたかったんだけどねえ。次回がその探検活動になります。
ちなみに次回と次々回はイーブイファン必見のイーブイがんばる、な話ですw

あと、活報にも書きましたが表紙絵が完成しました。プロローグの前書きに飾ってあります。

ほんとには小説案内のページに貼り付けたかったのですが……機械オンの私には無理でした（´・`・´）

33話 ちびっこ探検隊(前編)(前書き)

今日(7/4)で『スカイズ』は二周年です。

……最近、更新スピードが恐ろしく遅いけどっ！

とにかく読んで下さる皆様に感謝です。

33話 ちびっこ探検隊（前編）

「ここみたいね。」

依頼の紙に書かれていた情報を元にやって来たのは、“コロコロ洞窟”という洞窟だった。

依頼書によると、友達が中に迷いこんでしまったので一緒に助けてほしい……とのこと。

「洞窟の前で待ってます、か。」

「きつとあの子たちじゃないかな？」

見えてきた洞窟の入り口には小さなポケモンが二匹いる。

スカイズは近づいてその二匹に話し掛けた。

「ねえ、貴方たち？」

エリーが話し掛けるとポケモンたちは揃って固くなって身を寄せあつた。

「そんなに固くならなくても……。貴方たちでしょ？ 救助の依頼を出したのは。」

その言葉に、また小さな二匹は揃って「え？」という表情で見上げてきた。

「おねえちゃんたち、探検隊なの？」

頭は刺々とし、自分が産まれた卵の殻をそのまま身に纏ったポケモン トゲピーが訊ねる。

その質問にイーブイはえっへん、と胸を張った。

「うん、そうだよ。」

すると、隣にいた黄色の身体にダイヤ状の耳、ピンクの電気袋を持ったポケモン ピチユウが笑顔で言った。

「わーすごい、こんな小さな探検家さん、はじめてみましたー」

「小さい、って……。」

その言葉に思わずエリーはズルっ、と転けてしまう。

確かに他の探検隊に比べると、スカイズは幼いけど……。それをさらに幼い二匹に指摘されるとは思わなかった。

「と、とにかく、依頼を送ったのは貴方たちで間違いないわね？」
気を取り直してエリーが確認を取った。トゲピーとピチューが揃ってコクリ、と頷く。

「で、探して欲しいのは友達の子ピーね？」

「そうなの！」

いっしょにあそんでたらね、ブイちゃんがこの“だんじよん”のなかにはいつていつちゃったの……。」

ピチューが洞窟の中を心配そうに覗き込む。

ここで、イーブイが首を傾げ、困ったような顔をして、「ねえ……」と口を挟んだ。

「何で、そのブイちゃんは一匹でダンジョンに入っちゃったのかなあ？」

トゲピーとピチューは顔を見合わせる。

「ワタシたちね、かくれんぼしてあそんでたの。」

「でもね、なかなかブイちゃんだけ見つからなくて、ずーっとさがしてたの。」

そしたら、こんな大きなダンジョンを見つけて……。もしかしたら入ってちゃったのかも、って……。」

2匹曰くブイには向こう見ずな部分があるらしい。

大変だなあ……。とエリーは苦笑いするが、ピチューとトゲピーにはそんな思いはないらしい。

ただただ心配してうな垂れるばかりの2匹の頭を、イーブイはよしよし、と撫でてやる。

「分かった。お姉ちゃんたちが必ず見つけてあげるからね。」

エリー、行こう！」

「えっ、ええ。行きましょう。」

いつにないイーブイの態度に驚いて、エリーの反応が少し遅れる。そのイーブイは、「君たちはここで待っててね」とまた頭を撫で

ていた。

妹ができたような感覚を持っているのだろうか。普段よりも頼もしく見えるイーブイをエリーは微笑ましく思った。

イーブイに目配せすると、撫でていた前足を離し、着いてきた。だが、突然後ろから飛び付いてきた何かにエリーもイーブイも前のめりにつんのめった。

「な、何……?」

振り返れば、ピチューがエリーの上に抱き着いていた。イーブイの方も同様に、トゲピーが抱き着いていた。

「まって、ワタシたちも行く!」

「え……!?!」

エリーの上に乗ったまま、ピチューが訴えてくる。

ブビイのことを大切に想い、同時に心配でならないのだろう。

思わず情に流されてしまいそうになるが、これからダンジョンに潜るのだ。必死にそれを抑えて、懇願してくるピチューとトゲピーを諷める。

「ダメよ。ダンジョンの中はとても危ないの。貴方たちを危険に巻き込む訳には行かないわ。ここで待っていてくれないかな?」

すると、トゲピーが身体全体を大きく振って、拒否を示す。

「やだ! ブビイちゃんはなかでまってるんだよ? わたしたちだけ、おそとでまってるなんて……できないよう……。」

その必死な想いに、まず最初に折れたのはイーブイだった。

「エリー、この子たちも連れてってあげようよ。」

「え!?!」

エリーは目を見張ってイーブイを見る。

「だって、お友達が危険な目に合ってるかもしれないんだよ?

この子たちだって、ただじっと待ってるなんてできないと思うよ。私がちゃんと守ってあげるから。ねえ、だからエリー、お願い……。」

「いいでしょ? と涙目の上目遣いでイーブイだけでなくピチュー

とトゲピーにもお願いされる。

暫しの沈黙の後、エリーは言った。

「……いいわよ……。」

小さい子どもの押しに弱いエリーだった。

*

「はあ……。」

エリーは思わず頭を押さえたため息を吐く。原因は彼女の背後にあった。

ちょうど好奇心旺盛な年頃なのか、ピチューとトゲピーはダンジョン内の様々なものに興味を示し、中々進まなかった。

さらにはイーブイも年が近いこともあってか、一緒になって戯れていた。

入る前の言葉はどうした、と少しばかりイライラしながら振り向く。

「貴方たち？ これは探検“ごっこ”じゃないのよ。もっと気を付けてちょうだい。」

『はあーい！』

返事だけはとても素直だった。

再び頭を押さえ、ため息を吐く。その時、エリーは前方に何かの気配を感じ取った。

イーブイに目配せすると、一瞬きょとんとした後ですぐに気が付いた。先程までの和気あいあいとした空気がなくなる。

ピチューとトゲピーに隠れているように指示した途端、攻撃が飛んできた。

龍の形をした、炎のようなものが向かってくる。 “りゅうのいかり”だ。

エリーとイーブイは両端に避けることで直撃を回避した。

「かえんほうしゃ」!

エリーが“かえんほうしゃ”を放つと呻き声が聞こえる。

炎に照らされた相手はフカマルというポケモンだった。

フカマルはすぐに反撃を仕掛けてきた。今度は“ドラゴンクロー”だ。フカマルは自分に攻撃を当てたエリーに向かってくる。

エリーはそれを横にステップし回避した……のだが。

カチッ

という音が辺りに響いた。

「きゃああ!？」

何が起こったのか確認する間もなく、その場からエリーの姿が消えた。

「エリー!？」

エリーがいた場所にはぽっかりと穴が空いている。 どうやら畏れの“落とし穴”が作動してしまったらしい。

だが、困惑している暇はなかった。

フカマルが再び“りゅうのいかり”を放ってきたからだ。

イーブイは上にジャンプすると、攻撃を放った。

「めざめるパワー」!

“りゅうのいかり”を放っていたフカマルは、避けきれずに直撃する。

イーブイの“めざめるパワー”は炎タイプ。ダメージは薄いようだったが、攻撃で怯んだ隙に“でんこうせっか”で一気に距離を詰めた。

「いつけえ!!」

イーブイとフカマルは真正面からぶつかつた。

フカマルは耐えきれず、その場に倒れた。

イーブイはふう……と一息吐くと、ピチューとトゲピーの方へと向かつた。

「君たち、大丈夫だった？」

声を掛けると、二匹は岩陰からでてきた。

「わたしたちは、だいじょうぶだよ。」

「でも、エリーおねえちゃんが……。」

3匹は落とし穴を見遣る。

「こつから下に行けばいいんじゃないかなあ？」

ピチューの提案にイーブイは首を振る。

「それはできないよ……。」

“落とし穴”という罠は、そのチームのリーダーが掛ければ下の階層へと進める。だが、リーダー以外のチームメンバーが掛かると、強制的に探検失敗となってしまうのだ。

つまりは、エリーを発見できるまで、イーブイ1匹で依頼主を守りながら先に進まなくてはならない。

(できるかな、そんなこと……。)

今までの探検で、エリーと離れて行動したことなどなかった。

それをいきなり今から、しかも依頼主の安全を守るといふ、責任まで1匹で背負わなくてはならなかった。不安だった。

(だけど……この子たちをつれて行ってあげたい、って言ったのは私、なんだ。弱音なんて……はいてられないよ……。)

急に黙りこんだイーブイをピチューとトゲピーは心配そうに見上げてくる。

その視線に気付いたイーブイは安心させるようにこつ、と微笑む。

「だいじょうぶだよ。私が守ってあげるから。」

その言葉に不安気だったピチューとトゲピーの表情に安堵が訪れ

る。

「わかりました、たいちよー！ では、さっそくエリーお姉さんを
そ、そうさく？ しにいきましょう！」

「た、隊長？？」

突然、ピチユーの取った敬礼の姿勢にイーブイは目を瞬かせる。

「そうだよ。たいちよー！ われわれ？ は“ちびっこたんけんた
い”としてエリーおねーちゃんをたすけにいくんだよ！」

「んー、それじゃ約束できるかなあ？」

『やくそくく？？』

イーブイの言葉に2匹は揃って首を傾げた。

「えっと……まず、私からはなれちゃダメだよ？」

1つ目の約束事を言えば2匹は揃って『わかりました、たいちよ
ー！』と返事をする。それを少しだけむず痒く感じながらもイーブ
イは2つ目を続ける。

「それから、危なくなったらすぐにかくれてね？」

私が守ってあげるから、とピチユーとトゲピーの頭を撫でると2
匹から元気のいい「分かった！」という返事が返ってくる。

「それじゃー、“ちびっこ探検隊”しゅつどーおー！！」

『おーーっ！ー！！』

33話 ちびっこ探検隊（前編）（後書き）

何か今回はエリーが一番頑張ってますね。

前回の後書きでは、「イーブイ頑張るな回になる」と言ったよ
うな気がするんだけど。

うん、何ででしょうね（殴

次回はイーブイが頑張ってますよ！

34話 ちびっこ探検隊（後編）（前書き）

この小説に出てくる敵が大人げない件について

結論：みんな子供なんだよ！

34話 ちびっこ探検隊（後編）

「 っつ……。」

落とし穴からこの階層に来てしまったエリーは、ゆっくりと起き上がった。

落下の際に打った所が地味に痛む。

「次の階層に進んじやったか……。イーブイたち、大丈夫かしら……？」

上を見て呟いた。自分が落ちてきた、という形跡は既に跡形もなくなっている。

“落とし穴”は強制的に自分たちがいる階層から次の 尚且つ下の 階層に落とす罠だ。^{トラップ} 次の階層に進んでしまったからには、（強制的に連れて来られたとはいえ）もう前の階層には戻れない。

今まで離れて冒険したことのないスカイズの2匹。1匹にいることへの不安はそれほどなかったが、離れ離れのパートナーのことがエリーには気がかりだった。

「……大丈夫よね。イーブイだって、今まで数々の探検をしてきたんだもの。」

だから、^{ヒチューとアグザベ}依頼主を守り抜き、イーブイも無事に自分の所まで来るはず。

そこまで考えた所で、エリーの聴覚は何かを捉えた。

「誰……！？」

*

その頃

“ちびっこ探検隊”ことイーブイ、ピチュー、トゲピーの3匹は、エリーと合流する為に次の階層に進む階段を探していた。

「あ！ あれ、かいだんじゃないですか!？」

ピチューが指したものの、それは確かに階段だった。

「うん！ もうすぐエリーに会えるかもね！ 早く先に進もう!」
『おー!』

「2匹とも、ちゃんとついてきてる?」

階段を降り切ると、イーブイはピチューとトゲピーが着いて来ているか確認を取る。

「はいっ、ピチューはいます！ たいちよー!」

「トゲピーもいるよ、たいちよー!」

すると、2匹は揃って敬礼しながら返事をする。その様子イーブイは目を細める。

「私も、昔よく探検隊ごっこして遊んでたなあ。」

イーブイが懐かしげに言うと、ピチューとトゲピーは興味津々な様子で訊ねてくる。

「え？ イーブイおねーちゃんも?」

「うん 探検隊はね、小さい時からのあこがれだったんだよ」

「その“あこがれ”の探検隊になってるなんて、お姉ちゃん、すごいですー!」

ピチューがそう言うと、トゲピーも「すごいすごーい」と喜ぶ。

「えへへー、ありがとう」

その純粋な言葉に、イーブイは頬つぺたを赤く染めながらも礼を述べた。

「トゲピーたちも、“たんけんたい”になれるかなあ?」

その質問に、イーブイはにっこりと笑った。

「なれるよ！ だって、君たち、お友だち想いのやさしい子だもん。」

「ほんとう！？ やったあ！」

イーブイの返事を聞き、ピチューとトゲピーは互いに手を取り合っ
つて、「やったやった」と喜び合う。

その様子に、妹たちができたよう
でイーブイは嬉しくなっていた。その所為か、少しばかり注
意力散漫になっていたようだ。

地面から顔を出していた石に躓いてしまった。

「わっ！？ いたっ！？」

なんとか顔面強打は避けたイーブイだが、足に妙な違和感を感じ
る。

「……？」

「イーブイお姉ちゃん、だいじょうぶ？」

「だいじょうぶ？？」

「あ、ああ、うん！ だいじょうぶだよ！」

それを不思議に思いつつも、心配して声を掛けてきたピチュー
とトゲピーに、にこりと笑顔で返事をした。

そして、「じゃ、行こっか」と先へ進もうとした時だった。背後
から突然、ボコツという謎の音が聞こえてきた。

振り向けば、石が手で地中から飛び出した部分を撫でていた。

「……っ、誰だあ？ ワシの頭を蹴飛ばして行ったのは……？」

その言葉にイーブイは固まってしまふ。

あの石、ポケモンだったんだ

まずい、と思った時には石、基ポケモンはボコボコボコツという
音を立てて地中からその姿を現していた。

そのポケモン ゴローンはゆっくりと振り返る。

そして、イーブイ、ピチューとトゲピーの3匹を見咎めた。

「さてはお前たちだな？ ワシの頭を踏みつけて行ったのは……！」
地を這うような低い声に3匹はびくり、と震える。

「ご、ごめんなさい！ まさか地面からアナタの頭が出ているとは

思わなくて……」

「ああ、そうだろうとも！ それで、謝りもせずに皆その場を去って行くのだ！ 他人の頭を踏みつけておいてなんたる無礼……！」
「どうやら過去に何回も同様のことをされたらしく、その（ゴローン曰く）無礼の数々をぶつぶつと挙げ始めた。」

そんなに怒るくらいならまぎらわしいことしないでよ……とイーブイはこっそり思ったが、そんなことを言えば火に油。言えるはずなどなかった。

「と、とにかく、ごめんなさいっ！」

イーブイは必死に謝るが、日頃の鬱憤が堪っているゴローンには無意味だった。

「許さん！ “ストーンエッジ”……！」

「！？」

飛んできた、先の尖った無数の岩を自慢の身軽さでイーブイは避ける。

「ふ、ふええ〜」

“ストーンエッジ”の猛攻が終わった所で、泣き声が聞こえてきた。

攻撃の最中は、岩が地面にぶつかる音で聞こえなかったのだが……どうやらトゲピーが泣き出してしまったらしい。

「君たちは安全なところにかくれてて！」

「え、でも……」

ピチューが戸惑ったように言うが、イーブイとの約束を思い出し、口をつぐむ。

「……うん、わかった。イーブイお姉ちゃん。」

そう言うのと未だ泣いているトゲピーの手を引いて、岩影に隠れた。「ようし、私が相手だよ！」

まずは目眩まし……とばかりにイーブイは尻尾で周囲の細かい砂をゴローンに向けて飛ばした。

*

「見つけた……！」

声を頼りに道を進むと、大声で泣きわめくポケモンを見つけた。搜索の対象となっていたブビイだ。

驚かさないうちにゆっくり近付くと、そつと声をかけた。

「大丈夫？」

ビクツと肩を揺らして、ブビイは顔を上げる。

「おねえちゃん、だあれ？」

「あたしは探検家よ。貴方を助けに来たの。」

探検隊バッジを見せてそう言うと、緊張の糸が解れホツとしたのだろう、ブビイはわんわんと泣き始めた。エリーはよしよし、と頭を撫でてやる。

「……後はイーブイたちを見付けるだけ、なんだけど……。」

その時、遠くの方で何かが炸裂したような音が聞こえた。

「もしかして、イーブイが戦ってるの？」

*

戦い始めたはいいが、勝負は誰が見ても劣勢だった。

原因はタイプ相性にあつた。ノーマルタイプの技は岩のポケモンにほとんど効果がない。イーブイの覚えている技はほとんどがノーマルタイプな為、決定打を打ち込めないでいた。

それに対して、相手　ゴローンの攻撃に、イーブイには耐性がない。小さなポケモンならではのすばしっこさを生かして、なんとか避け続けていた。　救いは、最初の“すなかけ”で相手の命中率が下がっていることだろう。

それでも長く戦い続けていると、疲れが出てくる訳で。

「……っ！」

ゴローンの放った“ストーンエッジ”がイーブイを掠め、イーブイは少し顔をしかめた。

タイプ相性、そして自身の重さ故、動かずに攻撃を耐えるゴローンよりも、攻撃を避ける為、動き続けているイーブイの方が堪っている疲労は大きかった。

それを見抜いたゴローンはチャンスとばかりに猛攻を仕掛けてくる。

「ロックブラスト」！」

大きな岩の塊を立て続けに飛ばしてくる。横に跳んだり、高く跳躍したりして避けるが、疲労からか着地の際にバランスを崩してしまった。

「うわっ！」

転倒したイーブイ。これを逃すゴローンではなかった。

「ストーンエツ……」

その時、辺りに電気が飛び交った。その電流は微弱で相手を“まひ”させる位にはちょうどいいだろう　“でんじは”という技だ。

「ふえ！？　何……？」

イーブイが後ろを向くと、隠れたはずのピチューが放電していた。

自分が痺れそうになつていられるにも関わらず、必死に放電を続けているのをゴローンは鼻で笑った。

「残念だったな。ワシは地面タイプだ。電気技は効か
「今だよ、トゲピー！」

それだけ言うと、ピチユーは放電を止め、その場へたり込んだ。そして間髪を入れず、トゲピーが岩影から飛び出した。指が青白く光っている のを見るか見ない内に無数の7色に輝く葉っぱを飛ばしてきた。

その葉 “マジカルリーフ” は真つ直ぐにゴローンに向かつて飛んで行く。

「ぐ……っ！」
草タイプの技は、岩と地面2つのタイプを持つゴローンには十分すぎる効果だった。

だが、まだ体力の限界値までは達していなかったようで、再び攻撃を仕掛けようとする。

「まだまだ……っ！」
しかし、覚束ない足元は明らかに隙だらけだった。

イーブイは一気に駆け出すと、渾身の力でゴローンにぶつかって行った。

「“たいあたり”！」
その一撃が決定打となり、ゴローンはゆっくりと倒れた。

「はあ、はあ……やった……！」
イーブイは思わずその場へたり込んだ。

その脇にトゲピー、そして痺れから立ち直ったらしいピチユーが駆け寄る。

「イーブイおねーちゃん、だいじょうぶ？」
トゲピーに心配そうな声音で尋ねられ、イーブイは疲れたような表情をしながらも笑顔を見せる。

「うん……うん。だいじょうぶだよ。君たちは？」
「大丈夫です。あのう、えっと……ごめんなさい……。」

ピチューに突然謝られ、イーブイはきよとんとする。「何で？」と訊ねると、ピチューはもじもじと答えた。

「かくれてて、って言われたのに、出てきちゃったから……。」
「なんだあ。そんなこと？ ベつに気にしてないよ。」

「……それよりも、ありがとう。君たちがいなくなったら、どうなっていたか分からないもん。」

イーブイに礼を言われ、ピチューもトゲピーも照れたような表情をする。

「イーブイー！」

その時、イーブイを呼ぶ声が聞こえ、3匹は振り返る。そこにはこちらに向かって駆けて来る、2匹のポケモンの姿。それは

「エリー！」

『ブビイちゃんー!!』

その瞬間、イーブイたち、“ちびっこ探検隊”員の疲労はあつという間に消え去り、エリーたちの元に駆け寄った。

「わあ、ブビイちゃん、だいじょうぶだった？」

「とうぜんでしょ！ あちしに限ってだいじょうぶじゃないなんてことないわよ！」

このやり取りを聞き、エリーはこっさり苦笑いを浮かべる。

あたしが見付けるまで泣いてたのは誰だっけ……？

さすがに口には出さなかったが。

ピチューとトゲピー、そしてブビイが互いに喜びあっている光景から、その様子をにこにこ笑顔で見ているイーブイへと視線を向ける。

「イーブイは？ 大丈夫だった？」

何か凄い音が聞こえてきたけど……。と付け足すと、イーブイは

「え！？」と驚いたような顔をする。

「そんなに音、すごかったの？」

「ええ。だって、その音を頼りにここまで来たんだもの。」

「そっかあ、自分じゃあまりよくわからないね。実はね……。」
イーブイは少し横にずれ、自分の背後が見えるようにした。
そこには大きな岩だけ。 いや、その岩には手と足らしきものが付いている。

「もしかして……あれってゴローン？」

「うん。さっきまであの人と戦ってたの。」

今度はエリーが驚いた顔をする番だった。

「ああやって伸びてるってことは……勝ったのね？」

相手はイシツブテから進化したポケモンだ。未進化ポケモンに比べれば、ある程度能力は上な訳で。おまけに、相手はこの場にいる全員の攻撃を半減、さらには無効化できる。

「うん！ ピチューちゃんとトゲピーちゃんにも手伝ってもらったけど……。」

「ふふ、凄いじゃない。3匹だけでよく頑張ったわね。」

ピチュー、トゲピー、そしてイーブイ。それぞれの頭を撫でてやると、3匹は嬉しそうな顔をした。

「ブイちゃんもエリーお姉さんも見つかったし、“ちびっこ探検隊”はにんむ、だいせいこうですねー！」

「ですねですねー！」

「そうだね！」

3匹が喜び合う中、蚊帳の外のエリーとブイは首を傾げる。

「“ちびっこ探検隊”？」

「何それー！？ あちしを仲間はずれにしてっ！」

ブイがブンブンと頭から湯気を出しながら怒る。

「なにいつてるのー？ ブイちゃんも“たいいん”の1ぴきだよ

あ、エリーおねーちゃんは……。」

「あたしはいいわよ。」

どう考えてもあたしは“ちびっこ”じゃないし、と頭の中で付け足し、右足で止める。

「“ちびっこ探検隊”の初任務はしゅーりょーです。みんな、おつ

かれさま」

『ありがとう、イーブイおねーちゃん!』

「次は、あちしもなかまに入れてよねっ!」

「うん、とーぜん」

4匹で戯れている光景は微笑ましいものだが、そろそろ帰らなければならぬ。

ぼんぼん、と前足を叩くと“ちびっこ探検隊”員に告げる。

「任務が終わったのなら、ちゃんとギルドに戻って報告しないとね。」

「

探検隊バッジを取り出して言うと、『はい』という返事が返ってくる(イーブイは慌てて自分の探検隊バッジを取り出した)。

何だか引率の先生にでもなった気分だ、とエリーは苦笑いを浮かべる。

全員をトレジャータウンに送り届けた後で、エリーの表情に気がつき、イーブイは首を傾げる。

「エリー、何かあったの?」

「……ん? いや、何でも? それより早く帰りましょ。本当は疲れてるでしょ?」

「そんな、そんなこと……ふあ……ふあ……ふあ……ふあ……あ。」

大きな欠伸を噛み殺せず、イーブイは少し赤くなった。

「ほら、ね。早く帰って休みましょ。……今日はお疲れ様、イーブイお姉ちゃん。」

もう一度頭を撫でてやると、イーブイは嬉しそうに目を細めるのだった。

35話 思わぬ探検（前書き）

原作通りすぎてツマンネ！ な状態なので、ちょっと原作から逸脱してみた。

オリジナルダンジョンが出てきますが、
名前が足りきたりすぎるような……（＾―＾；）

35話 思わぬ探検

真夜中。

皆が寝静まったギルドの前に蠢く、3つの怪しい影があった。

月は雲に隠れ、その3人は完全に暗闇と同化していた。

「プクリンには酷い目に遭わされましたね、アニキ。」

「そうだな……。仕返ししてやりてえ所だが、オレ様たちじゃあ敵いそもねえ。」

“アニキ”がフン、と不機嫌そうに鼻を鳴らすと、後ろに控えた2人は身を寄せあった。

「そ、そうだ！ アニキ！」

「何だ？」

「こつなつたら、スカイズの奴らに仕掛けるのはどうでしょうか！？」

暫しの沈黙。そして、不気味な笑いが辺りに響いた。

「クククツ、それはいいアイディアだな。」

雲が晴れ、月が辺りを照らす。

月明かりに浮かび上がったのは怪しい笑みを浮かべたドクローズの3人だった……。

*

「みつつー！ みんな笑顔で明るいギルド！」

「それじゃ、みんな。今日も仕事に取り掛かってくれ。」

『おーっ！』

ぞろぞろと皆が、今日の仕事をなるべく地下2階の掲示板に向かう。それはスカイズの2人も同じだった。しかし

「ああ、オマエたち。スカイズ！」

ペラップが追いかけて来てスカイズを呼びとめた。

「何？」

どうしたんだろう？ と顔を見合わせてからエリーがペラップに訊ねる。

「オマエたち、カクレオン商店に行ってセカイイチの入荷予定を聞いて来てくれ。」

「え、どうして？」

イーブイがきよとん、として訊き返す。驚いたのはエリーも同じだった。

以前、セカイイチの採集を頼まれた時は、リンゴの森（それも森の奥深く）まで行くよう言われたのだ。

ペラップはススス…とエリーとイーブイに近づき、翼で嘴を隠した。チラチラと親方の部屋の方を見ていることから、あまり大きな声では話したくないのだろう。

エリーとイーブイはペラップに耳を寄せた。

「親方様の大好物がセカイイチなのは、オマエたちも知っているだろう。」

「ええ。よーく知ってるわ。」

例のセカイイチ採集の一件は、スカイズが初めて失敗した任務。しかも、プクリンのセカイイチへの愛着は「大好物」という言葉ではとても足りないものだった。セカイイチを採って来れなかった、と告げた時のプクリンの反応は正直、思い出したくもない。

思い出したくもないだけに、わざわざ思い出させるようなことを言ったペラップを軽く睨みながら、エリーは返事をした。ペラップは軽くどもりながら話を続ける。

「も、問題はそこではなく、親方様のセカイイチの消費量だ。」

「ご飯時でなくても、気がつけばセカイイチを頬張っていて……探つてきても探つてきても、すぐに無くなってしまふ。」

「……………」
無くなれば無くなったで癩癩を起こす癖にどうしてそんなに食べるの……と嘆きたくなつたが、何故か言葉が出てこなかつた。

「だ、だったら、ペラップがおやかたにちゃんとちゅーいすれば……」

イーブイが力なく提案するが、ペラップがバタバタと羽ばたいて発言を強制的に止めさせた。

「とんでもない！　というか、私だってそれ位はしたさ！　だが……」

「逆ギレされたんだ……」
ペラップがガックリと頷く。

「私が思い切つて注意した途端に、親方様はたつぷりと目に涙を溜めて……溜めて……」

ペラップはブルブルと大きく身震いした。

「……そういうことだから、リンゴの森へ行く手間を何とかして省きたいのだ。それで、カクレオン商店で手軽に済ませられたら……と思つてな。」

「分かつたわ。行つてくる。」

プクリンに聞き入れて貰えないのなら、セカイイチの調達の方を何とかしなければ。カクレオン商店に入荷予定があることを願いつつ、スカイズはギルドを出た。

「あら？　あれは……」

トレジャータウンを通り、カクレオン商店に近付いてきた所で、そこには先客がいることに気が付く。

それは、先日ギルドを訪ねて来た……

「ヨノワールさん？」

エリーがそう言うと、ヨノワールは少し驚いてこちらを向いた。

そして、スカイズの2人を交互に見た後、合点が行ったように「ああ！」と手を打った。

「貴女達は確かギルドの……。」

「うん！ 私たちは“スカイズ”！ うわあ、ヨノワールさんおぼえてくれたんだあ、うれしいなっ！」

有名な探検家が自分たちのことを覚えていたことが余程嬉しかったのだらう。イーブイの尻尾は大きく揺れ、体はピヨピヨ小さく跳ねていた。

そんな無邪気な喜びのように、ヨノワールの表情は自然と柔らかくなる。

エリーは「少し落ち着いて」とイーブイを宥めると、ヨノワールに質問をする。

「ヨノワールさんはどうしてここに？ 何かお買い物ですか？」

「いえ。カクレオンさん達とおしゃべりをしていたんですよ。」

「私たちが引き止めたんですよ。ヨノワールさん、有名ですからねっ！」

有名人と会話できてご満悦、と言った表情の緑のカクレオンが口を挟む。その隣にいる弟の紫のカクレオンも同じような表情をしている。

「いいなあ。私もヨノワールさんのお話聞きたいよう。」

イーブイが口を尖らせて言うと、ヨノワールは朗らかに笑った。

「ははは。私なんかの話でよろしければ、いつでもお話ししてあげますよ。」

そうだ！ 宜しければこの後、一緒に探検などというのは如何です？」

「え！？」

スカイズは驚いてヨノワールの顔を見上げる。その様子にヨノワールはクスリ、と笑って付け加える。

「カフェなどでは、とてもゆっくりお話できませんからね。」

「ああ、なるほど……。」

確かに、ヨノワールみたいな有名人がカフェに現れれば、先日のギルドみたいな大騒ぎになることは必至だろう。

「うん、わかった！　一緒に探検に行こう、ヨノワールさん！　ね、いいよねっ？」

イーブイは振り向いて、エリーに同意を求める。

有名な探検家から、探検に誘われるなど滅多にないだろう。貴重な機会が目の前にあるのだ。

「ええ。お願いします、ヨノワールさん。」

エリーもまた了承し、ぺこりと頭を下げた。

「お兄ちゃん、はやくはやく〜！」

「待つてよ、ルリリ！」

話が纏まった所で、元気の良い2つの声が聞こえてきた。通りを駆けて来るのはマリル、ルリリ兄弟だ。

「おうい、マリルちゃん、ルリリちゃん！」

イーブイが声を掛けると一旦止まり、2人はこちらを向いた。

「あつ、スカイズさん！　こんにちは！」

「こんにちはー」

兄・マリルがスカイズに気付いて挨拶すると、弟・ルリリも兄に続けて挨拶をする。

「ねえねえ、2匹とも、そんなに急いでどうしたの？」

「水のフロート」が見つかったので海岸にむかうとちゅうなんです。」

「『水のフロート』??」

エリー、イーブイ、カクレオン×2の声が見事に重なった。唯一重ならなかったのはヨノワールだけだ。

イーブイはヨノワールに訊ねる。

「ヨノワールさん、“水のフロート”ってなあに？　おいしいの？」

「……イーブイさん、そのフロートではありませんよ。」

“水のフロート”というのは、何度も交換して、ようやく手に入る、とても珍しいルリリの専用道具です。」

「へえ〜〜。」

またしても、エリーたち4人の声が綺麗に重なる。

「……って、道具アイテム関連なのにどうして貴方たちが知らないの。」

エリーが指摘すると、カクレオンたちはギクツ、と顔を強張らせた。

「い、いや〜……、それはその……ハハハ……。」

や、やっぱりヨノワールさんは噂通りの博識なんですねー！ワタクシ、改めて尊敬しちゃいますよ！」

「そんなに珍しい道具を入荷する機会なんて、うちでは当分無いんでしょうなあ……ハハハ……。」

はぐらかされ、白い目で冷や汗だらだら店主2匹を見るが、エリーはそれ以上言及しなかった。

それよりも、カクレオンの言った「入荷」という言葉で思い出したことがあったからだ。

「ねえ、イーブイ……すっかり忘れてたけど、ここに来た目的」

「えっ？ ……あああーっ！！ そうだった！」

ねえ、カクレオンさん。セカイイチの入荷予定ってないかなあ？」突然、イーブイに大声を上げられ、固まっていたカクレオンだったが、すぐに復活すると、紙をペラペラとめくり始める。

「セカイイチの入荷予定ですか？ ……いや〜、すみません。今のところないですね〜。」

「そ、そんなあ……。」

イーブイの耳がしゅん、と垂れる。

「ペラップさん、どんな反応するかなあ？」

セカイイチを手軽に入手することを切に願っていたペラップにはショックが大きいだろう。

「本当に無いのよね？」

「は、はいつ！ すみませ〜ん……。」「
現実に無いものは無いのだ。

エリーは軽いため息を吐くと、イーブイの頭をぼんぼんと軽く叩いた。

「無いものは仕方ないわ。一度報告にギルドに戻りましょ。」

「うん、そうだね。ヨノワールさん、ちょっと待っててね！」

ヨノワールは微笑んで

「では、少し買いたいものがあるので、後から交差点の方に向かいます。」

と言った。

「じゃあ、ボクたちも行こう！ ルリリ！」

「うん！」

マリルとルリリも、自分たちの本来の目的を果たすべく、店を離れようとする。

「そういえば海岸で見つかった、って言ってたわよね。途中まで一緒に行きましょう。」

「わーい、スカイズのおねーちゃんと一緒にだあ！」

スカイズとマリル、ルリリ兄弟の4人は連れ立ってギルドの方向へと歩いて行った。

「ええーっ！?!? セカイイチの入荷予定ないのーっ！?!?」

交差点でマリルたち兄弟と別れた後、エリーとイーブイはギルドに戻り、ペラップに報告をした。

すると羽をバタつかせ大袈裟なまでに叫び、ガックリと頂垂れてしまった。

「ちゃんと聞いて来たのかい!?!?」とか「もう一度聞いてこい!?!?」とか八つ当たりでもされるかと警戒したが、ペラップはあっさりと引き下がった。

「仕方ない……。セカイイチの件は私が何とかするよ。オマエたち

はいつもの通り仕事に行ってくれ。」

そう言い残すとペラップはその場を離れた。背を曲げてトボトボと歩く様はシヨックが大きかったことをハッキリとスカイズに伝えた。

「だ、だいじょうぶかなあ？」

余りに落胆した様子のペラップに心配になったイーブイがエリーに訊ねた。

「どうみても、大丈夫じゃないわよね……。」

でも、あたしたちは前にセカイイチの採集に、……失敗、してるし、これ以上このことを任せる気はないんじゃないかしら？」

「んー、まあ、たしかに。」

じゃあ、ヨノワールさんのところに行こうか……？」

ペラップのことも気になるが、有名な探検家^{ヨノワール}を待たせるのも不味いだろう。

スカイズは再びギルドの外に出た。

「お待たせしました。」

「おまたせー！ ヨノワールさん！」

交差点の木陰に佇むヨノワールに近付き話し掛ける。

「いえ。私も今来たばかりなので。」

では、早速行きましようか？」

「はい……って、どこのダンジョンに行くの？ ヨノワールさん。」

まだ行き先は決まっていなかったことを思い出す。

だが、ヨノワールは既に決めているようだ。彼は一枚の紙を取り出す。

「実は、既に依頼を受けていますね……。」

ヨノワールから差し出された依頼書を、エリーとイーブイは互いに顔を寄せあつて覗き込む。

その内容は「虹色の森」というダンジョンに行つて薬草を取つてきてほしい」というものだった。

「依頼人の奥様が重い病気にかかっているらしく、しかも、「虹色の森」に生えているこの薬草しか効果がないそうなんです。」

ヨノワールは別の紙を取り出して、薬草の絵をスカイズに見せた。エリーとイーブイは、一旦読むのを止め絵に目を向ける。それは細かい葉と茎、そして小さな白い花が特徴的な可愛い草だった。

「あら？ でも、そんな内容、この依頼書には書いてないわよね？」

エリーは依頼書を裏返したりして確認するが、「妻が重い病気」とか「虹色の森」にしか生えていない」との説明はどこにもなかった。

「ああ、依頼人のニドキングさんは直接私を尋ねて来て下さったんです。」

「へ、へええ……。」

さすが有名探検家というべきだろうか。依頼人が直接頼みに来るだなんて。

会話が途切れ、エリーは再び依頼書に目を落とす。依頼主、目的、場所、制限、そして……。

「えっ！？ 1！？」

難しさの項目に目を通したエリーが思わず声を上げる。それに驚いたイーブイも慌てて依頼書を覗きこむ。

「ほ、ほんとだ！」

依頼には内容によってランクが付けられる。ランクは全部で15あり、低い順　つまり難易度の低い順にE、D、C、B、A、S、そして1から9までの　ランクだ。

これまで最高でBの依頼までしか受けたことのないスカイズにとつて、突然目の前に突き付けられた高難易度の依頼に不安と戸惑いを隠せなかった。

「ああ、「虹色の森」には強いポケモンが多く住んでいるとニドキ

ングさんがおっしゃっていましたね。」

ヨノワールが思い出したように付け足した言葉にスカイズは愕然とする。

「ヨノワールさん、む、むりだよ」

イーブイがおずおずと告げる。

「そうよ。あたしたち、探検隊としてまだ駆け出したもの。きっと、足手まといに」

ヨノワールはエリーの口元に指を近付けて、話を止めた。

「やってみなくては、分からないじゃないですか。それに……」

ヨノワールは身を屈め、エリーの前足を手にとった。

「いざとなったら、私が守ってあげますし……。」

そして、囁くように言うと、自分の口元に前足を触れさせた。

「~~~~!!!?」

途端、エリーは端から見ても分かるくらいに真っ赤になり、イーブイはぽかんと口を開けた。

> i 3 3 4 3 2 | 9 6 7 <

「では行きましようか。」

ヨノワールはというと、何事もなかったかのように言々とさっさと先に行ってしまった。

去り際のその口元は微かに笑っていた。

「~~~~っ！ ま、守られるほど弱くないわよ！ たくさん活躍して

驚かしてやるわ！

あたしたちも行くわよ、イーブイ!!」

「う、うん!!」

からかわれた事に気付いた為か、それとも不覚にも真っ赤になってしまったことへの照れ隠しか。

普段の落ち着きが完全にどこかに行ってしまったているエリーに、イーブイは驚きつつも内心面白がっていたとか。

35話 思わぬ探検（後書き）

＼（、、*）ヨノワールさん！ 新米探検隊に 1 ランクの依頼なんて幾らなんでも無理があると思います！（セルフツッコミ万歳）

……という訳で原作逸脱とは
まさかのヨノワールさんと探検でしたw
肝心の探検は次回だけどね！

今回の話は前から書きたかったシーンがあったので楽しかったです
^^^*
具体的にどこかというところ、
最後のヨノワールとエリーの

エリー
「それ以上言うなあっ！」 まだ真つ赤

何か口調がおかしくなっていないか……？
しかもこれって赤いきつん（ry
正確に言うといつも落ち着いているエリーの慌てふためいて取り乱してる姿を書きたかったんです。
あんな風にね。

最後に、ペラップがプクリンについてフォローします。

ペラッブ

「親方様が手に負えない、困った状態になるのはセカイイイ手関連の時だけだからな！」

36話 虹色の森(前書き)

いよいよヨノワールさんの探検です！

36話 虹色の森

「エリー、なんか……怒ってない？」

イーブイが恐る恐る声をかける。

彼女が声をかけた相手　ロコンのエリーは誰がどうみても不機嫌だと分かる顔でイーブイを見た。

「べ、つ、に？」

「ひっ！　や、やっぱり怒ってるよね！？」

エリーの返事にイーブイは小さく悲鳴を上げ、身体を縮こまらせた。

今、エリーとイーブイの2人は“虹色の森”というダンジョンに
来ている。

色とりどりの木の実が実っているから、というのが名前の由来らしい。

しかし、そんなメルヘンチックな名前とは裏腹に、過酷なダンジョンだった。

まず、道はでこぼこな上に所々に木の根が出ている場所もあつて非常に歩きにくかった。道があるならまだいい。時折、草木が生い茂り道になっていない道を通ることも少なくなかった。

さらに、ここを住み処としているポケモンたちは総じてレベルが高く、スカイズだけでの探検だったら間違いなくすぐに探検失敗となっているだろう。

だが、今回の探検はスカイズだけではなかった。

突如トレジャータウンにやって来た、有名な凄腕探検家ヨノワール。彼も一緒だ。

ヨノワールの提案により、この難解なダンジョンに挑むこととなったのだ。

当初スカイズは今の自分たちの実力では難易度が高すぎる、とし

て断ろうとした。だが、ヨノワールのある“からかい”により、エリーは勢いに任せてこの提案を呑んでしまった。そう、後先考えずに。

ああっ、もう、あたしのバカ！ “森”って時点で気付くべきだったわ！

エリーは激しく後悔する。

スカイズとヨノワールが今いるのは“虹色の森”。そう、虹色の“森”。

つまり、エリーの最大の弱点である虫タイプのポケモンが多く生息している訳で。

この探検で、見返してやるつもりだったのに！ 恰好悪いところしか見せてないじゃないの！

これがエリーが不機嫌な理由だった。

ヨノワールはヨノワールで、エリーが不機嫌な様子を見て面白そうに笑っている。エリーはさらに機嫌を悪くした。

「あつ、も、もしかしてっ、あれじゃないかな!？」

エリーが不機嫌なせいでおどおどしていたイーブイが僅かにどもりながらも声を上げた。

彼女が指し示す前方は森が拓けており、その先は崖になっていた。その崖の淵に目的の薬草とそっくりな草が生えていた。

「確かに似てるわね……。」

「そうですね。近くで見てください。」

3人は崖から落ちないよう慎重にその草に近づく。じっくりと観察したヨノワールは大きく頷く。

「……間違いないですね。これが目的の薬草です。」
それを聞き、イーブイの顔が輝く。

「ホントに!?! これさえあればニドクインさんの病気が治るんだ

ね！」

「イーブイ落ち着いて。危ないわよ。」

小躍りしかねないイーブイをエリーは慌てて止める。周りは崖なのだ。足を踏み外したら……

そこまで考えたその時、辺りに強風が吹き荒れた。

「!？」

「……何!？」

3人は必死に踏ん張るが、銀色に輝く美しい風は一番体重の軽いイーブイを徐々に崖っぷちへと動かす。

「……っ！ い、イーブイ……!」

エリーは必死にイーブイの尻尾を口で掴み、引き留めようとする。「誰ですか！ 出てきなさい!」

ヨノワールは必ず当たる“シャドーパンチ”で攻撃をする。何者かの短い悲鳴と共に、風は止んだ。エリーはイーブイの尻尾を放し、イーブイと共にほっ、と息を吐いた。

茂みがガサガサと音を立て、風 “ぎんいろのかぜ” を吹き荒らした超本人が姿を現した。

てんとう虫の容貌に、手袋や靴がついたような手足が特徴的なポケモン、レディアンだった。

レディアンが姿を現した、その瞬間、エリーは息を呑み、少々後退りした。

「何故、いきなり私たちを攻撃してきたんです?」

ヨノワールがレディアンに訊ねる。

「そんなの聞かなくて解るだろー！ オマエたちがその草を採ろうとしたからだよ!」

そう答えるレディアンは、ふんぞり返りながら腕を組み、威張っているような雰囲気を出していた。

「ええっと、この草、採っちゃいけなかったのかな……?」

「当たり前だ！ この森のものは、みーんなオイラのもの！ オマエらなんかに渡さないよーだ!」

そう言ってレディアンはあっかんべー、と舌を付きだす。

『……………』

幼稚な挑発。そして某国民的アニメの某キャラクターのような発言。エリー、イーブイ、ヨノワールの3人は言葉を失った。

「ど、どうしよう……………?」

「こつちは^{ニドクイン}依頼人の命が懸かっているのよ。独占欲の強いお子様はちよつと懲らしめて」

「へえー！ 誰が誰を懲らしめるの?」

レディアンの声に顔を上げるが、肝心のその姿が見えない。

「ど、どこ!?!」

「遅いよ、“れんぞくパンチ”!」

姿が見えず戸惑うイーブイに突然入る強力なパンチ。避けられるはずもなかった彼女にパンチは数発続く。

「……………つっ!」

「“ひのこ”!」

痛そうな呻きを上げるイーブイを助けようと、エリーは“ひのこ”を放つ。

だが、レディアンはまたしても姿をくらましてしまった。

「く……………つ、“こつそくいどう”ですか!」

「当たりイ! でも、それだけじゃないよ! さっきの“ぎんいろのかぜ”、覚えてるよね?」

そう言つと、レディアンは再び辺りに“ぎんいろのかぜ”を吹かせた。

それは、明らかに先ほどのよりもパワーアップしており、効果の薄いエリーでさえも辛かった。

「そっか、さっきので……………レディアンの能力が上がってるのね!」

「その通りだよ!」

いつの間にか、レディアンがエリーの顔を覗き込んでいた。エリーは驚き と恐怖のあまり、声が出なかった。

「あれれ? どうしたの?」

あつ、もしかしてオイラが怖い、とか？」

ギクツ、とエリーの表情が強張る。その様子にレディアンは鼻で笑った。

「あれ、もしかして凶星イ〜？」

「……っ！」

悔しそうに顔を歪めたエリーを見て確信を得たレディアンは、ゲラゲラと身体を曲げて笑いだす。

「あははははっ！ 炎タイプがいるからちょっと警戒してたけど……これじゃ、そんな心配いらなそうだね！」

そう言うや否やレディアンは猛攻を再開する。

「“シャドーパンチ”！」

速すぎて姿の見えないレディアンに向かって、ヨノワールはもう一度“シャドーパンチ”を放つ。それを見たレディアンは動きを止め、ニヤリと笑う。

「ムダムダ！」

“ぎんいろのかぜ”の影響を受けてパワーアップしたレディアンは、ヨノワールに劣らない力を持っていた。“むしのさざめき”で“シャドーパンチ”を相殺してしまう。

「“めざめるパワー”！」

今度はイーブイが“めざめるパワー”を放つが、聞こえてきたのはレディアンの笑い声だった。

「はははっ！ キミの“めざめるパワー”は炎タイプなんだね。でも、当たらなければ意味ないよ！」

レディアンはゲラゲラ笑いながら「悔しかったらオイラの動きを止めてみな〜」と続ける。

「っ、バカにするのもいい加減にきなさいよ！」

ついに、堪忍袋の緒が切れたエリーが怒鳴る。

それにレディアンは驚いたのか、一瞬黙るも、次に聞こえてきたのは意地の悪い声だった。

「へえ、じゃあキミに何ができるのさ？」

……ボクが怖いんだろ？」

レディアンは完全に舐めきっている。

エリーのすぐ側^{そば}まで来て嘯き、またあつという間に姿を眩ま^{くら}ましてしまった。

レディアンが近くまで来たことで、エリーは少し身震いするが、頭を軽く振って気を取り直す。

「だったら止めてみせるわよ！ 貴方の動きを！」

レディアンに向かって言い放った。

「でも、どうやって止めるの？」

イーブイが不安げに訊ねる。

「大丈夫、ちゃんと考えがあるわよ。」

ヨノワールさん、ちょっと耳貸して。」

イーブイを安心させるようにウィンクすると、ヨノワールを呼んだ。

ヨノワールは、エリーの作戦を聞くべく口元に耳を寄せた。

「成程。分かりました」

エリーから作戦を聞いたヨノワールは早速、実行に移す。

「シャドーパンチ！」

それを見たレディアンは鼻で笑った。

「何度やっても同じだって！」

そう言うのと迎え撃つべく、レディアンは動きを止めた。

(今だ！)

「むしのさざ」

「ふういん”！”」

技を放とうとした瞬間、エリーの“ふういん”がレディアンを襲った。

動作を封じられたレディアンは、そのまま地面に落ちた。

「やった！ レディアンの動きを封じた！」

「今だ……！！ “かえんほうしゃ”！」

“ふういん”されて動けないレディアンに灼熱の炎が襲いかかる。

その威力は、まったく活躍できなかったイライラと、散々バカにされた怒りでいつもより格段に威力が上がっていた。

炎が収まった後、レディアンはフラフラと浮かび上がる。

「くっそ〜、オマエ、オイラが怖いんじゃないのかよ！」

ふ、フン、いいよ！ 今回はこの辺にしろといてやらあ！」

そこまで言うと、レディアンはエリーまで接近してきて、顔の目の前に人差し指を付きます。エリーは少し後ろに下がった。

「でも、だからってオイラは負けた訳じゃないからな！ ちょっと用事を思い出したから帰るだけだからな！」

最後にべーっ、と舌を出すと、レディアンは森の中に戻って行った。

「……。何あれ、かつこわる……。」

エリーが呆れたように呟く。

「でも、なんとか勝てたね！ 一時はどうなるかと思ったよ〜。」

「ええ。薬草も採取できましたしね。」

そう言うヨノワールの手には崖の淵に生えていた薬草が握られていた。

「これで依頼達成だね！ トレジャータウンにもどろろよ！」

3人はそれぞれ探検隊バッジを翳してトレジャータウンに戻って行った。

*

「ありがとうございます、ありがとうございます…！」

トレジャータウンに戻ったスカイズとヨノワールは、依頼主であるニドキングから熱烈な感謝の言葉を告げられていた。

「これで妻の病気も治ります。本当につ、ありがとうございますっ

！」

そう言うつと、またしてもニドキングは深々とお辞儀をした。

「探検隊として当然のことをしたままでですよ。

それよりも、早くその薬草を奥様にあげて下さい。」

「はっ、そうですね！ では、この辺で……」

と、その前にお礼を差し上げなくては……。」

そう言うつて懐から取り出したのは、大きくて重そうな布袋。

「100000ポケ入ってます。」

『100000!!!?』

ニドキングの言った金額にスカイズは驚いて同時に声を上げる。

それだけの金額をスカイズは聞いたことがなかった。

「いいのですか?」

「ええ。この薬草はとても貴重なものですし、その上、これさえあれば妻の病気も治るんです。どうぞ受け取って下さい。」

ニドキングはヨノワールの手に布袋を渡した。

「君たちもありがとうね。」

ニドキングは僅かに屈み、スカイズにもお礼を述べる。

聞いたことのない額の大金に頭がクラクラしていた2人は、その言葉で復活した。

「どっ、どういたしまして。」

「ニドクインさんの病気、はやく治るといいね!」

ニドキングはにっこりと笑って頷くと自分の家へと戻って行った。

ニドキングの姿が見えなくなると、スカイズはヨノワールの方に向き直る。

「ヨノワールさん、今日はありがとう　　すごく勉強になりました

!」

元気よくお礼を述べるイーブイに、ヨノワールは柔らかな微笑を

向ける。

「ふふ。それは良かったです。」

ヨノワールはエリーの方にも視線を向ける。探検隊として、そして1人のポケモンとしての実力を見せられなかったエリーは思わずそっぽを向く。

「今回はかつこ悪いところしか見せられなかったけど……場所が森じゃなかったらもつとあたしの実力を発揮できたんだからね！」

「そうですねえ……、虫ポケモンに怯える貴方はなかなか可愛らしかったですよ。」

イーブイに向けた微笑みのままヨノワールは言った。エリーは思わず真っ赤になる。ただし今度は照れからではなく怒りからだ。が。「ひっ、人が気にしている事を……!!」

押し殺したような小さな声だったが、ヨノワールにはしっかりと聞こえたようでくすり、と笑みを零した。

そして、自分の手に持っていた布袋をスカイズに差し出す。

「このお金は貴女がたに差し上げますよ。」

『え、え？ ええっ？』

突然の展開に、怒っていたはずのエリーも、傍らでおろおろと見守っていたイーブイも驚いて目を丸くした。

「ふふ。今日は一緒に探検できて楽しかったのでそのお礼です。」

最後の貴女の活躍……恰好良かったですよ、では。」

ナチュラルに褒められ、エリーはトサキントのように口をパクパクさせる。

その間にもヨノワールは金の入った布袋を置いて立ち去ろうとしている。イーブイが慌てて止めようとした。

「ちよつとまって、ヨノワールさん！ こんなにたくさんのお金、

私たち

「受け取れないよ」と続けようとしたが、それよりも先にヨノワールの姿が見えなくなってしまった。

「どうしよう、このお金……。」

イーブイが「困った」という顔で布袋を見る。その困惑した声に
気を取り戻したエリーは、試しに布袋を啜えてみた。

「重っ！ と、取り敢えず、ペラツプに報告しましょう。」

その後、ペラツプに今回の探検について報告したところ、思わぬ
大金、それ以上にスカイズがヨノワールと探検したことに驚いて、
発狂したとかしらないとか……。

36話 虹色の森（後書き）

エリー

「森じゃなければ森じゃなければ森じゃなければ……！」

ちよ、怖いからやめろ！

イーブイ

「それにしても、あのレディアンすごくつよかったねえ……。どうして？」

ヨノワールさんも一緒だから、苦戦させるにはある程度強くしなくちゃなあ、と想着て。

その役割が何故にレディアンだったのかはわからぬ（え

エリー

「作ったのは貴方でしょう。」

そして、あの言動が妙に気に入ったからまた出したいなあ、とか思ってたたり。

エリー

「えっ！」

ツノ山で出てきた3バカ

『でも、作者の「また出したい」は当てにならないからなあ（、・、（『

後書きで出てこれたんだから文句を言うな。

ツノ山で)ry

『出番でこのことかよ!?! しかも名前がきちんと書かれてn(強
制終了)』

時間がないのでこの辺で!
ではまた次回です!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338h/>

ポケモン不思議のダンジョン 探検隊スカイズの物語

2011年12月11日09時45分発行